

まいぶん講座フォーラム報告2

弥生時代の 北陸を探る

—考証 八日市地方遺跡とは—

石川県小松市教育委員会



序

本書は、「まいぶん講座」の成果報告集第二段にあたります。今回報告する内容は、平成18年度に八日市地方遺跡出土品984点が石川県指定有形文化財として指定を受けたことを記念して開催した、外部講師2名による特別講演会と北陸に焦点をあてて八日市地方遺跡の役割について討論したフォーラムを収録しています。八日市地方遺跡に関する報告会としては、平成14年度に八日市地方遺跡報告書刊行に伴い実施した「まいぶん講座」の発端になるフォーラムがあり、それから数えると2回目にあたります。八日市地方遺跡の出土品が石川県指定有形文化財の指定を受けたことは、八日市地方遺跡の重要性を再認識・再評価する良い機会を持てたものと考えております。

八日市地方遺跡は、北陸を代表する遺跡であり弥生時代の生活様式を物語る全国有数の遺跡であります。本書が、八日市地方遺跡に対する理解を深めていただく一助になればと願っております。

最後になりましたが、講演をしていただきました金関恕先生、石川日出志先生並びに、フォーラムに参加していただきました赤澤徳明先生、笹澤正史先生には、お忙しい中を本書の刊行に尽力賜りまして、まことにありがとうございました。心より感謝申し上げ御礼の言葉といたします。

平成21年3月

小松市教育長 吉田 洋三

例　言

1. 本書は、小松市教育委員会が小松市第一地区コミュニティセンター2階多目的ホールにおいて開催した、平成18年1月21日（日）第17回まいぶん講座、平成19年1月21日（日）第18回まいぶん講座、平成19年2月18日（日）第19回まいぶん講座で行われた、八日市地方遺跡県文化財指定記念特別事業の成果報告書である。
2. 本書は、各講演の録音テープを活字化したものに対し、報告者本人が校正する方法で文章化したものである。よって、当日の発言内容そのままではないことを、ご了承いただきたい。なお、本書の編集は下濱が行った。
3. 挿図については、当日配布資料をもとに発言内容に沿って再配置したものである。
4. 資料編に掲載したものは、石川県指定有形文化財に指定された未報告資料及び近年の整理作業で抽出した重要遺物である。なお、この執筆に関しては、石器、玉類を宮田、その他を下濱が行っている。

報告者および座談会発言者

1. 第1回八日市地方遺跡県文化財指定記念特別講演会
「弥生環濠集落とはなにか」
講師 石川日出志（明治大学文学部教授）
2. 第2回八日市地方遺跡県文化財指定記念特別講演会
「弥生時代の祭りの伝統」
講師 金関 怨（大阪府立弥生文化博物館長）
3. 八日市地方遺跡県文化財指定記念フォーラム
「弥生時代の西と東」
報告者 赤澤 徳明（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター主査）
 笹澤 正史（上越市教育委員会生涯学習推進課主任）
 下濱 貴子（小松市教育委員会埋蔵文化財調査室調査員）
座談会進行 望月 精司（小松市教育委員会埋蔵文化財調査室担当参事）

当日の日程

1. 平成18年12月17日（日）第17回まいぶん講座
第1回八日市地方遺跡県文化財指定記念特別講演会
「弥生環濠集落とはなにか」 講師 石川日出志
13:30 開会の挨拶 小松市教育委員会教育長
13:40 講師紹介
13:50 講演
15:20 質疑応答
15:30 閉会の挨拶 小松市埋蔵文化財調査室長
2. 平成19年1月21日（日）第18回まいぶん講座
第2回八日市地方遺跡県文化財指定記念特別講演会
「弥生時代の祭りの伝統」 講師 金関 怨
13:30 開会の挨拶 小松市教育委員会教育長
13:37 講師紹介
13:40 講演
15:15 質疑応答
15:30 閉会の挨拶 小松市埋蔵文化財調査室長
3. 平成19年2月18日（日）第19回まいぶん講座
八日市地方遺跡県文化財指定記念フォーラム「弥生時代の西と東」
13:00 開会の挨拶 小松市教育委員会室長
13:05 報告1「福井県における弥生時代の集落様相」 赤澤 徳明
13:45 報告2「新潟県における弥生時代の拠点集落の変遷—上越地域
を中心として—」 笹澤 正史
14:35 休憩
14:50 報告3「石川における弥生時代の拠点集落について」下演 貴子
16:00 座談会「八日市地方遺跡の北陸における役割について」
司会進行役 望月 精司
17:00 閉会

目 次

序

例言

目次

成果報告1 第17回まいぶん講座

第1回 八日市地方遺跡県文化財指定記念特別講演会

「弥生環濠集落はとはなにか」 石川日出志

成果報告2 第18回まいぶん講座

第2回八日市地方遺跡県文化財指定記念特別講演会

「弥生時代の祭りの伝統」 金関 惣 37

成果報告3 第19回まいぶん講座

八日市地方遺跡県文化財指定記念フォーラム 「弥生時代の西と東」

報告1 福井県における弥生時代の集落様相 赤澤徳明 70

報告2 新潟県における弥生時代の拠点集落の変遷—上越地域を中心

として— 筑澤正史 92

報告3 石川における弥生時代の拠点集落について

下濱貴子 116

座談会 八日市地方遺跡の北陸における役割について 142

文献一覧 164

資料編 165

成果報告 1

第17回まいぶん講座

第1回 八日市地方遺跡県文化財指定記念特別講演会

「弥生環濠集落とはなにか」



報告 1

弥生環濠集落とはなにか

石川 日出志

1. はじめに

皆さん、こんにちは。明治大学の石川です。今日は、「弥生時代の環濠集落とはなにか」という題でお話をいたします。話の骨子については、小松市教育委員会の方のお骨折りにより、皆さんのお手元に冊子としてご用意いたしました。

わたしは、この八日市地方遺跡の出土資料を何度か観察させていただき、特に土器については二十数年来の自分の疑問が解けたと感じました。しかし、今日、午前中に今回の博物館での特別展で、あらためて土器や、石器や、木でできたさまざまな道具を総覽してみると、八日市地方遺跡というのがこんなにすごい遺跡であったのか、とあらためて感じ、驚いた次第です。皆さんも、ナマの資料がもつ迫力、魅力を感じ取っていただければありがたいと思います。



2. 八日市地方遺跡を探る歩み

今日お話ししますのは、八日市地方遺跡をはじめとして、その時代、つまり弥生時代のムラの様子のことについてです。個人的見解を含めてお話ししようと思います。いや、そうではなくて、日本の考古学界で誰もが承知している話をしろ、というふうに思われるかもしれません。しかし、8割は日本の考古学界の定説となっている部分で、のこり2割が個人的な意見だとお考えください。そのように申しますと、もしかすると2割はまゆつばかな、とお思

いになるかもしれませんね。例えば今日は2000年余り前の八日市地方遺跡のムラの姿や、その時代の話ですが、遺跡から掘り出された生の材料から復元しています。つまり確実な材料を使っています。ところが、そこから復元された生活がどのようなもの。これを復元するのは、今、生きている考古学者なので、いろいろな意見があり得るのです。8割は合意、残りの2割はそれぞれ意見が違う。こういうものです。これは、べつにいいかげんなことではありません。現在のことを考えれば当然です。皆さん、今、現在、世の中で、この日本で、石川県で、小松市で何が起きているか。皆さんほぼ同じ情報をお持ちのはずです。でも、受け止め方、考え方というのは、8割は同じでも残りの2割は意見が違うのではないかと思う。2000年前の話も同様なのです。

さて、わたしは、日本の考古学でも、弥生時代を特に中心に勉強しております。例えば弥生時代の土器にどんなものがあるのだろうかと、『日本土器事典』という分厚い本を開きますと、そこには「小松式土器」という項目が入っています。図面付きで解説されています。

それから、今から30年以上前になりますが、私が大学に入ってすぐ、旧石器・縄文・弥生時代と、日本の考古学をきちんと勉強しようというので、その名の通り、『日本の考古学』という全7巻の本を毎月1冊ずつ読み進めました。その弥生時代の巻に小松式土器のことが出てきます。その項目を書かれたのは、今日、会場においての橋本澄夫先生です。

このように小松式土器というのは、弥生時代を知る上で重要なキーワードになっています。その小松式土器の小松とは、言うまでもなくこの小松市のことです。実は考古学の世界では、ある重要な事実が見つかったとき、そのきっかけになった遺跡の名前を付けるという約束事があります。例えば、縄文時代と古墳時代の間をつなぐ時代の土器があることが、今から110年ほど前に分かりました。最初に見つかったその土器が、現在の東京大学の裏手にあります弥生町向ヶ岡貝塚というところなので、その地名を取って弥生町の土器、弥生式土器、そして弥生時代という名前がつきました。考古学では、新しい認識ができるきっかけになった遺跡の名前を付けて、何々時代とか、

八日市地方遺跡記念講演 1

何々式土器とか、何々タイプの石器とかと呼びます。この小松式土器というのは、八日市地方遺跡の採取資料、発掘資料がもとになっています。ただし、本来であれば「八日市地方」式土器が考古学の流儀に従った名前なのでしょうが、小松市の名をとって小松式土器と表現されるようになりました。

この小松式土器は、今日、展示室にたくさん並んでおりますけれども、ぜひ展示室の最初のコーナーにある資料を、ぜひご覧ください。地元の後藤長兵衛さんごとうなしえという方が採取された資料が、破片で 20 点ほどあります。小松式土器という名前が生まれ、北陸の弥生文化を探る糸口さじはらそじけとなった資料です。名前を付けたのは、私の恩師である杉原莊介先生です。もう 23 年前に亡くなられましたけれども。

杉原先生は、全国の弥生文化研究の体系をつくろうと考えて、北陸ではこの遺跡をどうしてもというので、昭和 25 年に三日間ほど発掘しました。現在、明治大学にそのときの発掘資料がありまして、僕も学生時代からよく見ています。土器の小さな破片が十数点です。あと、緑色の玉をつくるための原材料が数点と、非常にわずかな資料です。杉原先生は小松式土器と名付けたいのですが、自分が発掘した資料だけでは内容が判然としません。後藤長兵衛さんが、昭和 5 年以来、地道に採取されてきた資料がなければ小松式という名は生まれなかっただのです。

その後、この八日市地方遺跡の資料と同類の土器が北陸一円に見つかるようになります。私の出身地である新潟県でも、佐渡の国中平野や新潟の砂丘地帯くになかに点々と出てきます。とくに佐渡では発掘が行われまして、ずいぶん豊富な材料が出てきました。

ところが、研究の出発点となった八日市地方遺跡の材料は、後藤長兵衛さんや杉原先生発掘の資料や、さらに昭和 36 年に石川県考古学研究会で調査された資料はありますが、遺跡の全体像がなかなか見えないので、ずいぶん困りました。土器はどうにか各地で増えて様子がわかるようになったけれども、肝心の小松市八日市地方遺跡が分からぬ。土器の破片を見ると、どうもものすごい遺跡のように見えるのだけれども、遺跡の内容はまったく分からぬ。靴の上から足をかいているようなもどかしさを、ずっと感じていま

した。

ところが、平成5年以來8カ年にわたって小松駅の東側駅前一帯の発掘調査が、小松市教育委員会の皆さん方の大変ご努力を伴う調査が行われてようやく、いや初めて八日市地方遺跡の全貌が明らかになりました。

それは想像もつかない内容でした。弥生時代のちょうど中ごろ、年代を正確に示すのはなかなか難しいのですが、今から2300年前から2000年前ころまでの数百年にわたって継続的に営まれた4ヘクタール（4万平方メートル）ほどの大きなムラだということが分かりました。

そして、弥生時代では北陸でもっとも中心となるムラであることが明らかになりました。そして、西は丹後半島から山陰方面、東は新潟県や長野県方面、南は滋賀県や愛知県、山を越えて岐阜県と東西南北方向に、数百キロ先の地域とさまざまな交流を重ねている様子もはっきりしました。

また、住居が立ち並ぶ居住域の周囲に濠がめぐらされるムラだということも分かりました。それを考古学者は環濠集落かんごうしゆらくと呼んでいます。これは、弥生時代を最も特徴づける、縄文時代にもない、古墳時代にもない、弥生時代ならではのムラの姿です。その八日市地方遺跡の具体的な姿については、展示や教育委員会の方々のご説明のほうがはるかに分かりやすいので、弥生時代の近畿地方など、九州から関東までの材料を取り上げながら、この環濠集落かんごうしゆらくというのはどういうものかを、これからお話したいと思います。

3. 弥生時代とは

さて、環濠集落の姿がどんなものかが一目で分かる一番いい材料として横浜市の大塚・歳勝土遺跡を図示しました（第4図参照）。これは、八日市地方遺跡と違って、台地の上にある遺跡です。小さな丸が群集しておりますけれども、これが竪穴住居です。一時期20軒から30軒程度の竪穴住居がありますから、例えば25軒で、一軒に5人が住んでいたとすれば125人となります。一時期、百数十人が二十数軒の家に分かれて住んでいます。2万3000平方メートル（2.3ヘクタール）ですので、八日市地方遺跡の全盛期よりも二回りほど小さい規模だと思います。

八日市地方遺跡記念講演 1

この堅穴住居が群集する周りに、底で幅1～2メートル、上の方では、幅が3～4メートル、深さが2メートル程度の濠がぐるっと1周します。一度埋まってしまふとまた掘り直しています。環濠集落は、日本の歴史を見渡すと、弥生時代に一番特徴的です。八日市地方遺跡は、北陸を代表する集落ですが、このような、ある地域の中心となるムラというのは、だいたい濠をめぐらします。これが、どんな意味を持つのかをこれから見ていきましょう。

私は、大学の教員ですが、時々わざと難しい話を挿入します。と言いますのも、最近は、学生が教員をあまり尊敬しないものですから（笑）、煙に巻くために、難しい話を混ぜます。時々、その癖が出ますので、そのときは「ああ、大学ではこんなふうにやっているのか」と思ってください。

まず、弥生時代はどんな時代なのか、ということから始めましょう。日本の考古学では、奈良・平安時代以後は、もちろん考古学的データは使いますけれども、文字資料を使って時代を語ることが多いわけですが、それ以前になりますと、ほぼ考古資料だけでその時代の姿を描くことになります。

弥生時代というのは、縄文時代と古墳時代をつなぐ時代です。どういう特徴の時代かと申しますと、旧石器時代とか縄文時代とでは、イノシシやシカを主とする動物を弓矢で、槍で、あるいは落とし穴などで獲る。また魚介類をとり、野山の恵みを採取する。ドングリを集め、クリなどはほとんど栽培といってもいいくらいに管理して育て、実を集め、貯蔵し、主たるカロリー源にしています。ともかく、四季折々の自然の産物を手に入れて、生活を組み立てる時代でした。そは、食料を四季の恵みに依存する生活は、次第にそのウエイトは低くなるとしても、現在までずっと続いています。弥生時代が縄文時代と一番違うのは、米づくりを始めるということです。畠作もおこなうようになりますが、一番重要なのは稲作です。

稲作には、自ら植物を栽培して食べ物をつくり出す、あるいは、現在に至る米を食べる生活が始まった、というだけではないものがあります。これはこのあとお話ししますけれども、稲作がもとになって、自分たちの社会の仕組みまで変わるようにになります。それが、やがて日本列島に古代国家ができる道筋となります。世界の多くの国は、だいたい農耕を初めて、農耕をしな

がいろいろな社会の仕組みを変えていって、国というものができるという道筋をたどっています。日本の場合も同様だということになります。

ところが、この弥生時代にはもう一つ重要な点があります。と言いますのも、弥生時代というのは稲作を始めた時代なのですが、稲作をおこなったのは、九州・四国・本州の範囲です。北海道は稲作をしません。イネというのは亜熱帯性の作物なので育たない。ここは縄文時代以来の生活を改良して、続縄文文化という別な文化が展開するようになります。沖縄は、後期貝塚文化です。台風が多いことが影響していると思うのですけれども、暖かいのになぜか稲作はやらない。稲作をやるのは平安時代になってからで、縄文時代の生活が改良された文化が存続します。その結果、日本の中では国家形成の道を歩むけれども、北と南ではこれとは別の歴史の道を歩むことになります。沖縄方面は、やがて本州が中世の時代に貿易立国で国家をつくり上げます。つまり、弥生時代に、日本列島のこの三つの島に弥生時代の文化が成立することによって、それまで考古学者が縄文時代の文化と呼んでいるこの日本列島の文化が、三つの文化の領域に分かれる。これはやがて、北海道ではアイヌ文化、アイヌの人たちの文化、沖縄では琉球の文化という、三つの歴史の道ができ上がることになります。

弥生時代の社会の一番根本となるのは、稲作であるということでありますので、まずそこからお話をいたします。

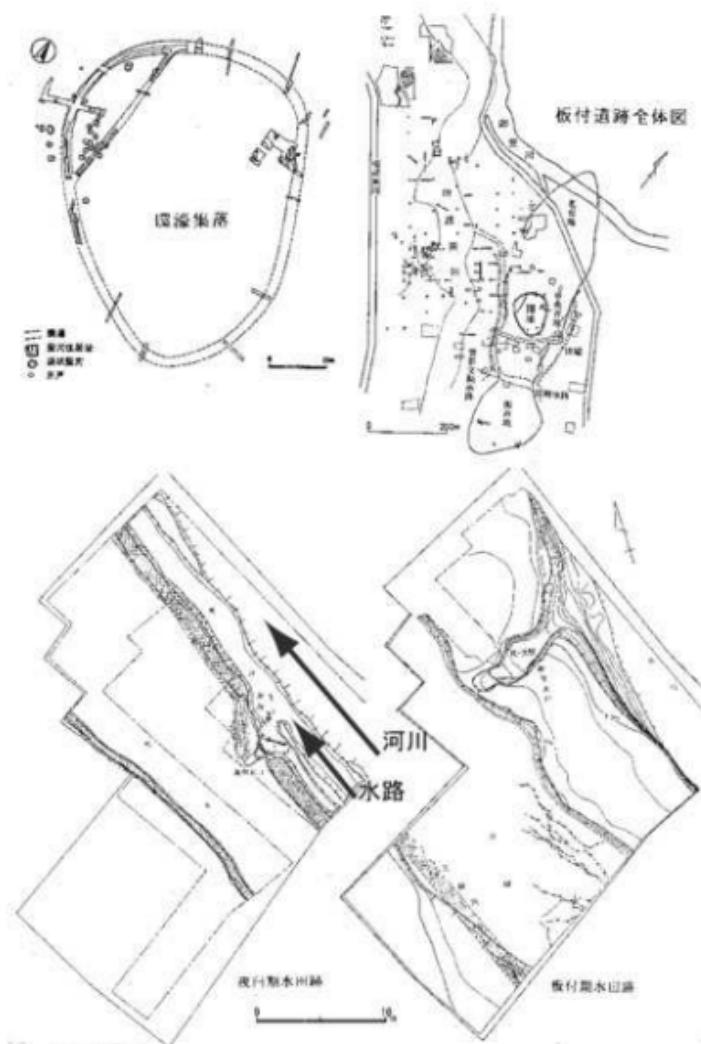
弥生時代に米づくりが始まったと言いましても、日本列島の人々が自ら野生のイネを栽培して米づくりを始めるようになったわけではありません。稲作を始めたのは、現在は、中国のかつての揚子江、現在は長江と呼ばれていますけれども、中国の南の方で確実なところでは今から約8000年前には始まっている、断片的な資料では1万年前まで遡る可能性もあるようです。

つい最近、発掘調査報告書が出た中国の湖南省、長江の中流域にある八十大遺跡です。ちょうどこの八日市地方遺跡と同じぐらいのサイズのムラが、8000年前に長江流域にある。ムラの周りにこういう濠が二重三重に回っているということが、すでに分かっています。そこから米がたくさん見つかってきております。稲作をする大きなムラができ上がっています。この長江中・



下流域で稲作が始まったというのが、現在の考古学界の定説です。かつては、農学の分野の先生方は、中国の雲南省、あるいはアッサム、インドネシア半島の付け根の部分で稲作が始まったのだろうと考えていたのですが、どうも違うようです。そして、この長江流域からいろいろなルートで、現在は、一番可能性が高いのは、北回りで日本列島に入ってきた。特に北部九州に稲作技術が伝えられた。それは今から 2500 年あまり前。つまり、中国で稲作の上限が 1 万年近く前に遡るということになりますと、日本列島に稲作が伝わるまでに 7500 年間。つまり日本で僕らは稲作、米を食べる生活は当たり前に思っていますけれども、それはわずか 2500 年前で、その 3 倍もの長い間、大陸側で稲作の技術改良が行われたものが、日本列島に持ち込まれたことになります。そのために、弥生時代の遺跡を発掘して、当時の稲作の様子を見てみると、僕が子どもだったころ、まだ小学校時代は田植え休み、稲刈り休みというのがありましたけれども、トラクターを使う点を除けばほとんど弥生時代と変わらないように感じます。収量は今の 10 分の 1、1 反当たり 1 俵あるかないかというぐらいの収量なのですが、技術自身はあまり変わっていない。つまり、完成したものが中国から持ち込まれています。

例えば、これは福岡県の福岡市内にある板付いたづけという遺跡です。今、日本で

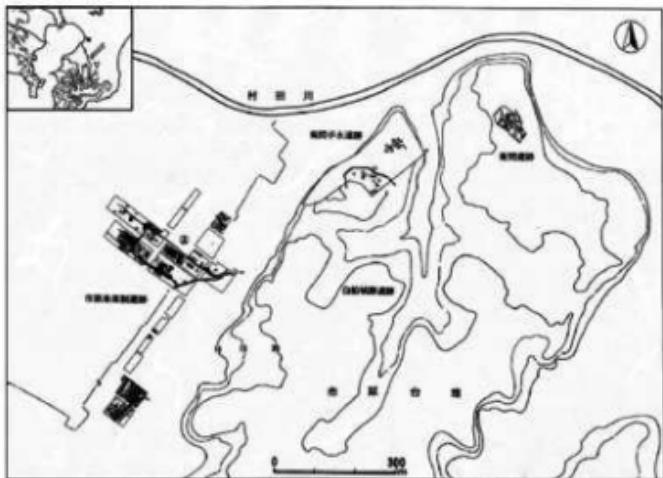


第2図 日本最古級の環濠集落と水田・福岡市板付道路・早期～前期(山崎 1979)

八日市地方遺跡記念講演 1

一番古い時代の水田跡です。環濠集落とありますが、台地の上にムラがありまして、発掘すると、その脇に田んぼが出てきました。川だと水量が多すぎ、管理が難しいので、それとは別に並行して人口の水路を掘削し、そしてその脇に土手状のものを築き、それに並行して畦をつくり長方形に区画する。そして、この水路に堰をつくって、田んぼに水を取り入れる。田んぼから水を落とすときは、水口を切って、堰も取り払って、水位を下げて水を排水する。堰で水位をコントロールして、取排水しています。これが灌漑稻作です。最初から灌漑をやっています。

次に、八日市地方遺跡と同じ時代のムラと田んぼの実例を紹介します。一番良い例が千葉県の例です。標高 20 m あまりの台地上に環濠集落が点々とあります。その台地西側の低地の部分に、南北 700、800 メートル、東西 300 メートルほどに及ぶ広大な水田域をつくっています。そこには水路が張り巡らされています。おそらくは、現在の村田川方面から水路を引き、さらに枝水路をつくって、この一帯の水田を經營しています。もちろん、これは一時期に全部一面イネをつくっていたわけではありません。連作障害を防



第3図 千葉市市原台地北部の中期集落と水田（石川作成）

ぐために休耕田も当然同時期にはありますので、実際に使っている田んぼはこの半分ぐらいというふうに考えた方がいいと思います。問題は、これだけの広大な田んぼを誰がつくっているか。誰が経営するかということです。まだ調査していないところがありますけれども、少なくとも四つのムラが共同で、ここに田んぼを経営していると考えられます。つまり、これだけ広大な灌漑水田をつくるには、幾つかのムラが総出で開田工事をし、共同で管理維持・経営をする。その際、上流のムラが水を独占すれば下流のムラは困ります。ですから、大規模な米づくりを始めたために、ムラ同士の利害調整、意見調整をしなければいけなくなりました。一つのムラはもちろん、さらに幾つものムラを束ねる必要が生じ、社会の仕組みがどんどん変わっていくことになります。

次に、こういう本格的な水田稲作を始めた弥生時代のムラ、環濠集落の様子を見てまいりましょう。

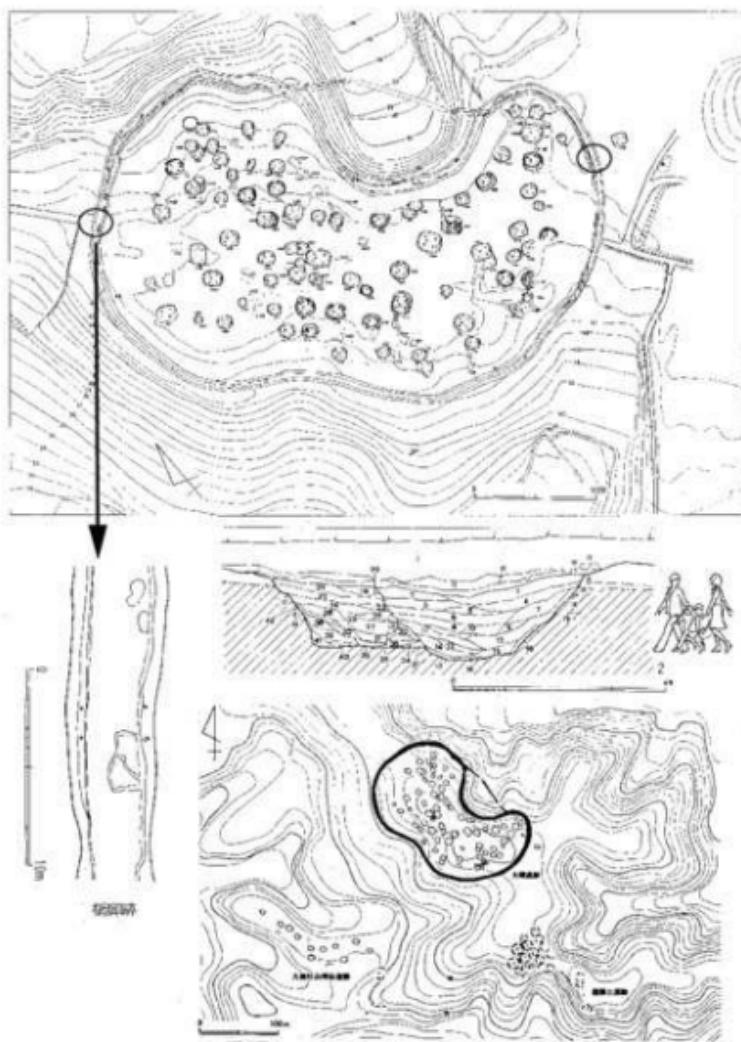
4. 環濠集落の実際

(1) 環濠の内と外

まずは八日市地方遺跡についてごく簡単にお話しします。小松市教育委員会の皆さんのが、現在のJR小松駅のすぐ東側一帯を足掛け8年にわたって発掘調査しました。調査区の北側に当時の川跡が蛇行しています。その川跡の南側、ちょっと高まった部分の自然堤防上に、東西約400メートル、南北約100メートルがあり、その南や東側に方形周溝墓という、四角く溝をめぐらしたお墓がつくられています。また、新幹線に伴う鉄道工事に先立つ調査では、この川の北側にもムラが拡がることが分かっていますが、全体でどれくらいの規模になるかはまだ不明です。ともかく、非常に大きなムラが弥生時代中期、200～300年間にわたって営まれています。

環濠集落にはどんな施設があるのかを、まず見てみましょう。八日市地方遺跡は長期間続いたために、いろんな遺構が折り重なって難しいので、もっと分かりやすい事例を見てみましょう。第4図は横浜市にある大塚・歳勝土遺跡です。

八日市地方遺跡記念講演 1



第4図 環濠集落の全容 [横浜市大塚・歳勝土道路・中期](安藤 1990・武井 1991)

まず環濠の内と外です。竪穴住居が立ち並ぶ居住域の周りに濠がめぐらされ、その外側にはお墓がつくられます。生きている人たちの生活の場と、死者の空間とを完全に分けています。その溝は、底が幅2~3m、上幅で4~5m、深さは調査時で2m内外あります。現代風の家族の絵と同じサイズを入れましたので比較してみてください。この濠を埋めている土を見てみると、この濠を掘って出たローム層土が外側から流れ込んでいるので、排土を外側に盛って土壁を築いているようだと分かります。従いまして、環濠という語は、ムラの周りに濠があるという意味ですが、実際には濠と土壁、それに柵が併設されることもあったと考えられます。その濠と土壁や柵に囲われた中に住居をつくります。居住域の建物は、竪穴住居と平地式か高床式の建物が所々に並びます。

ムラの周りが濠で完全に囲われておりますので、ムラへの出入りが問題となります。そうしますと、西端部分の環濠の中に四つ小さな柱穴が見つかりまして橋と考えられます。東端にもあります。そして、ちょっと目を細めて住居配置図をみると、二つの出入り口の間に、住居がつくられない空白部があるようにみえます。これは道です。当然のことながら、ムラの中には道があり、枝道もある。

それ以外にも、井戸があるはずですが、この遺跡があるのは台地の上なので、井戸は見つかりませんでした。おそらく谷の下のところに井戸か湧水があって飲み水を確保したはずです。

(2) 環濠の機能

それでは、ムラの周りを囲い、土壁を伴う環濠がどのような役割を果たしているのかを次に見ていくこうと思います。

さまざまな意見がありますが、その第一は防衛施設だという見解です。最も有力視されている意見ですが、批判もあります。これは、特に中・近世のお城を勉強されている方が弥生時代の環濠集落を見ると、「こんなものは防御にならないよ」と必ず言うのです。大塚・歳勝土遺跡では濠の外側に土壁がありました。思い浮かべてください。お城の周りに濠と土壁がめぐってい

八日市地方遺跡記念講演 1

ますが、土塁は濠の内側にあります。したがって、敵が外側から攻めてきたときに、まず濠があって、その内側に土塁があるから、お城の中は攻めにくい。一方、弥生時代の環濠集落は、溝の外側に土塁がある。「これでは防御にならないよ」という意見です。

ところがよく見てみると、例えば、和歌山県御坊市にある堅田遺跡という弥生時代前期の集落では、とても環濠がよく残っていました。部分的な発掘なわけですけれども、直径百数十メートルの濠で囲われたムラがあります。これらは環濠が、一部2条ですが、3条あります。濠と濠の間にちゃんと土塁が築かれていたことがよく分かる例です。残念ながら上半分とか3分の2ぐらいは削平されてなくなっていますが、土塁があるははっきりしています。複数条の環濠の間に土塁がある、これが本来の姿なのです。

こうしたことから、わたしは、本来環濠集落というのは本来二・三重の濠をムラの周りにめぐらせて、その間に土塁を築くもののが、そのうちの外側の溝が省略される場合が多いのだと考えています。だから、大塚遺跡のように濠の外側に土塁がある例がでてくる。

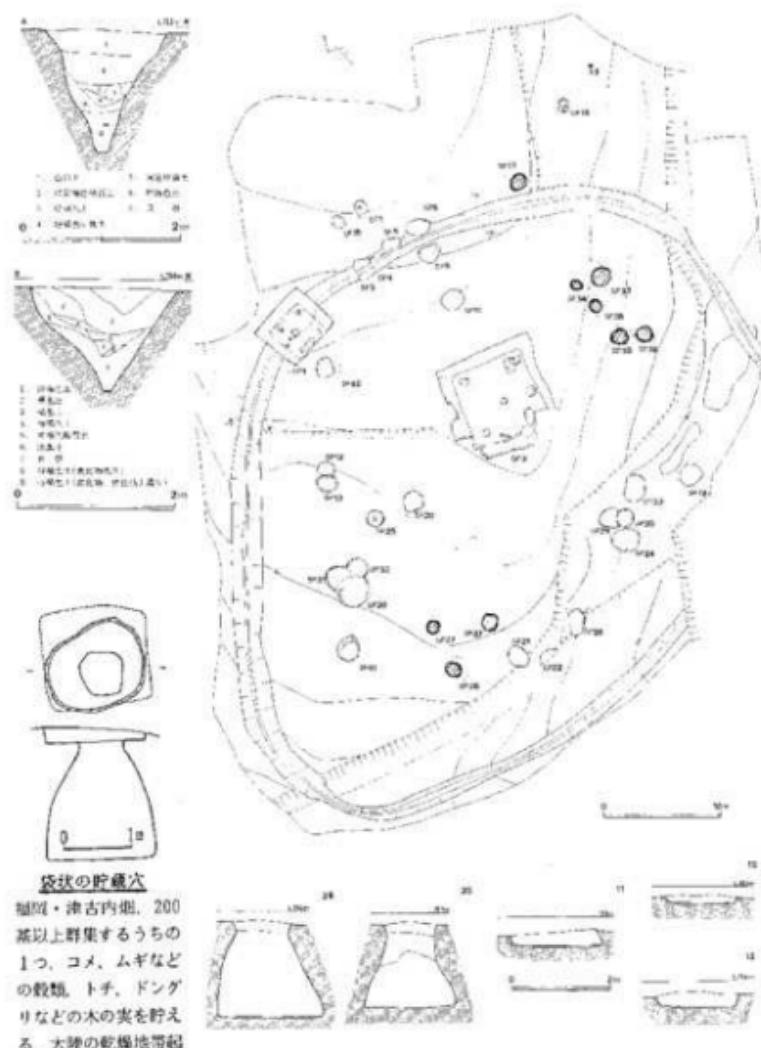
そうであれば、やはり防御にならないから防衛施設ではない。おかしいという意見が出てきます。それにも、わたしは反論します。常に防衛機能を發揮しなくともいいのだ。掘ること自体が大事なのだ、と。というのも、現代を考えれば分かりやすいのですけれども、だいたいこういう防衛施設、防衛、防衛に関する施設を持つというのは、外敵に対する実用機能があることは大事かもしれませんけれども、それ以前に外敵に対する防衛意識をつくるはたらきがむしろ大事なのです。弥生時代というのは、しばしば戦いもありましたけれども、常に戦いがあるわけではありませんが、組織的な戦いがあった時代です。実際的な防衛機能よりも、むしろそういう施設をつくって意識を高め、内部を結束する。これは現代を見ればすぐ分かることであります。

防衛施設だと僕は思うのですが、もう一つ意見があります。これは、村人を守るために施設ではなくて、例えば、福岡県の葛川遺跡など北部九州の弥生前期の環濠の場合、食料を害獣から守る専用の施設なのだという意見があります。これは、まるで地下をプラスコ形に掘ってつくった穴藏です。これ



第5図 土里も検出された環濠集落 | 和歌山県御坊市堅田遺跡・前期 | (川崎ほか 2002)

八日市地方遺跡記念講演 1



袋状の貯蔵穴

福岡・津古内畠、200
基以上群集するうち
1つ、コメ、ムギなど
の穀類、トチ、ドング
リなどの木の実を貯え
る、大陸の乾燥地帯起
源、前期。

第6図 環濠は貯蔵穴群を囲む施設か？ [福岡県糸田町葛川遺跡・前期] (酒井 1984)

がたくさん見つかり、その周りを濠が囲っているのに、住居がないのです。二つ四角い住居がありますが、これは全然時代が違う。この貯蔵穴も濠も前期のものです。だから、これは食料をイノシシなどが食ってしまわないよう設けた濠だ。また、湿気を抜き保存力を高める施設なのだという意見が九州であります。

僕はとんでもないと思っています。この遺跡から出てきた穴藏を見てみると、フラスコ形が本来の形です。ところがよく残っているものと、穴藏の底しか残っていなかったものと、二通りがあるのです。よく残っているものを見てみると斜面部です。平らなところに残っているのは、底近くまで削平されています。つまり、斜面部以外はおよそ1メートルから1.5メートルぐらいた削平されています。当時の竪穴住居というのは深さ数十センチですから、見つかるわけがないのです。本来、住居もあったはずであり、ムラの周りを濠が囲うというのが当たり前なんです。愛知県朝日遺跡の場合だと、環濠の外側に逆茂木、つまり木の枝や杭を突き刺して、まるで有刺鉄線のような役割を果たす施設が付随しています。

では、ムラの周りを囲う環濠の役割は防御だけだったのか、防御意識や内部結束を高めるための施設だけなのかというと、そうではない。他にもいろいろな役割があります。

環濠を掘りますと、土器とかいろいろな生活廃棄物がどんどん捨てられています。自分がせっかく掘ったのに、くぼみとなっているので、そこにどんどん捨ててしまう。ごみ捨て場のようにも使われているのが現実です。それから、ちょっと小高いところにある遺跡だと、水抜きのための施設としての役目も果たす。それから大阪府高槻市にある古曾部・芝谷遺跡では、陥しい丘陵の上にあり、掘り上げた濠を通路としても使っています。せっかく掘ったものですから、何にでも使うというのが環濠です。

(3) 環濠をもつムラの役割

それでは、こういう環濠をもつムラというのは、どういう集落かを次に見ていきましょう。大阪府の南部、旧国名で言いますと和泉という地区の弥生

八日市地方遺跡記念講演 1

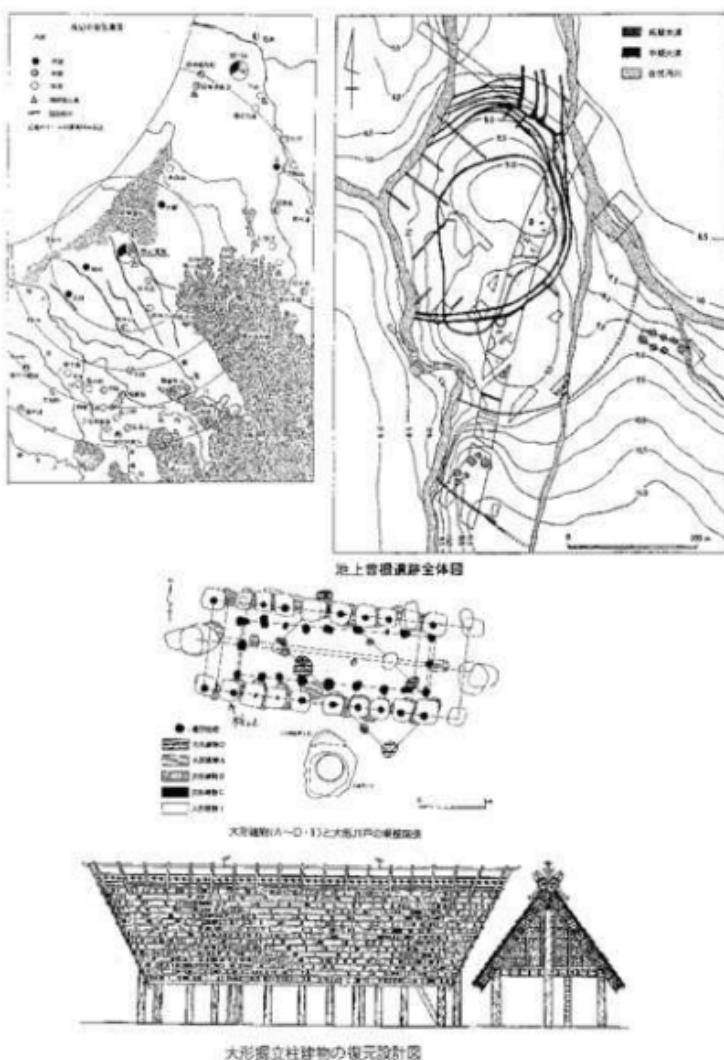
中期の集落分布をみてみると、大きな丸が弥生時代中期の八日市地方と同じ時代の環濠集落です。5キロほど離れて二つ、それぞれ数十ヘクタールの非常に大規模な環濠集落があります。池上曾根遺跡と四ツ池遺跡です。池上曾根遺跡は、環濠が二重に囲われた直径200メートル、外側の環濠を入れると300メートルもの非常に大きなムラで、都市だという意見もあるほどです。その周りに同時代の小さなムラが点々と分布しています。それぞれ一つの川の流域にいくつものムラが群集しています。流域の下流側の、この地域の条件のいいところに大規模な環濠集落ができる。つまりこれらのムラムラの中心となる、ムラだろうという想定ができます。

そして、弥生時代の人々は、豊作を祈るために祭りをやっていますが、その代表的なまつりの道具が銅鐸です。その出土地を見ると、例えば池上曾根遺跡と四ツ池遺跡のすぐ近くから出てくる。つまりそういう豊作を祈るような祭りというのは、一つのムラではなくて、この地域の祭りで、それを環濠集落でやるわけです。その地域の遺跡群、直径10キロぐらい圏内のムラムラを取りまとめる役割をしている。例えば池上曾根遺跡ですと、直径1メートル近い柱穴が並ぶ大きな建物が、1カ所に何回も建て替えられています。大阪府立弥生文化博物館がこの遺跡に建っています。その建物が復元されています。これは宗教的な施設です。ムラムラの祭りをおこなうための中心的な宗教的施設だろうと思われます。

奈良県の唐古・鍵遺跡では土器の破片ですが、壇の肩の部分に絵が描かれていました。屋根が二つ描かれ、屋根の棟の飾りがくるくると巻いており、屋根の上にS字が



第7図 横閣もあった?
[奈良県田原本町唐古・鍵遺跡・中期]
(藤田 2002)



第8図 環濠集落は地域社会の拠点 [大阪府和泉市池上曾根遺跡・中期]
(池上曾根遺跡史跡指定20周年記念事業実施委員会 1996)

八日市地方遺跡記念講演 1

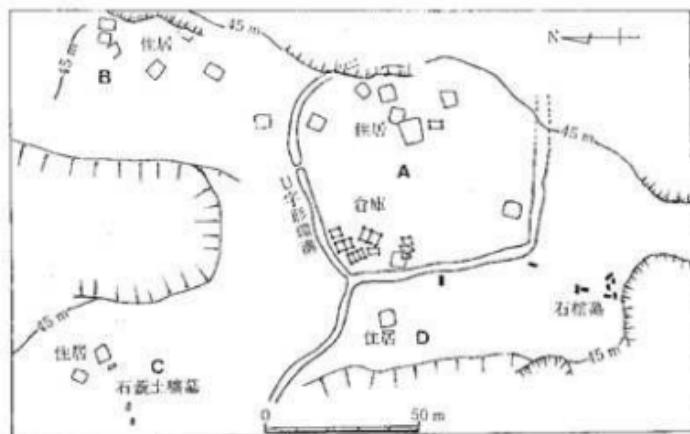
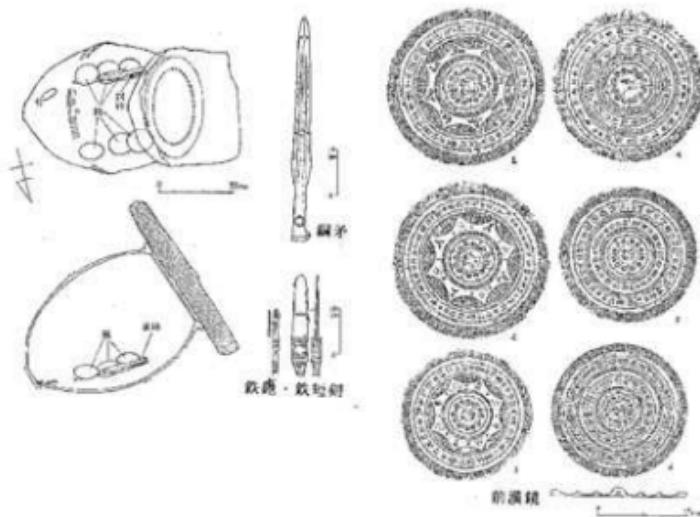
三つ描かれています。これは屋根に鳥が止まっている姿でしょう。この建物には梯子も描かれています。こうした2階か3階建ての高い建物も建っていましたようです。

これは紀元前1世紀、今から約2050年前の土器なのですけれども、中国に行きますと、ちょうどこの頃の時代のお墓に当時の情景がさまざまに描かれています。そこにこれとそっくりの絵があります。当時の中国にそういう建物があったことを知っているだけではなくて、この唐古・鍵遺跡でも建っていたと考えて、いま復元してあります。この紀元前1世紀というのは中国本土から朝鮮半島經由でいろいろな物資や情報がもたらされていますので、中国的な建物も、日本列島の各地に実在した可能性は十分にあると思います。

(4) ムラからクニへ

ちょっと話をすこし戻しましょう。それぞれの地域の中心となる大きなムラに環濠が備えられる。その役割は、実際に防衛機能を發揮する場面がなくとも、防衛施設としてみんなでつくり、内部を結束させるはたらきをしている。そういうお話をしました。ところが、ムラを溝を囲うというのはそれだけでなく、せっかく結束させたムラ人を分断する役割もどうも果たしているらしいということが分かっています。

九州の佐賀県千塔山遺跡では、高さ50メートル足らずの小高い丘陵の上に弥生時代後期のムラが築かれています。そして、住居が20軒ほどあちこちにあり、四カ所に固まっていまして、A～Dグループの4つにムラが分かれています。ところが、このAグループだけが四角く溝で囲われていて、ほかは溝が巡りません。もちろん周りが崖ですから、溝を掘らなくてもいいということかもしれません。しかし、注目したいのはAグループだけが溝で囲われている点です。溝は一ヵ所途切れしており、出入り口と見られます。そして、倉庫はAグループにしかない。つまり、この20軒ほどからなるムラは、この丘陵の下の低地で米づくりをしているはずです。その収穫物の管理はこのAグループだけを行い、Aグループがムラの中では優位な立場にある。おそ



第9図 階層化が進行する社会

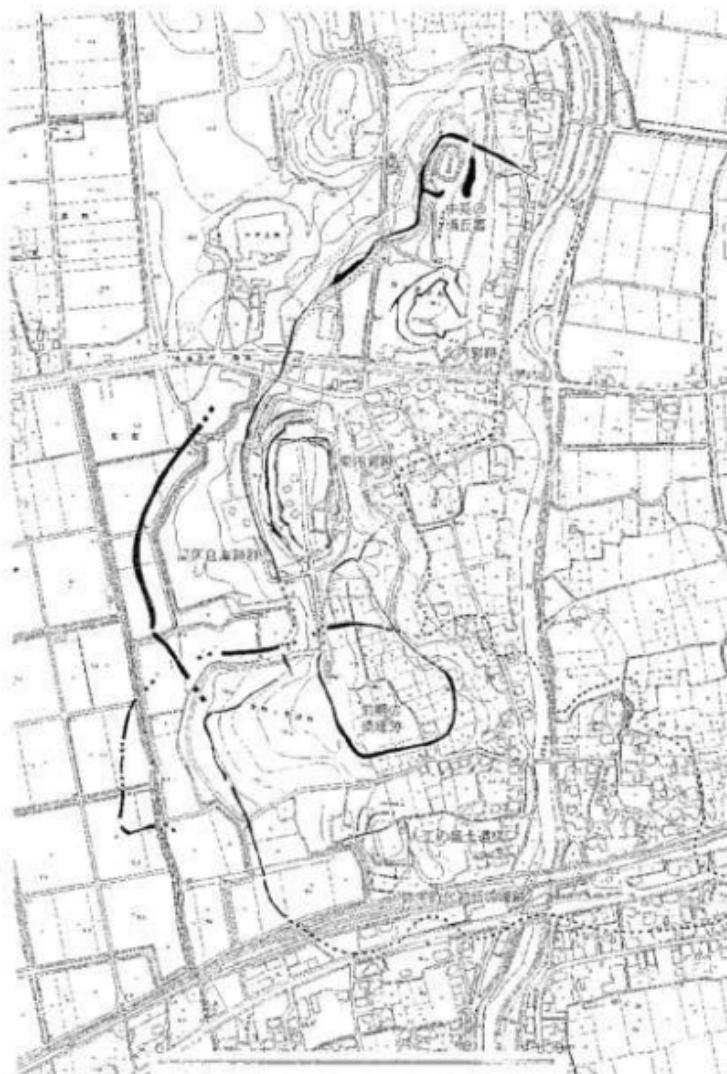
[上：福岡県飯塚市立岩 10号農耕・中期](立岩遺跡調査委員会 1977)
[下：佐賀県基山町千塔山遺跡・後期](下條 1986)

八日市地方遺跡記念講演 1

らくこの溝には土塁はないでしょう。柵はあるかもしれませんけれども、ほかのB、C、Dの3グループとは厳然とここを分ける。これは、北部九州でも比較的小規模なムラでさえこのような状態となっています。

大きなムラの場合は、もっとムラの中心人物が特別扱いをされるようになります。福岡県域では、死者を葬るのに特別に大きな土器の棺をつくり、その中に遺骸を埋める喪棺を用います。喪棺を発掘してみると、例えば飯塚市立岩遺跡の10号喪棺では、中国の前漢代、紀元前1世紀の直径15センチ内外の青銅鏡を6面副葬しています。一人が特別扱いをされる、特別優位な立場となる社会状態となっています。九州では、そういった人物たちが、当時、朝鮮半島の楽浪郡、現在の平壌付近にある漢帝国の出先機関を経由して、中国本土の政権と交渉をします。その様子が、例えば『漢書』地理志や『後漢書』、『魏志倭人伝』という中国側の歴史文献に記録されています。その『後漢書』の中に、後漢を再興した光武帝という皇帝のところに、倭人の奴国（現在の福岡付近）の国王がやってきたので金印をあげたという記録があります。江戸時代に、博多湾の沖合に浮かぶ志賀島で百姓の甚平衛さんが、田んぼ脇の水路を鍛で修理していたら、大きな石が出てきて、これをどけたらびかっと光るもののが出てきた。純金製の印鑑が出てきます。ヘビ形のつまみが付き、印面に「漢委奴國王」という文字がくぼんだ状態です。今のほんこというのは文字の部分が出っ張っていますがこれは逆で、大事な品物を入れた箱を封印するときに、紐の結び目に泥を置き、そこにこれを押して封印するものです。日本列島の倭人世界に「奴国」と呼ぶべきクニ、つまり政治的世界ができている。中国側が国、そして王と認めるようなものが九州に出てくる。こういう時代に、弥生時代の途中からなってきている。この金印の時期は弥生時代後期初めですが、佐賀県の吉野ヶ里遺跡ですと、ムラ全体を溝で囲うだけではなくて、その中の一部をさらに溝で囲って、そこに有力者がいるという状態になります。

ただ、ここで注意が必要なのは、国王と言っても、今、われわれが考える国というレベルではありません。福岡平野といつてもそれほど広くありませんが、これを中国側が国というふうに認識したということです。



第10図 佐賀県吉野ヶ里遺跡も環濠集落 | 前期～後期 | (佐賀県教育委員会 1994)

5. 八日市地方遺跡の重要性

さて、八日市地方遺跡に戻りましょう。この遺跡は、冒頭申し上げましたように、北陸を代表する環濠集落です。環濠集落というのは、それぞれの地域のムラムラの中核となる集落だと申し上げました。それでは八日市地方遺跡はどんな遺跡なのかをもう一度見てみましょう。

弥生時代前期、ちょうど八日市地方遺跡のムラが小さいながらもでき始めた時期であります。その時期はまだ、八日市地方遺跡は、環濠集落にはなっておりません。この時期の環濠集落というのは、愛知県朝日遺跡をはじめ、三重県、愛知県、滋賀県までしかありません。ところが弥生時代中期になりますと、太平洋側では、南関東まで東海道筋に点々と見られるようになります。日本海側も、佐渡の平田遺跡まで拡がりますが、その基点は八日市地方遺跡にあります。

実は、私の生まれ故郷の新潟県域では、弥生時代中期中ごろまでは縄文時代の伝統を色濃く引きずる文化だったのですが、八日市地方遺跡を標識とする小松式土器が新潟県域にまで進出する段階になると様子が一変します。八日市地方遺跡と同じ技術による玉つくりが佐渡や新潟県海岸部の遺跡でも盛んに行われるようになりますし、住居の形式も、方形周溝墓ひょうけいしゆこうぼという墓制も同じものに変わります。八日市地方遺跡で小松式土器ができ上がったように、北陸一円への新しい弥生文化の拡散はこの遺跡を起点とすると考えられます。太平洋側も、環濠集落がずっと関東まで広がる起点は朝日遺跡にある。

そして、八日市地方遺跡から出てくる資料、とりわけ土器などを見ますと、近畿北部や滋賀県域、愛知県や岐阜県方面の土器、それから長野県域の土器が見られます。新潟県の糸魚川近辺で産出するヒスイが持ち込まれている。山陰と同じ種類の顔面付きの土器があるなどなど、東西南北の広範囲の地域と継続的に交渉をやっており、周辺の情報が一手にここに集まっていることがよく分かります。

この八日市地方遺跡と朝日遺跡というのは、西日本の弥生文化と、東日本の弥生文化とのちょうど接点に位置します。つまり、西日本と東日本をつな

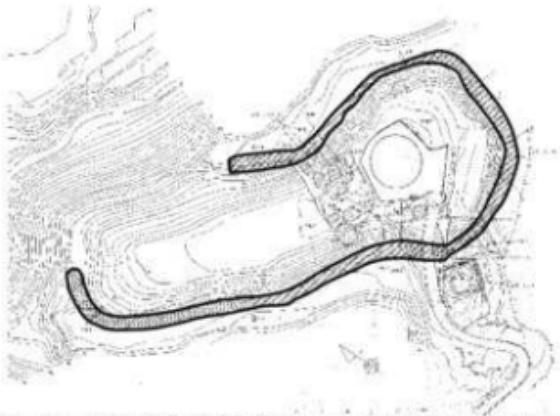
弥生環濠集落とはなにか

ぐ太平洋側の起点は朝日遺跡であり、日本海側の起点は八日市地方遺跡で、こういう役割の遺跡は、太平洋側に一つ、日本海側に一つしかないので。八日市地方と同じ時代の集落は、北陸一円にありますが、八日市地方遺跡のような役割をするのは 1 カ所だけです。この遺跡を見逃すと、東西日本の弥生文化がどのような関係であったのか、その実態はまったく分からぬといふことになります。

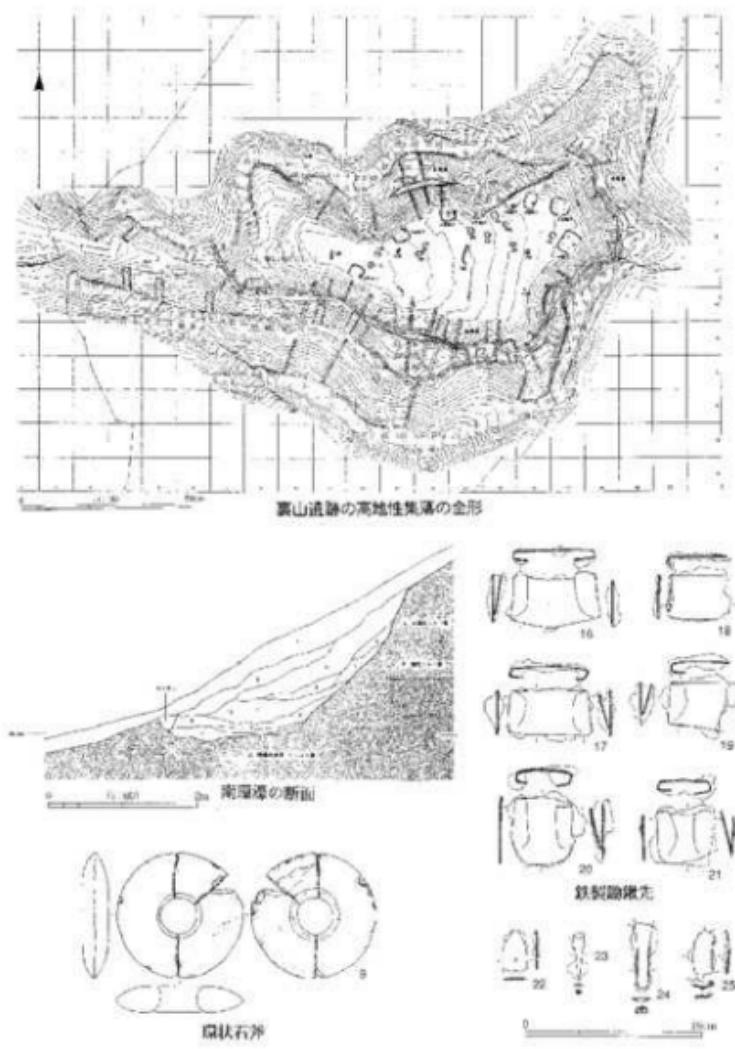
八日市地方遺跡は、今から約 2000 年前に、大きな環濠集落は姿を消します。縮小して、非常に小規模なものとなります。その後、北陸に環濠を持つムラというのはなくなったのか、ということを見てみようと思います。

弥生時代後期の環濠集落の分布をみてみると、太平洋側は中期とそれほど大きな違いはありません。ところが、日本海側ではかなり様子が違います。弥生時代中期には、新潟県方面では数ヶ所しかありませんが、後期になると新潟に点々と環濠集落が出てまいります。石川県も結構多い。富山県もぼつぼつある。中期よりも多いですね。環濠集落は弥生時代後期になってもある。

ところが、遺跡の様子が中期とはだいぶ違うのです。八日市地方遺跡は、ご存じのように沖積地の平野のど真ん中にあります。しかし後期の環濠集落はそういう沖積地ではなくて、旧鹿西町の杉谷チャノバタケ遺跡や元宇ノ氣



第 11 図 北陸の後期環濠集落 1|かほく市跡伏茶白山遺跡・後期
(かほく市教育委員会 2005)



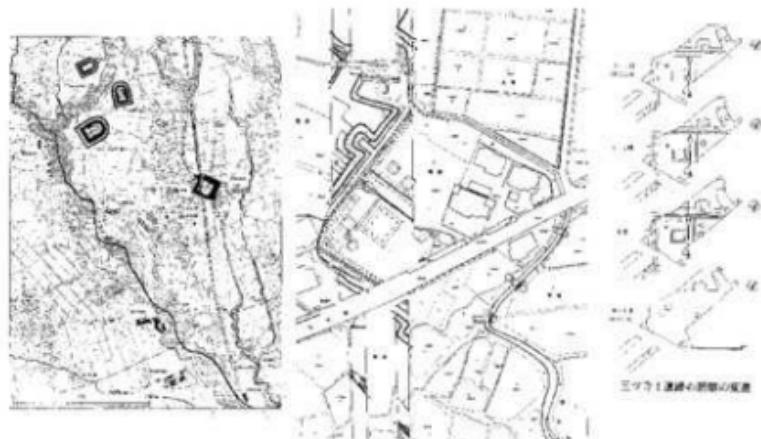
第12図 北陸の後期環濠集落2|新潟県上越市裏山道路・後期
(新潟県教育委員会 2000)

町の鉢伏茶臼山遺跡のように、丘陵の上に環濠集落をつくっています。

例えば新潟県の上越市（旧高田市）の裏山遺跡は、高田平野を眼下に見下ろす丘陵の上にムラをつくって、丘陵の斜面に環濠をつくり、頂上部分に住居をつくる。平場のムラもあるのですが、そこには環濠はつくらずに、山の上にあるムラだけに環濠をつくります。環濠を掘るために鉄板を折り曲げた鋤の先、つまりスコップの刃先がこの遺跡の発掘で点々と出てきまして、こういう鐵の刃先の道具で岩盤を掘削して、そして、まるで山城のようなものを作っています。

これはどういう役割のムラかと言いますと、山のてっぺんから平野のムラの本体の様子をずっと見ている。防御、まさしく本格的な防衛施設であります。敵の来襲があれば、すぐ狼煙で平場のムラに知らせる。こういう役割を果たすムラができ上がっている。高地性集落と呼んでいます。

これは弥生時代の終わりごろのことでありまして、『魏志倭人伝』とか、『後漢書』などには、西暦紀元後2世紀後半、後漢の終わりごろに、倭人の世界が大いに乱れたと記載がありますが、ちょうどその時代にあたりまして、そういう社会的緊張状態が弥生時代の終わり頃にあった。

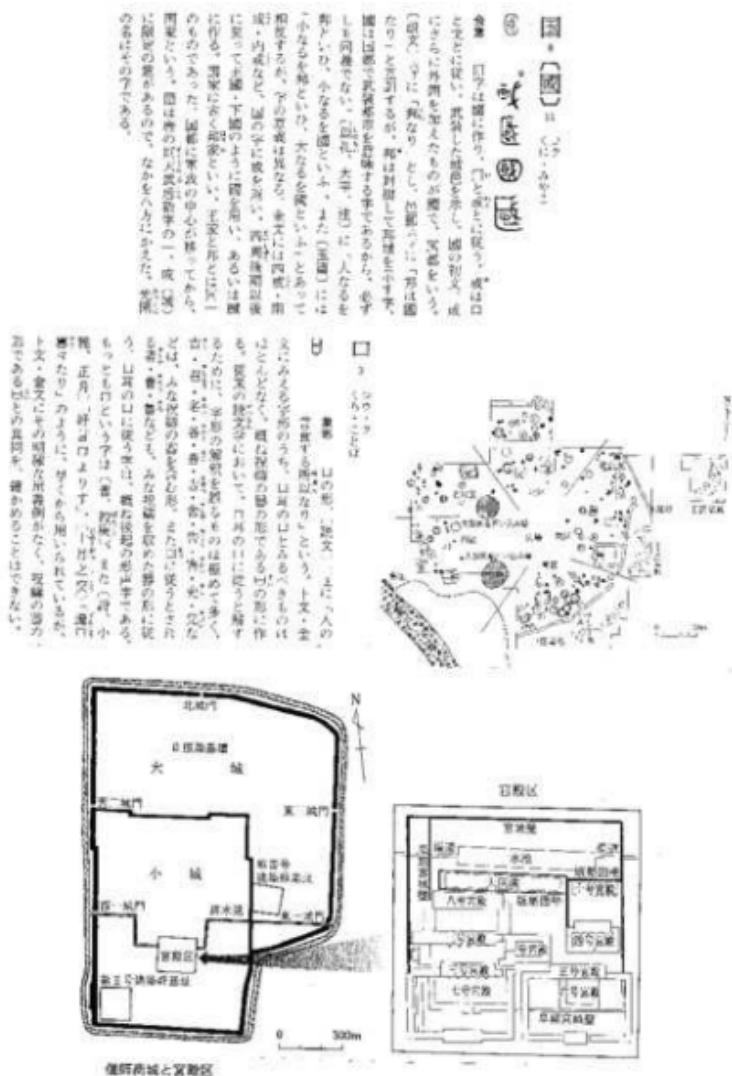


第13図 古墳時代の環濠は首長居館だけを囲う [群馬県高崎市三ツ寺1遺跡]
(下城正・女屋和志雄ほか 1988)

そういう争乱の時代を経て、古墳時代の社会ができ上がる。各地の最有力者というものが、厳然たる地位を持つ時代になります。古墳時代になると、環濠集落というのはなくなります。ところが環濠はあります。どういうことかというと、ムラを囲うから環濠集落というのですけれども、古墳時代になると、ムラは囲いません。群馬県高崎市の三ツ寺^{さんすい}遺跡^{いせき}の榛名山^{はるなさん}の南麓には、全長 100 メートル内外の前方後円墳が三つつくられます。この地域の最有力者 3 人の墓がありますが、その生前の居所が三ツ寺^{さんすい}遺跡です。一辺 80 メートルの館のような施設をつくり、その周りに幅 30 メートルから 40 メートルの濠をめぐらせる。地域の最有力者層の居所だけを濠で囲い、防御することになります。村人はどこにいるかというと、その周りを発掘しますと、あちこちにムラがあり、川沿いには田んぼがみつかります。この普通の集落の人々が水田経営をし、畠の耕作もします。牧場もあり、馬を生産しています。その人たちのところには防御施設はつくらない。つまり、環濠は弥生時代から古墳時代に受け継がれるけれども、集落を囲うものではなくり、環濠の性格がまったく一変してしまっています。

6. 環濠と国

最後にちょっとおまけの話です。この環濠集落の起源はどこにあるかというと、中国大陆です。先ほど冒頭の方で、今から 8000 年前の農耕の村落ですでに、4 ヘクタールほどのムラの周りを環濠が二重、三重に囲っているというお話をしました。中国では、その 8000 年前以来、長江（揚子江）流域でも、黄河流域、さらには中国の東北部でも、ムラの周りを濠で囲う環濠集落というのが、各地でつくり続けられます。例えば、黄河中流域の姜寨遺跡^{きょうさいいせき}は今から 7000 年前のムラですが、直径 200 メートルぐらいいのムラを濠が囲んでおり、その外側に墓地がつくられています。もう弥生の環濠集落と同じ構造のムラが、今から 7000 年前にできています。今から 4500 年ぐらいになると、濠の内側に非常に堅固な土壁を築きます。城壁と言った方がいいです。濠と城壁、これはもう完全な実用的防衛施設です。そして、やがて乾燥地帯の黄河流域では周りの濠がなくなって、城壁だけになります。中国



第14図 中国では環濠集落から都市、そして國へ(白川1994・宮本2005)

八日市地方遺跡記念講演 1

の都市というのは、「城市」と書き表すように都市の周りに城壁が巡ります。そして、その中の宮殿部分だけは、また特別に囲う。実は、こういう都市を城壁で囲う、あるいはその地域の中心部で囲うというのは、中国ではそれが文字でちゃんと活かされておりまして、「国」という字は、今は「玉」に囲みを入れますけれども、かつては中に「或（わく）」という字を入れています。先般亡くなられた白川静先生の『字源』から引用しますと、「旧字は國につくり、口（い）と或（わく）とに従う。或（わく）は、口（くち）と戈（か）に従い、武装した城邑（じょうゆう）を示し、それで國の初文。」とあります。この口というのは、一説では口、すなわち人を表すのですが、白川先生はそうではなく、「祝詞を入れる器」だと言っています。戈（か）は長柄の武器です。そして或という字を、さらに外囲いの口を加えたものが國です。つまり、國という字は、人々が集まり祝詞を入れる、つまり宗教的的な役割を担うものをその中に置き、それを武器で守り、城壁で囲ったもの、これが國だという訳です。

中国ではのちに國という字に表現されるように環濠集落が発展しましたが、日本ではまったく歩みが違います。つまり、先ほど申し上げましたように、弥生時代にはムラの周りを囲いました。ところが、古墳時代になると、一般の村人に囲いはつくらず、有力者だけが囲いをつくる形になりました。その伝統は、古代の7・8世紀にも受け継がれ、藤原京・平城京・平安京いずれも、本来は中国式の都なのですが、当然その外側に城壁をめぐらすはずなのに城壁がありません。アジアの都としては異例な形になっています。それは弥生時代・古墳時代以来の伝統があつてのことだろうと考えられます。

ちょっと何か、或という字で惑わすような話を最後にしてしまいましたけれども、わたしの話は以上です。

繰り返しますが、八日市地方遺跡というのは、これなくして東日本の、とりわけ日本海側の弥生文化の展開はなかった。そのことだけでも受け止めていただければありがたいと思います。

今日はどうもありがとうございました。

7. 質疑・回答

○会場1

石川先生は、新潟、越後の方だそうですけれども、わたしも越後へ行って、遺跡は見られませんけれども、資料館とか資料を読ませていただきますと、どうも越後のほうも八日市と同じようで、沖積平野の砂丘列の上にあるというのですか。越後の場合は縄文晩期の遺跡と、遺物と、弥生のものが非常にうまくきれいに共存して出土しているみたいですが、この八日市の場合は、縄文晩期の遺跡は出ていたのですか。

○石川

はい、ありがとうございます。僕の説明がちょっと足りなかつたかもしれません。新潟ですと、縄文の遺跡と、弥生の遺跡というのはまったく違うのです。まったく違うところにあるのです。縄文の遺跡がそのまま弥生につながることはできません。

○会場1

いや、晩期のですよ。

○石川

ええ、縄文晩期の遺跡の後に弥生の遺跡ができるということは、新潟にはありません。北部では晩期から弥生へと続くように見える遺跡もありますが、連続するかどうか定かではありません。僕は少し説明が不足だったと思いますけれども、縄文の遺跡とは別に弥生の遺跡が、石川県流のムラや土器づくりをするムラがこつぜんと出てきます。

○会場1

では、わたしはもういっぺん調べ直します。それでは、先生の最初のお話に、中国の揚子江では、7000年前、1万年前においしいお米があったの

八日市地方遺跡記念講演 1

に、日本にはせいぜい 2500 年か、今で言えば 2800 年ですか、時間差にして 6000 年ほどの差があるというこの理由と、いったん弥生のイネという文化が西北九州に後期として入ってきて、瀬戸内海を通って畿内で発展して、さらに東日本に波及するときに、また時間差があるわけですね。どれぐらいの時間差かは分かりませんけれども、1 世紀ぐらいの時間差があると。

そういう中で、では弥生の文化を受け入れた人が、現在で言えば留学生なのか、それとも中国大陸から渡来してきた人たちがやったことなのか。あるいは、東日本と西日本における 1 世紀の時間差も、例えば八日市地方においては、八日市地方の縄文の晚期の人たちが近畿へ行って、留学して、このおいしい米の文化を取り入れたのか。その辺のことは結論が出ないでしょうけれども、何か。

○石川

はい、分かりました。九州ですと、現在韓国の南の人たちが一定程度渡来しているということが最近分かってきています。土器から見ても、人骨から見ても渡来人がいて、そして技術を伝えている。ただ、渡来人だけで弥生文化ができたかと言うと、そうではありません。九州の縄文人と共同で弥生文化をつくっている。ですから、渡ってきた人が、地元九州の人たちに米づくりの仕方を教えるわけです。米づくりの仕方、ムラのつくり方、そういうのを伝授するわけです。

では、それが、渡来人がずっと近畿まで、この東日本までいて弥生文化ができたかというと、そうではないだろうと思います。九州の西日本の人たちが少しずつ来て、近畿も、東日本の弥生もでき上がる、リレー式だと思います。八日市地方遺跡の場合は、これはいろいろな考え方があるでしょうが、僕は、八日市地方の一番最初、弥生時代前期のものを見ると、縄文色が濃厚です。僕は、このムラは本当にここに生活拠点をつくるために、縄文時代以来、周りの山寄りに点々とムラをつくっていたと思うのです。その人たちが今までの生活、山と平野が一緒にあるようなところに生活していた人たちが平野のど真ん中に来て、今までとまったく違う生活の拠点をつくり始めた。

これが八日市地方だと思うのです。

○会場1

縄文晩期の場合、湖沼の近くには、先生は最初に食料採取のことと言われなかっただけでなく、漁労というのではなくかなりの食料源だと。

○石川

はい、漁労もやっているはずです。

○会場1

越後もたくさん漁労がある。

○石川

農耕に適した平地のど真ん中にムラを構えるので、縄文時代のように漁労を本格的にということではないと思います。この八日市地方の場合は、周りの縄文のムラムラが集まって新しいムラをつくり始めたのが八日市地方です。そこに漁労を得意とする人々もいたでしょう。さらにいろいろな地域の人たちが来て、情報交換して、弥生時代中期になると、爆発的にムラが大きくなる。どんどん、どんどん周りから人が、この周辺一帯から人々が集まって、どんどんムラが大きくなって、周りと交流を重ねて、ものすごい集落ができたと思います。

ですから、このムラがある近畿地方から集団がやってきてつくり上げたムラとかいうことではなくて、また、この地域の人々が近畿地方に、あるいは九州に行って何かを学んで帰ってきたとかということではなくて、この地域のこの一帯の人たちが集まってムラをつくり、人を呼んで、一部分非常に少數の人たちを呼んで、新しいムラ、新しい時代をつくり上げた。その過程が、この八日市地方でよく見える。僕はそんなふうに思います。

これ以外の、例えば、この辺に次場とか、石塚とか、平田とか、ほかのここ以外の、この一帯にある弥生のムラというのは、そういう過程を踏んでい

八日市地方遺跡記念講演 1

ません。縄文から弥生への移行がうまく説明できるのがないのです。八日市地方こそが、北陸の縄文から弥生への移り変わり、縄文人が集まって弥生化する、弥生になっていく、自ら変わるという過程が分かるのは、ここだけだと僕は思っています。福井県へ行きますと、糞置荘(こねおきのじょう)という遺跡があるのですが、その遺跡も同様です。その過程が分かるのは、今のところその二つではないでしょうか。ここよりも北は、八日市地方なくしては、弥生はなかったと思います。その辺の意味があります。

ちょっと説明がくどくなりました。

○会場 2

先日展示会を見せていただいたのですが、あそこにヒスイがあったのです。当然新潟の糸魚川のヒスイなのか、あるいは、そのヒスイが日本海文化と関係あるのか。例えば、縄文の黒曜石(くろようせき)と一緒にすれども、割と分かりやすいのではないかと思うので、お知らせ願えればと思います。

○石川

ヒスイは基本的に糸魚川、新潟県と富山県の県境、この一帯にしか採れない。類似した石は結構ありますけれども、純粹にヒスイと言われるのはここです。実際に八日市地方遺跡でもヒスイの製品も、ヒスイの加工もやっていますよね。ですから、あんな重たいヒスイを持ち込んで、かなり選別しているものだけを持ってきているのではないかと思いますけれども、ここでヒスイを加工しています。ですから、当たり前にここを行ったり来たり、普通にしていると思います。新潟との結び付きはあります。ありがとうございます。

○司会

今日、この会場に石川考古学研究会の会長でいらっしゃいます橋本澄夫先生がいらっしゃっております。先生、すみません一言コメントをお願いいたします。

○橋本 澄夫

石川考古学研究会の代表を仰せ付かっている橋本です。石川さんと同じ大学で、同じ先生から考古学を教わったものであります。ちょっと僕の方が古びております。

八日市地方遺跡の遺物をわたしが初めて見たのは、昭和30年ごろのことだと思っています。後藤長兵衛さんという発見された方のお宅で、土器片などの採集品をみせていただきました。土器の特徴は、櫛のような施文具で描いたような模様が付いているので、当時は櫛目紋土器と言っていました。今では櫛目と言わずに櫛描文と言っております。これは中期の土器の一つの大特色であります。そういう土器があって、その土器と同じものが明治大学にちょびりある。それは杉原莊介先生に、「橋本君は石川から来たのだが、小松の遺跡を知っているか。あそこの遺跡の資料があるから」というので見せていただいた。ほんのちょびりで、ボール箱に納めてありました。管玉くわたまきが1点ありました。それが最初です。

そういうことで、その当時、昭和20年代の終わりから昭和30年代の初めごろというと、石川県内で弥生土器というと、小松遺跡（八日市地方遺跡）のほかに羽咋市内で幾つかの弥生土器らしいものがあるという程度であります、あとは知られていなかったのです。

杉原先生がなぜ昭和25年7月に八日市地方遺跡を掘られたかと言うと、その前の段階で静岡県の登呂遺跡を掘っておられる。先生は登呂遺跡の発掘の中心的なメンバーでありますけれども、杉原先生は、特に弥生土器を中心として担当されて、この土器はどんな土器だということで、周辺地域の弥生土器のことを調べられたのですが、どうも日本海側では、小松駅の裏側の水田で発見された遺跡しかほとんどないというので、日本海側の遺跡の代表例として、北陸の弥生土器というのはどんなものがあるのかということを、学生さんたち数人と、わずか四日間の発掘調査をやられた。私が大学の研究室で見せて頂いたのは、その時の出土品でした。

土器は、近畿地方、西日本のほうにある櫛で描いた、今でいう櫛描文土器の仲間であります。それで、わたしどもは、最初、石川さんが言われたけ

八日市地方遺跡記念講演 1

れども、『日本土器事典』などで小松式土器と書いておるのですが、最初のうちはちょっと迷いました。なぜかと言うと、金沢式土器とか、福井式土器というのではないのです。都市名をそのまま付けた言い方はしない。もうちょっと小さな地名で、遺跡の名前を付けるのです。ですから、八日市遺跡とか、八日市地方遺跡とかが普通の呼び方ですが、ちょっと長くなってしまう。それともう一つは、そういう遺跡の名前を付けたのなら、せっかくの小松の名前が出てこないのは、どうもわたしには物足りなかった。そこで、杉原先生とも相談した覚えがあるのですが、小松式土器として通しましようや、ということになった。そういう経緯があって小松式土器となったのです。

石川さんのお話で、ずいぶん小松の八日市地方の重要性、性格がよくわたくしでも教えていただいたわけですが、ひとつ、皆さん方、どうぞ博物館のほうへ行って、たぶんおそらく見られておると思うのですが、この500円の図録をわたしも買いましたけれども、ここには素晴らしい遺物が出ているのです。どこの弥生時代の遺跡へ行っても、これと同じようなものがいっぱい出ているかと言うと、そういうことはありません。

例えば、この表紙にあるような、石でつくった短剣とか、あるいは、右のほうにある大きな魚形の彫刻といいますか、そういうものとか、特殊な特に木でつくったものなども非常に優品が多いのです。これは本当に石川さんが言われたような拠点的な環濠集落、かなり広い地域での中心的な集落しかこういうものは出てこないです。ですからわたしは、結論として言えば、小松式土器と言ってよかったですのかなと、今、そう思っています。以上です。

○司会

先生、ありがとうございました。突然で申し訳ございません。

では、これで先生の講演は終わりでございます。皆さま、再度、石川先生に大きな拍手をお願いいたします。

○石川

どうもありがとうございました。

成果報告 2

第18回まいぶん講座

第2回 八日市地方遺跡県文化財指定記念特別講演会

「弥生時代の祭りの伝統」



報告 2

弥生時代の祭りの伝統

金関 惣

1. 弥生時代とは

(1) 弥生時代とは

紀元前 3000 年ごろ、長江の流域で水稻農業が始まり、この文化はアワなどの穀物を畑で栽培していた北の地域にも広がって行きました。やがて水稻農業は、縄文文化が栄えていた日本列島にも伝わってきました。列島に伝わったのはいつごろか、どのようにして伝來したのか、詳しい事情は明らかではありません。新しい水稻農業は北部九州を中心とする地域に先ず定着し、短い期間のうちに、北は本州北部から南は南西諸島北部までの範囲に受け容れられました。その後、青銅や鉄を使用する大陸系の文化も北部九州をへて伝わり、石を刃物の材料とするそれまでの石器時代から金属器時代へと移り変わりました。水田でイネを作ると、狭い面積から多量の収穫が上がります。自然の恵みによって暮らしを支えた縄文時代とは違って、気温、日照時間、耕地や水など、条件が整いさえすれば充分な食料を生産することができます。人口も急激に増えました。新しい暮らしは新しい社会を生み出しました。私は、日本列島に水稻農耕が伝来してから最初の大規模な前方後円墳が造営されるまでの期間を弥生時代だと考えています。

(2) 弥生時代と邪馬台国

そのころ海を隔てた中国では青銅器時代から鉄器時代の文明が誕生し、



秦、漢の大帝国が建設されていました。日本列島でも、集落ごとの社会的なまとまりが、集落を超えた政治的・宗教的なまとまりとなり、地域を代表するような大集落が形成されました。漢帝国は、朝鮮半島や倭人と呼んだ日本列島の人々の地域のまとまりを、外夷の国として外交関係を結びました。

後漢時代に書かれた前漢の歴史記録『漢書』地理志には、前1、2世紀のころ漢に朝貢していた倭人の國は百余国あったとされています。3世紀の終わりごろに完成した『三国志』魏書東夷伝の倭人の条には、そのなかの一国である邪馬台国が、倭人の國々を統括していたと解釈される記事を掲げています。邪馬台国の女王となった卑弥呼は、248年ごろ逝去したようです。卑弥呼のために、大きな塚が造られたということも書かれています。

江戸時代以来、邪馬台国の所在地については議論が戦わされ、まだ決着がついていません。もしそれが大和盆地であるとするならば、卑弥呼のために造られた塚は、大和盆地の東南に現存する箸墓だと思われます。箸墓こそは形の整った大規模な前方後円墳として最も古いものです。しかし、この説に反対する意見も少なくありません。

(3) 弥生時代の時期の区分と年代

弥生時代は、そのころ作られ使われていた土器の形などの特徴（型式）の時間的な変化によって、前、中、後の3期に分けられていました。その後、発掘調査によって北部九州の一角では、従来、縄文時代の終わりごろの土器（縄文晩期の後半期）だとされていた土器型式の時期に、水田の営まれていたことが検証されました。その事実によって、この時期を弥生前期に先立つ「弥生早期と呼ぶ」という意見が提出されました。

一方、弥生土器の伝統を引く古墳時代の土器は、一般に土師器とされていましたが、土師器でも最も古い型式である庄内式の時期は古墳築造以前であることが分かり、この時期を弥生時代の庄内期、あるいは弥生終末期と呼ぶことが提唱されました。これらの意見を織めれば、弥生時代は、早、前、中、後、終末（庄内）の5期になります。

弥生時代の実年代については、議論が錯綜しています。一応認められて

八日市地方遺跡記念講演 2

るのは、弥生中期の前半期が紀元前2、3世紀ごろだということです。そのころに作られた漢の工芸品が、かめかん 弥生の**漆棺**などに副葬ふくそうされていることなどから推定されています。弥生中期後半の実年代は、大阪府池上曾根遺跡の大型建物遺構に残っていた柱の根の年輪から、前1世紀中ごろであることも確かめられました。しかし弥生中期より古い前期、早期の年代は考古学的に確かめる方法はありません。

日本 福岡県曲田遺跡の弥生早期の住居跡から鉄の斧の破片が見出されています。鉄斧は中国からの輸入品だと推定されます。鉄の工具類が中国で生産され輸出されるのは、前4、5世紀ごろだと見られますから、この出土の状況が確実だとすれば、弥生早期の年代は、早く見積もっても前5世紀ごろになるでしょう。しかしこの資料の出土状況が確実かどうか疑う説もあります。

今世紀になって新しい弥生開始期の年代観が提出されました。それは、従来普及していた放射性炭素年代測定の原理を採用し、測定方法を著しく革新した、加速器質量分析（AMS法）と呼ばれる技術によるものです。この測定結果を年輪年代で補正した数値が用いられています。これによれば、弥生時代の始まりは前9世紀ないし10世紀という年代が与えられます。これまでよりも500年ばかり古くなります。AMS法は、世界中で広く使われ始めました。大体の傾向として、従来よりも古い年代が出されています。日本ではこの年代観を受け容れる人も拒否する人もいて広く同意されているわけではありません。弥生時代の継続年代は、短く取れば750年間、長く取れば1300年間ということになるでしょう。

弥生時代は、歴史の分け方では先史時代と原史時代になります。先史・原史の「史」は文字で書かれた記録ということです。文字が用いられず、記録がまだない時代は先史時代、記録は残されているけれども、充分ではなく、それだけに頼って時代像が描き出せないのは原史時代、記録が充分に残っており、それによって歴史の筋道がたどれるような時代は有史時代または、歴史時代とする分け方があります。この分け方に従えば、弥生時代の中ごろまでは先史時代で、それから後の時期については、外国人の書き残したものですが、記録がありますから、原史時代ということになると思います。

(3) 繩文から弥生への移り変わり

弥生時代のはじまりについて、かつては縄文人が環境の変化により、また外来的文化を受け容れて新しい時代を開いたのだと考えられたこともありました。しかし、今では人数の多少はともかくとして、渡来人がこの文化変容の大きな力になったという学説を否定することはできません。

渡来の背景として、次のようなことが推測されます。前3000年紀になつたころ、地球的な規模でそれまでよりもやや寒冷な気候がおとずれ、海面は低下して現在見られるような海岸平野が形成されました。おそらく、こうした環境の変化が遠因となって、沿岸部では人の動きがあったのでしょう。

山口県土井ヶ浜遺跡、福岡県金隈遺跡などで出土した弥生時代前期末から中期にかけての人骨は、それまでの縄文人骨とは面貌も体つき（形質）もDNAも違っています。渡来してきた人々があつたことは確かです。彼等は縄文人と混血し、その形質の特色は水稻農業文化とともに全国に広がつて行きました。ところが、渡来系の形質がはっきり見られる北部九州の西北の沿岸部では、縄文系の形質を残した人々が、弥生時代になつても住み続けていました。彼等は縄文以来の漁労生活の伝統をまもり、渡来人との混血もありしなかつたのでしょう。

渡来人の原郷が朝鮮半島南部であったことは、土器や石器の類同を考古学的に比較することによって確かめられます。しかし最初期の渡来人、つまり弥生早期の渡来人については骨の資料が少ないためによく分かりません。そのなかでも福岡県の新町遺跡では、朝鮮半島系の墓制である支石墓（埋納した棺の上に墓標として小石塊に支えられた巨石を置いた墓）に葬られていた弥生早期の遺体が、縄文系の特徴をもつと判定されました。これとよく似た人骨はごく最近、慶尚南道（キョンサンナムド）の勒島（ヌクト）遺跡で出土しています。想像をたくましくするならば、縄文時代の晚期のころには朝鮮海峡の両岸や島嶼には、縄文的な体つきの住民が住み着いていて、船を操つて文化的交流をしていたのかもしれません。その後、弥生時代の前期の人骨に見られるような形質の人々が渡来してきたのでしょう。朝鮮半島ではそれほど多くの弥生相等期の人骨が出土していません。しかし、1994年か

八日市地方遺跡記念講演 2

ら日中合同で行われていた中国江南（チヤンナン）・江淮（ジャンファイ）地方の形質人類学調査の結果では、新石器時代～漢代の遺跡出土の彼の地の人骨と、渡来系弥生人骨の特徴が近似していることが最近報告されました。別に調べられた山東省の戰国時代～漢代の人骨も渡来系弥生人骨と類似しているようです。これらの事実から、渡来人の原郷は華北・江南地方だと考えられます。

ただし、渡来系弥生人の形質は、非常に寒冷な地帯に長く住み着くことによって形成されたものだとされています。こうした寒冷気候に対応して体つきまで変わった人々が南下し、北上してきた稲作農業文化を受容して日本列島にやってきたのだと推測されます。

2. 弥生時代の宗教を探る

(1) 弥生時代の宗教を探る

縄文時代の人々も弥生時代の人々も、現代人から見れば何に使ったか分からぬようなものを残しています。考古学者は、それらがどのように作られたか、また特に、どのように使われていたかを、磨り減った痕などを観察して類推します。それでもわけの分からぬ遺物は、宗教的な用途のものだったと解釈されがちです。現在なお古い習俗をよく残している人々の、あるいは近い過去までそういう道具を使っていた人々の暮らしを学び、記録を調べて確かめることが、遺物の用途をしる一つの方法でしょう。

弥生時代のそうした遺物や、遺物に表現された画像を、縄文時代のものと比べるならば、鳥や鹿、高床の家屋、鳥装の人などが目立ちます。縄文時代に鳥や鹿の絵が皆無だとは言いませんが、量的な違いははっきりしています。縄文の文化で目立つのは、土器に表された、盛り上がり渦巻くような装飾です。日常の器として使用されたかと思われるものにまで呪いと祈りが込められています。土偶の奇怪な顔面、不可思議な石製品も、何かを強く訴えかけてきます。縄文時代のすべての時期の工芸品に通じているものではありませんが、時代の工芸精神を代表するものだと言ってよいでしょう。

弥生時代前半期の土器には貝殻などを使って華やかな装飾紋様を施した例

がありますが、器には日常の使用目的に最も適した形が選ばれています。貯蔵するための壺、煮炊きするための鍋、食物を盛り付けるための高杯などです。造形の機能的な洗練が見られます。鳥、鹿などの絵画表現も、彼等の生活に直結した願いが托されていると思われます。生活と結びついた弥生の遺物が、縄文人の心に根ざすものだとは思われません。稲作農業をもたらした渡来人の文化に複合していたものだと考えざるをえません。

(2) 宗教史の考え方

考古学者は、遺物や遺跡を手懸りにして昔の宗教を探ろうとします。とはいっても、物的な資料だけから追及するには限界があり、多くの謎がのこされます。宗教史学者もまた宗教の歴史について研究を進めています。宗教史に疎い私にとってその研究の方法は、何か数学の方程式を思弁的に摸索してきたように思われます。客観的な歴史学の枠組みの中で追求するとすれば、個々の遺跡で出土した遺物の実態を確かめる考古学、各民族の宗教的な習俗を比較研究する宗教民族学、さまざまな史料の価値や内容を確かめる文献学などの成果を総合し、宗教觀の変遷を人類史的に鳥瞰するのが宗教史だと思っています。遺跡、遺物、習俗、史料の提出する X、Y、Z を、宗教史観の方程式に代入すれば謎が解けるのではないかと期待していたのです。

宗教を客観的に眺め、その変化を歴史的に追及する学問は、進化論に触発されて始まりました。原始人の宗教と現代人の宗教は違うのだ、段階を追って発達してきているのだという進化論的な考え方であります。チャールズ・R. ダーウィンが 1859 年に『種の起源』を著し、生物の進化を解き明かしてから、それが巻き起こした反響は大きなものがありました。哲学者のハーバート・スペンサーは、進化論に基づき、生物学、心理学、社会学、心理学、倫理学の原理を大著に纏めました。

宗教学では、人類学者のエドワード・B. タイラーが、先史時代人や当時には未開人とされていた人々の文化について広い知識を集め、大きな業績を挙げました。中でも注目されているのは宗教の起源と進化に関する研究です。そのころの未開人には、現代文明人の先祖が通過した太古の文化の要素

八日市地方遺跡記念講演 2

が残っていると考え、宗教進化の段階を設定しました。原始時代にはこの世の闇々まで精靈（アニマ）が満ちあふれていると信じられていて、アニズム、多神教、一神教への進化を示唆しました。

アメリカ合衆国では弁護士であったルイス・H.モーガンが、アメリカ先住民の権利を擁護するために彼等の習俗を調査し、その研究を通じて人類の発展段階を野蛮、未開、文明に分別しました。1877年に出されたその著書の『古代社会』は共産主義の共同創始者であるフリードリヒ・エンゲルスの『家族、私有財産および国家の起源』（1884年）に大きな影響を与え、社会進化論が確立しました。

その後、第1次世界大戦の惨禍の反省からも、ヨーロッパ文明に進化の頂点を置く社会進化論に疑問が出されました。宗教の進化についても、ヴィルヘルム・シュミットが総合した世界諸民族の固有の文化圏の存在を強調する文化圏説が大きな影響を与えました。また、レオ・フロベニウスがアフリカの調査に何度も出かけて、そのころ物質文化の上で素朴な暮らしをしていたベニンやイフェの人々が、かつては非常に栄えた青銅器文化の担い手であったことを明らかにし、文化進化の可逆性を証明しました。一連の進化論は成り立たないという認識です。

（3）宗教進化論

それまでの単純な社会進化論に対して疑念の懐かれていた1960年代になると、新しい進化論が出されました。進化の可逆性を認め、進化した段階の文明だからと言って特に価値が高いのだと考えない新進化論です。歴史学者のレスリー・A.ホワイトやエルマン・サーヴィスなど、おもにアメリカ合衆国のミシガン大学の学者たちが唱えたので、「ミシガン学派」の別名もあります。このミシガン学派の一人に数えられるのが、宗教史学者のロバート・N.ペラーです。彼は大変な秀才で『徳川時代の宗教—日本の前近代社会の諸価値—』という論文で学位を獲ましたが、この学位論文は古典的価値のある宗教史の研究です。このペラーが『アメリカ社会学評論（American Sociological Review）』に「宗教進化論」という論文を発表し、大きな反響

を巻き起こしたのは 1964 年のことです。

この「宗教進化論」は、大変魅力があったので、私もかつて紹介したことあります。簡単に言えば、進化とは、生物でも社会の組織でも、おかれている環境が変われば、新しい環境に適応するために、単細胞生物が多細胞生物に変わって行くように複雑化し、複雑になれば新しい環境に対して、より抵抗力が強くなり適応性と自律性が高まるということです。また、進化は一方向だけに進むのではなく、逆方向にも変わる可逆的変化であり、不可避なものでもないとされます。進化現象は一斉に全部が変化してしまうではなく、古い環境に適応したまま残ることがあります。つまり古い型が新しい環境の中で生き残って共存している場合もあるとされています。そのように、組織、構造、形態の複雑化の過程だという現象を進化だと規定しました。

この前提のもとに世界の宗教の歴史を振り返り、ペラーは原始・古拙・有史・初期近代・現代の 5 段階を設定します。^{ヒセツ} 宗教的原始については、モデルをルシアン・レヴィ・ブリュールが取り上げた、主にオーストラリアとその周辺の人々の示す精神生活から復元しました。これは古野清人先生が『原始神話学』(1970 年) に訳出しておられます。

一番古い段階だろうと考えられる彼らの世界は、まさに神話的な世界が現実の世界と合一し交流しています。人の住む森の中や平原にも神が人々と共にいます。宗教組織と別個の社会組織はないという社会です。日本列島の縄文時代もこのような段階だったのでしょう。宗教の役割は、性別、年齢、親族ごとの集団の果たす役割と一致し、すべての生活行動が神と共にあり、宗教的な生活行動であるという理解が行きわたっています。宗教は種族の行動規範を後の人々に伝えるための、教育原理としても非常に有効に働いています。

次の古拙の段階とは、神の世界が人間世界と分離するようになる段階であります。拝まれる神さまと拝む人間がはっきり分かれました。社会に貴族、平民、奴隸という階層ができてくると、宗教的にも、そういった分離が生じ、祭司階級の人が強い力を持って、儀式の進行を司ります。祭司以外のものは、礼拝への参加者にとどまってしまうのです。また、犠牲を供えることがこの段階の特色です。

祭司たちは俗世の王と並んで高い階層に属することが多く、王が祭司を兼ねる場合には、神聖王権、あるいは祭司的王制という制度になります。集団ごと、集落ごと、都市ごとに特定の神さまが拝まれます。その神さまを押し立て、集団同士が争うときには、それぞれの集団に信仰されている神と神の戦いだと意識されます。

次の有史段階以降については、本論と関係が乏しいのでごく簡単な紹介にとどめましょう。有史段階では宗教的信仰が救いをもたらします。宗教が人々の救済の手段となるのです。その変化の過程については、俗にいえば、こういう説明が与えられるでしょう。「神に従っている限り、おまえたちは幸せである」と高位の祭司が人々に説き聞かせ、祭りを盛んにし、儀式を複雑にし、祭り場に贅沢な供物を持ってこさせます。ところが、いくら幸せであると言っても、現実の世界は、天災、疫病の流行、戦争、飢餓などのため、信者、民衆は少しも幸せではありません。その理由の説明が難しくなり、祭司たちは「実は、おまえたちが今いる世は仮の世界である。本当の世界は死後にある。魂が救われて天国に行けるかどうかにかかっている。だから、たくさん供物を供え、お賽銭を包んで神に捧げるならば死後の世界で救われる。」というわけです。その供物や賽銭がどこへ行くかはご想像におまかせします。宗教信仰集団が大きければ、多数の労役奉仕によって大伽藍お伽藍が建造され、建築、装飾、音楽などの芸術が盛んになります。儀礼の形式も洗練されます。しかし、人々がいくら苦しんでも、個人が直接神に救いを求めるることはできません。「神への願いは必ず祭司あるいはその組織を仲介として願わなければならない。」とされています。これが種族、民族集団を越え、世界宗教として広がるわけあります。

これに対して、ヨーロッパの一部では疑問を持つ人々が出てきました。マルチン・ルターを代表とするプロテスタントの人々です。これが初期近代と言われる段階です。カトリックの宗教的エリートが神を独占することによる宗教の堕落への抗議行動で、宗教改革として広くしられています。この段階の人々は祭司・聖職者を媒介とせず、直接神に祈り訴えます。しかし、死後の魂の救いはなお非常に重要な問題です。

現代の段階になると、人々の心の中での世の重要性は薄れて行きます。脳細胞が死んでしまえば、個人はおしまいだと自覚します。では、神や宗教は必要ないかと言えば、そうではない、この世の苦しみ、悩みを乗り越えるために神にすがらねばならないこともあります。社会的に自覚した個人がある世で教われるためではなく、現世を生き抜くためにそれぞれ神を求めるのが現代の宗教です。

ペラーの考えを私なりにごく単純な言葉で説明しました。不正確でしょうがお許し下さい。しかし、このペラーの説の基本は社会進化論に基づいています。その限りでは宗教的な進化という現象があるのだと考えています。ペラー以後は構造主義的な、文化相対主義的な考え方方が支配的になってきて、文化、宗教が別の視座から探求されるようになってきました。ただ一言付け加えたいのは、弥生時代の宗教の様相を進化段階として理解するならば、ペラーの宗教的古拙の段階の説明が適合していると思われることです。

(4) 弥生時代の宗教の特性

私なりに敷衍すれば、この段階では神の世と人の世が分離し、神さまは神さまの世界に、人間は人間の世界に住むようになります。ご先祖さまが神として拝まれている社会ならば、祖靈は祖靈の国に住みます。必要があつてご先祖の世界から祖靈をこの世に呼ぶためには、技術が必要です。ただでは来てくれません。その技術を持っているのが祭司です。日本の神道もそうですけれども、神社へ行っても常に神さまはおられない。神主さんがお呼びすると神さまが来てくださるのです。それで供物を捧げてお願いし、お願いが終わればお帰りいただいています。神道には古拙段階の名残が感じられます。弥生時代はまさに宗教的古拙の段階だと思われます。

神を招くために捧げる供物として犠牲を奉獻することは、この段階から始まります。地球上のすべての人々がこの段階を経験してきたわけではありません。弥生文化と関係の深い朝鮮や中国の王朝初期にはこの宗教的な段階があったと考えられます。いくつかの文化圏では同じ段階にありながら、内容や表現に違いがあります。神の実体も違います。古代中国では、すべての神々

八日市地方遺跡記念講演 2

の最上位の神として上帝が崇拜されました。また祖先の靈の祭りも盛んでした。祖靈の祭りは日本でも弥生時代以来続いています。その地域や文化圏によって捧げる犠牲も違っています。中東の原始ユダヤ教の段階では、犠牲として羊を捧げました。牧羊民の習俗を残す彼らは子羊をバーベキューにしました。中国では何と言っても牛・羊・豚であります。以前、林巳奈夫さんが清の秦蕙田の書き残したと言われる説を「周王の宗廟祭祀の次第」として批判的に紹介されたことがあります。それを見ても宗廟の祭りの際の犠牲の中心は牛です。

中国の古典として尊ばれている『詩経』の大雅生民にも、犠牲を焼く匂いたいがせいみん が天に昇り上帝がその匂いを喜ばれる詩句があったと記憶しています。

(5) 弥生時代の祭儀

弥生人も犠牲を捧げたでしょうか。捧げたとすれば、犠牲獸はシカだと私は思うのです。小松市の八日市地方遺跡でもシカを狩る絵のある土器が出土しております。シカ狩りは銅鐸にも表されております。弥生土器の絵画の中で、一番たくさん描かれている、一番ポピュラーな題材はシカとシカを狩る人です。シカを狩って神に捧げ、神人共食の宴会を催したのだと思います。シカが手に入らなければ祭りができるないと信じていたのではないでしょうか。遺跡で出土する獸骨の量から見れば、イノシシが多いけれども絵画に表現されているのはシカの方が多いからとも、そのように判断されます。



写真1 シカと狩人が描かれた絵画土器
[八日市地方遺跡] (小松市教育委員会蔵)

シカが登場する古い説話と言えば、播磨の国の『風土記』にある讃容郡の地名伝説が有名です。「妹と兄の二柱の神がその土地を自らのものにしようとして競ったとき、妹神の玉津日女命が鹿を生け捕りにし、その腹を割いて福氣を血にひたしたところ、一夜のうちに苗が芽生えたのでその苗をとって植えられた。それを見て兄神は去って行かれた。」と伝えられています。もう一つは、豊後の国の『風土記』国崎郡の条に「この地の頭の峯の下に宅田という水田があり、この田の苗を鹿がいつも食い荒らすので、田の主が柵を作つてようすを見ていると、鹿がやってきて頭を上げ柵の間に入れ苗を食べ始めた。そこで田の主は捕まえて鹿の頭を斬ろうとしたところ、鹿は「私は誓いを立てるから死の罪を許して下さい。もしお恵みにより命を助けてくださるならば子孫の代まで苗を食べるなど申します。」といった。田の主は大変不思議に思つて斬らずに許してやつた。それから後はずつとこの田の苗は鹿に食べられずに収穫をあげることができた。それゆえにこの田を頭田と呼び、また峯も頭の峯と名づけられた。」という話があります。豊後の国『風土記』の説話は、おそらく殺生を禁じた仏教の教えが反映しているのでしょうか。私は、ベラーの「宗教的古拙段階の犠牲」という考え方をとれば、シカの血に種モミを浸すという儀礼が、弥生時代にはよりふさわしく感じられます。

時代のバックグラウンドのようなものが、文化人類学や宗教史から多少なりとも導き出せるかどうか、ほとんど絶望的でしょうが、手続きとして一応知つておかなければいけないと思うわけです。先史・原始時代の宗教や信仰、人の心の動きなどを調べようと思ったら、いくつかの方法があるのですけれども、大変限られたことに限られてしまいます。遺跡のある部分で何かきれいに飾られた土器が集中して出てくる。これは普段使いではないだろう。特別の土器だろう。あるいは神に捧げたものかもしれない。お供物を入れた土器かもしれないと思ひますけれども、では、どういう神にお供えしたのだろう、どのような祈りをこめたのだろうということになると一向に手掛かりがつかめません。

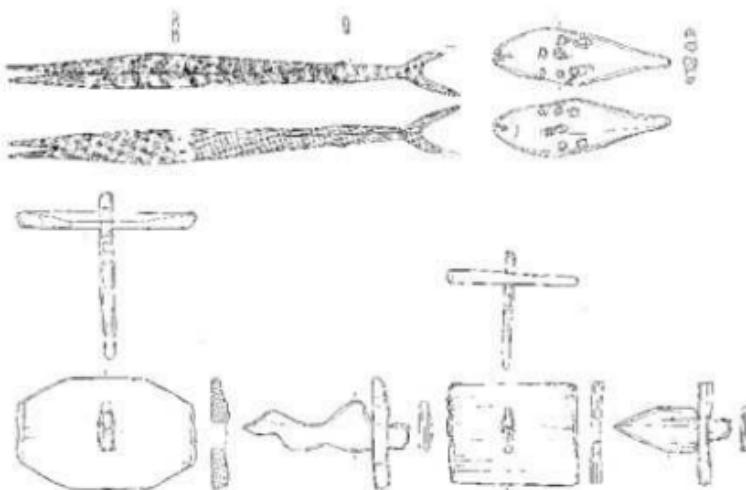
3. 弥生の祭場

(1) 神を招く鳥

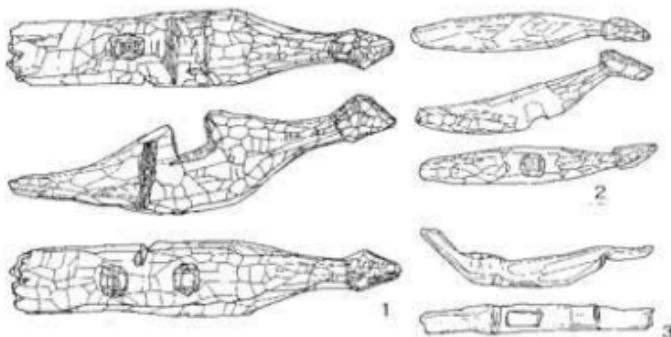
第1図を見ていただきますと、上には木の魚があり、下には鳥形をしたものが板に突き刺さっています。これらは八日市地方遺跡で出土したもので、弥生時代の鳥形木製品が最初に見つかったのは、大阪府の池上曾根遺跡で、1969年のころだったと思います。6点がほぼ同じ場所で掘り出されました。出土当時は何に使われたものか全く分かりませんでしたが、立体的に作られた大型の鳥も、板作りの鳥も、お腹の下面に孔が穿たれているので、これらは竿の先に着けて使ったものだろうと考えました。図示した資料（第2図）は分かりやすいものです。同じ鳥を、上から見た図、下から見た図、真ん中には横から見た図が入っています。この背中に切り欠きがあります。翼をここに嵌め込んだものでしょう。また、側面に溝が切ってあります。ここには足を付けたのでしょう。ですからこれは完全ではなくて、足と翼が落ちてしまった鳥です。

鳥形の木製品といえば、私の勤務していた奈良県の天理大学付属天理参考館（博物館）の朝鮮民俗資料に、奠雁に用いたとされる美しく彩色された木製の雁が収蔵されています。奠雁は韓国などの旧俗として婚礼の際の贊（礼物）として使われるもので、雁を贈る習俗は『儀礼』土昏礼に見えるように古代中国に遡ると説明されています。しかし、奠雁の雁には腹部に孔がありません。弥生の木の鳥とは使い方が違うのだと判断されます。

弥生時代の終わり頃の倭國の状態を記述した魏志の倭人伝には、占いや宗教的な習俗については書かれていますが、最も重要な農耕儀礼については触れられていません。慶尚南道、あるいは全羅南道の一部にかかる辰韓や、弁辰の条にも書かれていません。ところが、朝鮮半島の西南部の全羅道、忠清道にあった馬韓の条では、後述のように農耕祭祀についてやや詳しく述べられています。馬韓の祭祀が倭人の農耕儀礼と同じだといえないことは、弁辰の条の終わりの方に「(弁辰は) 衣服や住居は辰韓と同じで言語や綻も似ているが鬼神の祭り方には違いがあり……」と記されていることからも察



第1図 魚形木製品及び板差込鳥形木製品 [八日市地方遺跡] (小松市教育委員会 2003)



第2図 鳥形木製品 [大阪府池上曾根遺跡] (安土城考古博物館 1996)

せられます。しかし、いくらかの手がかりを与えてくれることはありうると思ひます。

民俗資料を調べて行くうちに、竿の先に木の鳥を着けて立てる習俗が韓国

八日市地方遺跡記念講演 2

や中国東北地方にあったことが分かりました。朝鮮の民俗学者、孫晋泰（ソンシンデ）の業績『蘇塗考』（『民俗学』4—4 1932）に示されています。中国東北地方の例は、凌純声『松花江下游的赫哲族』（1934）に見られます。1938年には、赤松智城や秋葉 隆による『朝鮮巫俗の研究』、『朝鮮巫俗参考図録』などが出されています。孫晋泰の取り上げた蘇塗は、『三国志』魏書東夷伝の馬韓の条に記述されているものです。馬韓の条には次のように書かれています。私なりに意訳して見ましょう。

（2）馬韓の祭場と鬼神

馬韓では「毎年五月に種まきが終わると、鬼神をお祭りする。人々は集まって歌い舞い、昼夜ぶつ通しで飲酒して休むことがない。その舞は、数十人が立ち上がって列を作り、脚を高く低く上げて大地を踏みしめ、手の動作も足と揃っていて、そのリズムは鐸舞（中国で陰曆元日の朝会の際に演じられる舞。それぞれの踊り手が小型の鐸を持って演舞する。）と似たところがある。十月に収穫が終わるとまた同じようにお祭りをする。（農村では）鬼神が信じられているが、国邑（国々の都）では一人を立てて天神を主祭し、これを天君と名づけている。また、国々には別邑があり、これを蘇塗という名で呼ばれている。そこには大木が立てられ、その木に鈴と太鼓が吊り下げられ鬼神のお祭りをしている。（罪を犯した）逃亡者たちが蘇塗に逃げ込むと、（この世の掟が及ばないので）連れ戻すことができない。蘇塗を立てる意義は仏塔を造るのと同じだけれども、社会に及ぼす善惡の効果は違っている。」。

ここで述べられている鬼神とはどのような神なのでしょうか。いろいろの解釈があります。しかし、魏書の東夷伝のなかで使われている鬼神については、北の高句麗の条の叙述に解釈の鍵があるようです。「（高句麗の）風俗は、食物を節約して宮殿や住居などを盛んに建てる。居住地の左右には大きな建物を造り、鬼神を祭っている。また、靈星（天候を司る天田星）と社稷（土地の神）の祭りも行っている。」という記述の後に、国を形成する五つの部族の名を挙げ、その中でも、もともと支配者であった涓奴部は勢力を失って王を出せなくなったが、涓奴部の血筋を継ぐ大人は古離加（官名）を称し「宗

廟を建て靈星や社稷の祭りを行うことができる。」と述べられています。二つの記述を対比すれば、鬼神の祭りは宗廟の祭りであり、鬼神とは祖靈のことであると考えられます。

馬韓の社会でも祖靈信仰が農業祭祀の基本であり、祖靈におすがりして耕しているということです。一方、国々の都である国都、すなわち国邑では天神の祭りが行われ、蘇塗と呼ばれている別邑では鬼神、すなわち祖靈が祭られています。別邑とは『新唐書』東夷伝高麗の条に「また国内城、漢城あり別都と号す。」とあるように、神祭りのような国邑の機能を受け持ちながら別に置かれた邑落のことだと思われます。宗教的には国邑の天神祭り、別邑の祖靈祭りの二つがあり基盤は祖靈信仰であります。国を政治的にまとめるうえに必要な天神が、ある時期になって勧請されたものだと思われます。

(3) 蘇塗の謎

鬼神を祭る蘇塗の名は何に由来するものでしょうか。最初に注目されたのは罪人が逃げ込めば捷が及ばない聖地のような蘇塗の性格です。まず法制史畠の研究に取り上げられたようです。日本史では1926年に刊行された平泉澄の著書『中世に於ける社寺と社会との関係』の中で詳しい研究が披瀝されています。その後、先に触れたように、民俗学者の孫晋泰による論文「蘇塗考」が出されました。孫晋泰は東夷伝馬韓の条のこの部分に脱漏のあることを前提として（原文は「諸国にはおののおのの別邑あり、大木を立て、これを名づけて蘇塗となす。」であると考えている。）祭場に立てられている大木が蘇塗だとし、その蘇塗に鈴や太鼓を吊り下げて、ご先祖さまを招き寄せて拝んでいるのが実態だと書かれたわけです。孫はまた、当時朝鮮半島に残っていた木の鳥を竿の先に着けて村境などに立てる鳥杆習俗を紹介し、鳥杆の呼び名のソテー、ソッテ、ソルティーなどの音が蘇塗に近いことを挙げ、テー（デー）の音は古來の朝鮮語で柱や竿を表していることを証明し、これと聲との合成で蘇塗は聲杆（ソカン）であり、19世紀に残る鳥杆習俗が『三国志』の書かれた3世紀に遡るという説を提出しました。日本でも平安時代に播磨の小犬丸遺跡で、鳥杆と思われるものが出土しております。ちょうど道のとこ

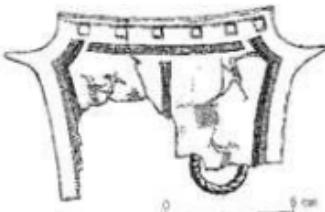
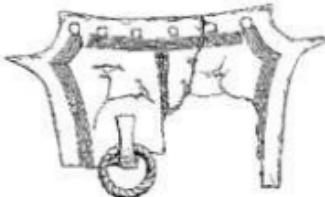
八日市地方遺跡記念講演 2

ろに立っていたという証跡があるので、私は日本でも弥生時代から後に長い間村境を守る鳥杆があったのかと思っています。

満州語の大家であった今西春秋先生の教示によれば、満州語の属しているツングース語で「ソ」は、不思議な力という意味があるということあります。S・M・シロコゴロフの『ツングース・ロシア語辞典』にも「ソ」は不思議な力という意味が採録されています。また『欽定満州源流考』にも「満州語、神杆を称して索摩となす。蘇塗と音また相近し」と書かれています。蘇塗はツングース語と朝鮮語の合成語である可能性も考えられます。その後、私は天理大学の同僚であった言語学者の中村完さんの教えにより、河野六郎が書いた「¹朝鮮方言学試²」、「鉄」語考³」という論文のあることを知りました。その論文は、現在の朝鮮語で河は一音節の「ネ（ナイ）」であるが、もともと母音の間に「r」音の介在する二音節語であった可能性を示唆しています。中村さんは鳥の「セー（サイ）」も古い朝鮮語では同じように「r」音が入った「サリ」の可能性のあることを教えて下さいました。「蘇」という字には sag という旧い音があります。速鳥の切、虞の韻です。昔、中国の人が古朝鮮語の鳥杆の音を聞いて、蘇塗という漢字を充てたというふうに解釈するのが、一番いいと思うようになりました。

(4) 蘇塗の祭り

では、鳥杆を意味する蘇塗がなぜ祭場の名前になったのでしょうか。第3図は大田（テジョン）の付近で出土したと伝える青銅製品です。幅13cmたらずの小さな板で裏表に絵が表されています。時代は紀元前3世紀から4世紀ごろ、日本の弥生時代の前期の終わりか中期の初め頃に

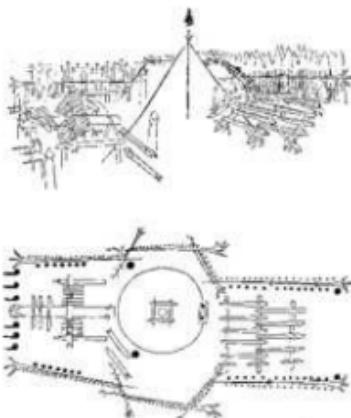


第3図 大田付近出土青銅小板の図像
(金関 2004)

当ります。どちらが表か分かりませんけれども、環が着いている方が表だとすれば、表には木の上に鳥がとまっている絵であります。裏は、右と左が分かれています、左のほうは欠けているために何を表現したのか分かりませんが、右のほうは明らかに煙の歎があり、頭に羽根飾りを付けた人が鉤を踏んでいる絵であります。羽根飾りを付けて鳥を装っている人は、おそらく祭司だろうと解釈されています。煙を耕すのは、1年の農耕作業を聖職者が予め宗教的行事として模擬的に行い、豊作を願うお祭りなのでしょう。青銅の板の表側の木に鳥が群がっている絵は祭場の旧い形を表現したものだと思います。原初の祭場は森を伐り開いて広場を造り、その周囲の森の樹木に鳥が群がってきたころに祭りを始める。ご先祖の靈が渡り鳥の形をして訪れる、あるいは渡り鳥が彼岸から祖靈を運んでくる、渡り鳥がやってくる季節が種まきの季節であり、春祭りの季節であります。後になって暦が定められ祭りの日が予定されると、期待のころに鳥が現れないからといって期日の変更が難しい。それで祭場の周囲に鳥杆を立て並べて鳥たちの来臨の形が整ったことにしたのではないでしょうか。

囲む施設の名称が、囲まれる場所の名になることはよくあります。城という字は土を積んだ堤のような区画、あるいは防衛の施設です。その堤をめぐらせた区画全体が城と呼ばれます。一国一城の主という表現にもなります。動物が逃げ出さないように、盗人が侵入しないように囲むのは柵ですが、柵は秋田の柵、ほつたのさく 払田柵という要塞の名前にもなります。郭も同様です。こうした例のように、鳥杆の蘇塗をめぐらせた祭場が蘇塗と呼ばれるようになったとでしょう。

現実にそういう施設があるのか、という疑問にお答えするために第4



第4図 ボトカメヤナツングスカの祭場
(金岡 2004)

八日市地方遺跡記念講演 2

図としてシベリアの、ツングース語族の少数民族であるボドカメナヤ・ツングースカ盆地のエベンキ人が営むシャーマンの祭場のスケッチを掲載しました。ソビエト時代の民俗学者の A.F. アニシモフが 1931 年の調査旅行で採集し、1952 年に発表した論文に掲載されたものです。私は H.N. ミカエルの英訳本で学びました。祭場の中央にシャーマンのテントが設営されテントの中心にはカラマツの若木が立っています。カラマツの上には葉が残されていますが、鳥が集まってくれることを願ったからであります。テントの傍らには木彫の祖靈像、お供えものにする木の魚が棚の上に並べられています。八日市地方遺跡で出た魚も、このようなお供えものだったのでしょうか。このエベンキ人のシャーマンテントは、20 世紀の民俗例で、蘇塗や弥生の祭場とつながるかどうか分かりません。ただ、遠くの方にシャーマンの祭場を区画する鳥杆の列が見られます。竿の上に表されているのは、木の鳥です。鳥杆と立ち木が一本おきになっていることには何か意味があるのかもしれません。

(5) 中国の祭場

もっと古い例として、中国の銅器（青銅製の容器）に同様の絵があることを発見しました。中国の銅器の多くは奇怪な鳥や竜などを鋳出して紋様としています。ところが春秋・戦国ごろになると鋳造した青銅器の表面に純銅の薄板を象嵌する技術が採用され、器面の装飾が絵画的な表現になりました。またやや遅れて、槌打ち技法により純銅の板から単純な形の器を作り、その軟らかな器面に針描き（針のように硬い尖った金属で図や紋様を表す）によって、それまでよりも自由な、写実的な絵を表したもののが製造されました。象嵌、針描きの装飾をあわせて画像紋と呼んでいます。針描きのものは、深い水盤形の鑑や洗面器形の洗、酒や水を注ぐ匂のような液体用の容器に多く見られます。

祭り場の情景を描いた針描きの画像紋を、私が最初に見つけたのは、1978 年に江蘇省淮陰県高莊で発掘された戦国時代の初めごろの墓の副葬品に表されたものです。弥生時代の中ごろの時期に当たります。第 5 図に掲げ

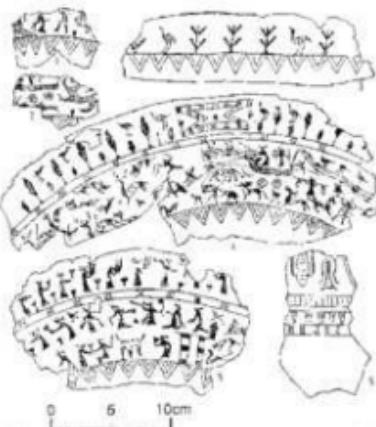
たのはその後に出土した山東省王溝墓群中のM2号墓の副葬品の例です。山東半島の北岸に煙台市があります。そこから遼東半島の先まで、点々と連なっている島々が廟島列島です。そのうち山東半島に最も近い南長山島で王溝墓群が見いだされました。年代は戦国時代の前半期でしょう。ここで出土した銅器は破損していますが、銅器の周縁の紋様には立ち並ぶ樹木が表され、樹木上には一つ置きに鳥がとまっています。

シベリアのシャーマンテントの祭場の周囲と同じ表現です。銅器の紋様

は人工の鳥杆か、心に描いた理想の祭場区画であるか分かりません。銅器の中心部の方には、祭場で人々が踊り狂っている情景、狩猟、料理、宴会などが奔放な筆致で表現されています。高莊墓の資料にもこの世ならぬ恐ろしい、化け物がいます。中国の古い地理書の『山海經』の神や怪物などを思い出します。祭司、巫人たちが、幸せを子孫に及ぼす半神半獸などいろいろな姿の祖靈や、災害をもたらす厄神などに扮装して祭りを主導し、狂ったように騒いでいる古代人の生活の一場面ではないかと思われるものです。『山海經』は図譜の説明書だといわれていますが、図譜のもとになったのは、各地の現実の祭りから抽出したものではないかと想像しています。

(6) 実在した鳥夷

おそらく長江の中・下流域のお米の文明の世界で始まり、鳥トーテム、鳥靈信仰とも習合した祭の習俗は、東夷として分類されている韓や倭の人々の間にも伝えられたのでしょうか。『史記』の殷本紀や秦本紀は、それぞれの祖先に鳥トーテム信仰のあったことを伝えています。秦の遠祖の一人である中



(1~5: 銅鑄　6: 銅盤)

第5図 王公墓 M2号 出土銅器の画像文
(金剛 2004)

八日市地方遺跡記念講演 2

中
衍は鳥身で人言（鳥の姿をしていて人の言葉をしゃべる）とされ、趙世家では同じ中衍が人面鳥嘴（人の顔に鳥の嘴がついている）とされています。鳥に扮装して儀式を執行するシャーマンだったのでしょう。人面鳥嘴といえば岡山県尾上遺跡出土の弥生土器に描かれた鳥装の人物とそっくりです。

（今文）『尚書』禹貢（中国最古の地理書）は各地の産物を挙げていますが、その中に鳥夷という異民族が登場します。「冀州の鳥夷は皮服。」「揚州の鳥夷は卉服（草の繊維製の衣服）」という記事です（古文『尚書』では島夷。）。冀州は河北、山西の各省と河南省の一部に跨り、揚州は江蘇、安徽、江西、浙江の各省を含みます。『漢書』地理志も禹貢の記事を繰り返しています。また『史記』の『五帝本紀』の中にも、舜の鳥夷平定の記事が舜の功績を称える叙述の中に出ています。鳥夷は比較的広い地域に散在していたようですが、おそらくは習俗の違いで漢民族からは異民族視されていたのでしょう。鳥夷については古くからいくつかの注釈があります。北の鳥夷は鳥を捕らえその肉を食べる、あるいは皮の衣服を献上するとか、南の鳥夷は草の繊維で作った衣服を纏うといった注釈です。注目されるのは『漢書』地理志の顏師古の注です。顏師古は冀州の鳥夷について「これは東北の夷であって、鳥獸を捕らえその肉を食べその皮を衣服としている。一説では、彼等は沿岸地帯に住み、被服も姿かたちも鳥を象っている。」と書いています。その一説が正しいとすれば、鳥夷とは鳥装の異民族、鳥を尊び、鳥をご先祖と考え、鳥装をしてお祭りをする人々だと考えてもよいでしょう。『春秋左伝』の昭公 17（525）年の条に、山東省南の郷の国から王が魯の昭公を訪ね、その先祖について説明する件があります。「郷のご先祖は少皞であり、その即位に際してたまたま鳳鳥が飛来する瑞兆があったので鳥を以って國のしるとした。……」ここにいう少皞は東方の神でありその子孫の重黎（または重）は人面鳥身の神であります。『墨子』明鬼は、秦の穆公（孫詒讓による）の前に人面鳥身の神、句芒が現れたことが語られています。句芒は重黎のことです。魯を訪ねた郷の王の旧いしきたりの話を聞いた孔子が「天子のもとで古代の官の制度の学問が失われたならば、これを四夷に求めねばならない。」と嘆息しましたが、郷は夷族として扱われています。

今までお話ししたのは、神話、古典などから探し出した資料ばかりです。古代中国に鳥夷が実在したかと疑われる方があるかと思われます。実在の人々であったことを証明したのが資料の第6図に示した甲骨文(卜辞)です。この資料は、甲骨研究の先駆者であった羅振玉が河南省殷墟(殷代後半の都跡)で採集し『殷墟書契考釋』という拓本集に採録したものであります(下巻36頁第6)。その後、陳夢家が解読・考証し「隹夷考」という論文として発表しました(『禹貢』5-10 1936年)。

隹夷は鳥夷のことです。陳はこの卜辞で鳥形をしたものを作りました。付け加えて「隹夷は鳥夷である。古文では隹がすべての鳥類を表し、その中でも嘴が鋭く鶴や鳳凰のように長尾豊羽で冠のあるものを鳥と呼び分けた。」と述べています。また「隹夷とは弓矢を用いて鳥をよく撇射(矢に糸や網をつけて放ち鳥に絡まるようにした射撃方法)をする東方の民だ。」としています。陳夢家の解説によれば、この卜辞は殷時代に周辺の隹夷征伐に成功するかどうかを占って、そのお問い合わせを書き留めたものであることになります。下の解釈文を見ていただきましょう。破片の右下のところに、左行から「乙巳の日に卜をする。西の隹夷を撃つべきか。」という問いかけです。真ん中には、「乙巳トう、北の隹夷を撃つべきか。」と右行から書かれています。周囲のどの隹夷を撃つべきかということを、神に問うてい



第6図 隹夷を示す卜辞(上)
と陳夢家の読解文

八日市地方遺跡記念講演 2

るのです。殷墟で出た殷代の古い文字資料で、隹夷という異民族征伐の可否を問うていますから、当然、隹夷（鳥夷）は実在の民族です。

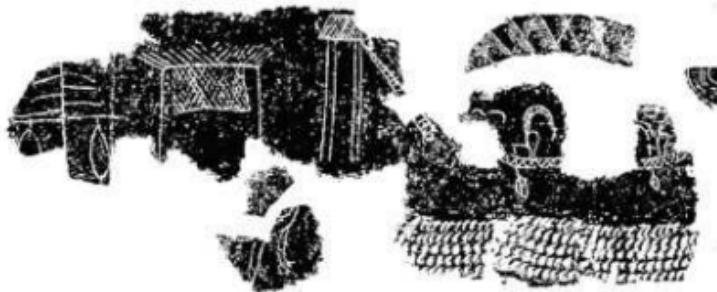
(7) 弥生の祭場

殷・周の民から見た鳥夷の仲間は、弥生時代の当時、朝鮮半島にも日本列島にもいたのでしょうか。弥生時代の祭りが殷の時代に始まるかどうか分かりません。

しかしその後も統いて、鳥装の祭司が祭りをしていたことは確かです。

第7図は、鳥取県の角田遺跡から出土した弥生中期の壺形土器の頸の部分に線刻で表した絵画です。当時の祭場を表しているようあります。真ん中に高床の建物があり、その右側に背の高い見張り台のような建物があり、高床建物の左端には立木があって、何かラグビー・ボールのようなものが二つ吊り下がっています。私は、銅鐸だろうと思っています。これが祖靈を祭る祭場です。祭場を目指して、舟を漕いでいる人々がいます。漕ぎ手は頭に鳥の長い尾羽をつけています。シカも太陽らしきものも描かれていますが、原位置ははっきりとは分かりません。豊穣を祈るために犠牲のシカを捧げ、鳥装の人々が祭りをしているというのが私の考えです。

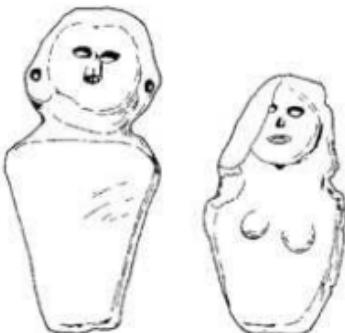
このような祭りは、鳥取県といろいろの繋がりのある八日市地方でも行わ



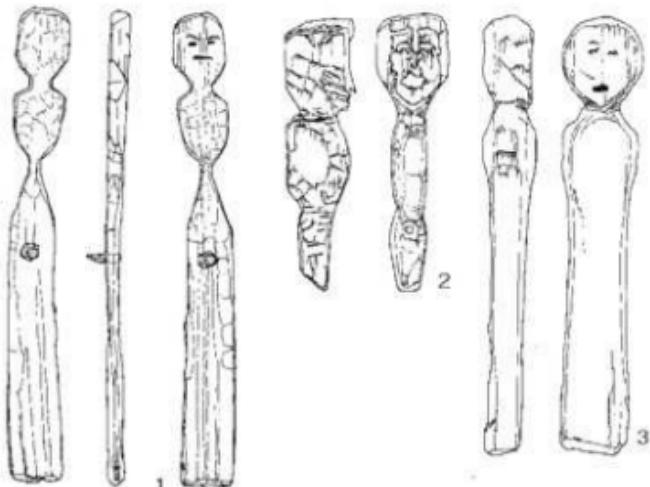
第7図 鳥取県稲吉角田遺跡出土土器線刻画 (安土城考古博物館 1996)

れていたでしょう。木の魚はシカのようなお供えなのか、鳥のように海の彼方の国から祖靈を運んできたものか判断がつきません。どうも、八日市地方の鳥は板に嵌めこまれ、ちょっとひねくれていて困ります。

話は変わりますが、第8図は輕石製の男女一対の祖靈像です。鹿児島県山ノ口の祭り場の遺跡で1958年ごろに出土したものです。河口貞徳先生が調査されました。この祭り場には、直径3メートルぐらいの区画を丸く石で囲み、そこに壺や甕をお供えしたような形に供え、その一画に男女の石像を置いて祭っていたと思われます。第9図の木像の方は、男女一対になるかどうか分かりませんが、滋賀県の大中湖南遺跡や、滋



第8図 岩偶 [鹿児島県山ノ口遺跡]
(安土城考古博物館 1996)



第9図 木偶 | 1 滋賀県西ノ部遺跡 | 2, 3 大中湖南遺跡 | (安土城考古博物館 1996)

八日市地方遺跡記念講演 2

賀県の湯ノ部遺跡から出ております。これらは、おそらく弥生時代の神像として置かれたものだろうと思われます。

中国で神さまの像をこのように祭ることは知られていません。儒教の始まりのころには、祖先の頭骨が宗廟の儀式の折に拌まれたともいわれています。その後宗廟の中心には、仏教のご位牌のように、ご先祖の名を書いた木の札がありました。札は単純形の板ですけれども、もともとは、先祖の靈の籠もる木の人形をお祭りしていたとも考えられています。木の札は木主、あるいは神主と呼ばれています。

余談になりますが、仏僧たちが祖先崇拜の教理・習俗のない仏教を中国に広めようとしたとき、祖先を崇める中国人の間に受容されにくかったため、妥協の上で儒教の木主・神主を位牌として、採用したものだといわれています。明代、マテオ・リッチらが中国でキリスト教を伝道する際に、中国人の祖先崇拜や孔子廟の祭りとの妥協をはかったのと同じでした。

こうした弥生の祭場で行われていた祭式は、今日まで脈々と受け継がれています。今、民俗芸能として、おんだ祭りなどの春祭りがおこなわれておりますけれども、あの祭りも、この弥生の祭場から脈々と伝わってきているものだと思います。

この祭場で行われた、特に中心的な儀礼は何だったかといえば、男女の神さまの性的な行為であったと思います。田遊び、御田祭り春田打などの行事で伝わる春祭りにはそうしたものが窺われます。現在の田遊びは、一年の農耕作業をあらかじめ模擬的に行うことが主眼になっています。そのなかに性的な行為が演じられることがあります。東京都板橋の徳丸に伝承されている田遊び曲のなかの「やすめ太郎次」は、男女の生殖行為を真似て見物を笑わせるとされています（『日本民俗学大辞典』「田遊び」2000年）。奈良県明日香の御田祭りでも、祭りの中で、天狗とおかめが性的な所作をして、人々を笑わせております。そういう民俗行事は、古く弥生時代から伝わってきているのではないかと考えています。あるいは、祭りの行事の復興の際に旧いしきたりが復活したものかもしれません。

○会場

すみません。いまのお祭りはどこか、書いていただけますか。

○金閣

奈良県では飛鳥坐神社で行われています。あすかいます 旧飛鳥村の東方の丘の上にある神社です。こういうお祭りは、地方では古墳時代にも行われてきました。しかし、古墳時代ともなれば、一国の農耕儀礼のような重要な行事は、最高権力者によって厳粛に執行され、権力機構の運営に携わる人々にとって、弥生の祭儀はそのまま受け容がたいものだったでしょう。かつて村々の祭祀儀礼を担当していた祭司たちは儀式の外におかれて芸能者となつたでしょう。『日本書紀』神代上に、天錫女命が巧作俳優あやぢうげいゆう（たくみにわざおぎす）と書かれているような俳優として神聖な儀式の後の直会のようないとき、性的な所作を交えた喜劇を上演したのだと思います。

最近開催されている「発掘された日本列島 2006」という展覧会に展示されている埴輪の中にも、裾を広げて性器を見せる女性、一物を突き出した男性能がいます。葬礼の場で、なぜあのような埴輪が必要だったのかと思いますが、儀礼の筋書きには俳優による喜劇も含まれていたのでしょう。

神話には天錫女命のお話がありますけれども、八千矛神の名で歌われている大国主命も人々の笑いを誘う喜劇を演じています。これらはすべて国の重要な祭りの中に取り込まれた、前代、つまり弥生時代の農耕儀礼の中心的な性的所作が喜劇化されて、国の祭りの中に入ってきたのだと思っております。そういった限りでは、日本の文学は喜劇から始まったと私は考えています。そして、その喜劇の元は八千矛の神などの『古事記』の歌謡が元であろうと考えているわけあります。

4. 弥生の祭りの源流

この源流をさらに遡れば、中国の旧い長江中流域の稲作文明を伝えた世界にたどることができます。汨羅の淵に身を投じたとされる屈原の『楚辭』くわいし 九歌などには、その時代の空気が籠められているような気がします。『楚辭』

八日市地方遺跡記念講演 2

について現在残っているうちで最古の注釈である後漢の王逸の『楚辭章句』には、「昔（屈原のいた戦国のころ）楚の國の南の郢（都）があった沅水、湘水の河辺では、鬼神を信じてお祭りする習俗が盛んであった。その祠では必ず歌樂を奏し鼓を打って鬼神に奉納していた。屈原が追放されてこのあたりに潛み、苦い悲しい思いをもって、家を出て村人の祭祀の様を見ると、彼等の歌詞があまりにも卑しい、それで神祭りの歌として九歌を作った。……」とあり、また、楚辭について古來の注釈本のなかで画期的な名著とされる南宋の朱熹の『楚辭集註』にも、ほぼ同様のことが書かれています。楚や陳などの國、いわゆる荊・楚の地方に巫鬼の祭りが盛んであったことはよく知られています。『漢書』地理志は楚について「巫鬼を信じ、淫祀を重んじた。そして漢中郡は淫佚・不從順で、巴蜀と民俗が同じである。」と述べています。2002年に高文・王錦生氏編集により国際港澳出版社から出された『中国巴蜀漢代画像磚大全』には1979年に四川新都県新繁鎮で見出された野合図が2点、徳陽市黄許鎮出土の交媾図が1点収められています。野合図については生殖崇拜と説明されていますが、鬼神祭祀の場面であるかもしれません。

取りとめのない長時間の話の聴講を感謝します。

5. 質疑・応答

○司会

先生ありがとうございました。せっかくの機会ですので、先生にご質問させていただいてもよろしいでしょうか。

○会場1

弥生時代の祭りと、それから縄文時代の祭りと、特に違う点はどのへんでしょうか。

○金闇

大きな宗教史の枠組みでいえば、縄文時代の祭りは、一族や村を単位とし

た社会集団の全員が祭りを行う。祭儀のリーダーはいるかもしれないけれども、そのリーダーは同時に日常生活を主導していました。祭り専門の人はいなかったと思われます。拝んでいた神は、おそらく祖靈だったでしょうが、彼らの心には山野や森の至るところに、さまざまな神の姿が生き生きと映し出されていました。

以前、アフリカ先住民の神さまの話を読んだことがあります。森を通って行くと「あの木に神さまがいる。」「この草むらにも神さまがいる。」と。守ってくれる神さま、害を及ぼす神さまもいる。神と人が共存しているのが彼等の、縄文人の現実の世界だと思います。

弥生時代になると、神（祖靈）は神の世に住み、人は人の世に住む。人は必要に応じ神を招く。神は鳥の形で現れ、あるいは鳥に運ばれて来臨する。人々はシカを犠牲にして神を祭り、願い事をする。神を招くためには専門の技能をもった人が不可欠で、祭司、巫師となって儀式を執行し、他の人々は参加者にとどまる。巫師は鳥装をしていたと思われます。下関市の海辺の砂丘に弥生人は墓地を営んでおりました。弥生前期の梶栗浜遺跡がその例です。海の側に壇に容れた供物を供えています。祖靈の国は海の彼方のどこかにあって、子孫が頼めば来てくださるという信仰が窺われます。

○会場2

すみません。決して専門家の意見ではないのですけれども、弥生の稻作が始まって以降、われわれの血の中に、かつての縄文時代の遺伝子がほとんど消えているという考え方を持たれる方もいるのです。現に、私の友だちとか、ちょっと歴史に興味のある人たちは、現在のアイヌのように、ほとんど今現在日本列島に住んでいるわれわれの中には、縄文時代の遺伝子がほとんどないのではないかという考え方を持っている人もいるわけです。お祭りの点から、金闇先生はその点どう思われますか。

○金闇

形質人類学者がお答えする問題だと思いますが、私なりに人類学の業績を

八日市地方遺跡記念講演 2

学んだところを申せば、現代日本人の大部分は、縄文人の遺伝子と、縄文末から弥生時代にかけて渡来してきた人々の遺伝子の両方を含んでいると思います。渡来系の遺伝子の濃いのは北部九州を中心とした一帯だといわれています。形質人類学者の馬場悠男先生は、渡来系遺伝子の濃さを山に例え、富士山の頂上が北部九州で、なだらかな裾を引いて、東北や南に向かって下降して行くと言っておられます。日本列島で一番低いのはアイヌの人たちです。アイヌの人たちは、DNAでも生物学的には縄文人の直系の子孫であろうと考えられているようです。しかしアイヌの人たちと、非アイヌ系の日本列島住民の心の中で共通しているところは少なくないと思います。

列島の大部分の人々は、弥生時代になって新しい生業とともに新しい神観念を受け容れました。しかし、心の中に縄文的なものが残っていることは否定できないと思います。祭りも弥生時代に変りましたが縄文文化の要素に属すると思われているものも数多く採り入れられています。列島の東西によつて違いがあるかどうか分かりません。

本居宣長が、『古事記伝』で抽出した神とは、ヨーロッパ人が考えているような、唯一無二、絶対の神ではなく、強い力、異常なもの、それがすべて神であるということでした。

岩でも大きな岩、木でも老木や大木は神であります。人間でも強い力、不思議な力を持っていれば神であり、素晴らしい力の持ち主も途方もなく悪いことをした奴も神です。奇怪なこの世ならぬものはすべて神であるという信仰が残っています。これは、やはり縄文人の心性でもあり、おそらくアイヌの人々とも通じているでしょう。

それから、美しさの評価の上では、縄文的なものと弥生的なものを対比して、哲学者の谷川徹三が『縄文的原型と弥生的原型』(岩波書店)という書物で論じたことがあります。時代によって、日本の美術作品の中に、縄文的な力の強いもの、弥生的な理性のあるものが、縄を縫うように、見え隠れしている、一人の芸術家の作品にさえ、一生の仕事には、縄文的な面が強く出ることもあるれば、弥生的な面が出ることもあると指摘しておられます。

そのように、私たちの心の中には、遠い昔から考え方の傾向が、教育を通

じて再生產され、連綿と続いていると思います。ただし、21世紀にどうなるのか私には分かりません。子共たちの教育を学校に任せて親は知らない、という時代になれば失われてしまうかもしれません。

○司会

ありがとうございました。では、再度、本日の講師を務めていただきました金闇先生に盛大な拍手をお願いします。



会場の聴講者

成果報告 3

第19回まいぶん講座

八日市地方遺跡県文化財指定記念フォーラム

「弥生時代の西と東」



報告 1

福井県における弥生時代の集落様相

赤澤 徳明

1. はじめに

ただいまご紹介にあずかりました福井の赤澤と申します。よろしくお願ひいたします。今回八日市地方遺跡と比較するのに福井の状況というか、西の状況を説明してくれということで、簡単に1年ほど前に引き受けてしまったのですが、このような大がかりな会になると思っていましたで、非常に緊張しております。表題は「福井県における弥生時代の集落様相」ということで、福井県の弥生時代のムラにはこんなのがあるよと、こんなものがでているよというところへ行きたいのですが、副題として「八日市地方遺跡がうらやましい福井から」としました。というのは、今回博物館で展示されているのを見られた方はご存じだと思うのですが、八日市地方遺跡では土器のほかに木製品がいっぱい出ております。福井県の場合、これだけ木製品が出ている遺跡はなくて、土器以外の情報がなかなか分かりません。それでも分からぬではどうしようもないで、代表的な弥生時代の遺跡を取り上げて、紹介させていただけたらと思います。



2. 代表的な遺跡の紹介

まず最初に、お隣なのでご存じの方がいらっしゃると思いますが、福井県の地理的なものをご説明させていただきますと、第1図に地図を載せております。右上が石川県加賀です。左のほうに日本海がありまして、おたまじゅ

報告1 福井県における弥生時代の集落様相



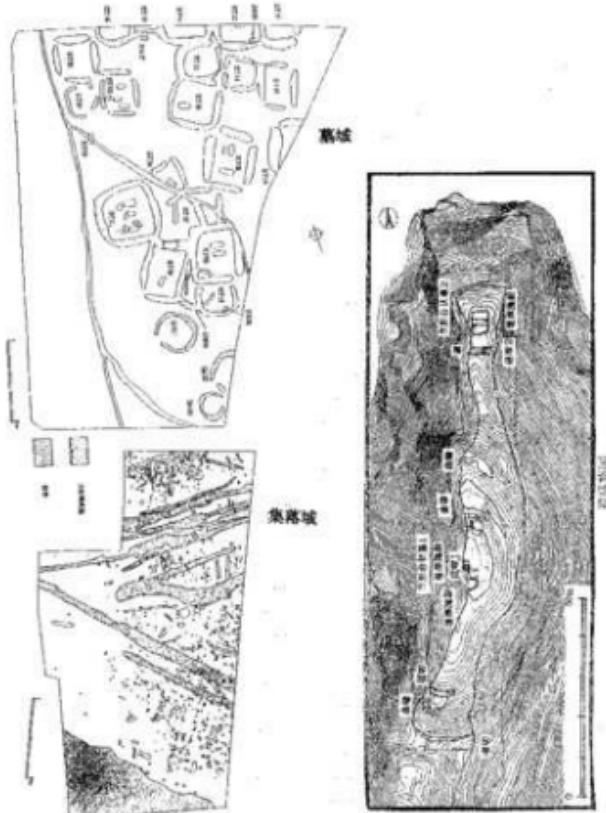
第1図 福井県の地名・概念図

くしのような格好をしております。おたまじやくしの尻尾のようなところが若狭、おたまじやくしの胴体部分になるところが越前だと思っていただければいいかと思います。

このあとお話をします遺跡は西から順番に若狭のほうから取り上げていこうと思つております。まず府中石田遺跡、木崎山城跡、丸山河床遺跡というのが、小浜の北川と書いてある辺りにございます。次に敦賀の吉河遺跡です。吉河と書いてヨシコと呼びます。それから横枕遺跡、あとスライドで出てきます瓜生助遺跡等につきましては、このおたまじやくしの胴体の真ん中辺りに鯖江と書いてあるこの辺りです。それから福井市周辺の眞置遺跡と今市岩畠遺跡は鯖江と福井と書いてある間になります。中角遺跡、これが福井と書いてある横辺りです。それから下屋敷遺跡です。これが一番石川県に近い加越丘陵の左下ぐらいになります。だいたいこういう位置関係です。遺跡については概要をレジメに書いてあります。府中石田遺跡から木崎山城遺跡、丸

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

山河床遺跡が、今のところ若狭を代表する遺跡群かと思います。この遺跡につきまして、第2図に全体図を提示しました。府中石田遺跡と木崎山遺跡と並べてありますが、平野部のほうで集落域と墓域とが隣接し、その背後の丘陵にもやはりお墓が見つかっているという遺跡です。まだ調査中ですので、細かいデータは出ておりませんが、だいたい弥生時代中期の終わりぐらいから墓域が始まっておりますので、おそらく集落遺跡もその辺からということです、まだ細かいところは分かりません。



第2図 府中石田遺跡・木崎山城跡（福井県教育庁理藏文化財調査センター 2006）

報告1 福井県における弥生時代の集落様相

その次に吉河遺跡です。この遺跡は福井県にありますので北陸の遺跡ですが、このように方形周溝墓が列状になっているというところが非常に畿内的というか、西日本的な様相だと言えます。その次の横枕遺跡は中期末の限られた時期に、平地式住居という竪穴状に掘り込まないで居住区が構成される単一時期の集落です。その次、ちょっと字が太くなっていますが、瓜生助遺跡ですね。これもまだ報告書が整理中で全体図も出ていないのですが、中期から後期にかけての集落です。あと先ほど見ました糞置遺跡です。これは北陸自動車道建設のときから調査されて、(福井県の弥生時代の遺跡として)非常に有名な遺跡ですが、いかんせん各時代の遺跡が重複している関係で、なかなか弥生だけの集落というか、弥生時代の遺跡が見にくいという状況になっています。今市岩畠遺跡は環濠という溝を巡らすものです。福井県で確実にそういう溝を巡らせる唯一の遺跡はここだけで、なおかつ一番北陸でも古いであろうというふうに考えております。その次は中角遺跡です。こちらは弥生時代の中後半の集落はちょっと分からぬのですけれども、その時期のお墓が出ております。土器も結構出ていますので、集落域も近くにあるだろうという遺跡です。それから下屋敷遺跡は弥生時代を象徴する青銅器である銅鐸の鋳型が出た遺跡ですね。これは現在合併しましたが、三国町という石川県に隣接したところの田んぼの中で出ております。一番西端は小浜の府中石田遺跡ですが、今回は概要がすでに分かっている敦賀の吉河遺跡から触れます。敦賀平野を上空から撮った写真(写真1)の手前が日本海側です。右手奥が近江、滋賀県から抜けてくる道です。右側が若狭から抜けてくる道



写真1 敦賀湾上空からの敦賀平野
(福井県教育庁理総文化財調査センター提供)

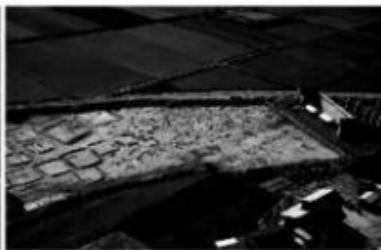


写真2 吉河遺跡集落と墓域
(福井県教育庁理総文化財調査センター提供)

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

です。皆さん関西に向かうときに北陸本線に乗られると北陸トンネルを通りますが、北陸トンネルが左側を通っております。国道8号線が右手奥から左手奥の山麓付近の平野部を通ります。敦賀が近江、若狭から入ってきた越前の一番西端ということになります。吉河遺跡というのは、山麓部からやや離れた平野部にあります。全景写真(写真2)の右側が北(敦賀湾)です。中央に川みたいなのがあるのですが、集落そのものが自然の川みたいなのに挟まれたところに、集落と方形周溝墓(弥生時代を代表する墓制)が列状に並んでいるという遺跡です。土器は初期農耕文化に伴っただろうという遠賀川式系(主に若狭湾から東に分布する)の壺が最も古い時期を示すものです(写真3左上)。東海から東日本を代表する条痕文という土器です(写真3右上)。この下に胴があるのですが、口の部分しかありませんし、もう一個も首が伸びるのですけれども、首から上の部分的なものです。吉河遺跡を始め敦賀の弥生時代で目立つ土器にお隣の滋賀県の土器があります。近江系の受け口状の口縁をした壺(写真3右中央)です。受ける口と書きますが、口縁が立ちあがっているものです。口縁の立ち上がりは中期ではそれほど目立たないが後期になると口縁の立ち上がりがさらに明瞭になります。また東海地方でも貝田町式という東海濃尾平野に分布する中期の伝統的な弥生の壺もあります(写真3中央左)。さらに中部高地系、中部高地と言いましても、長野もししくは岐阜県の美濃の辺りの山間部に代表される土器もその存在は非常に目立ちます(写真3中央)。このあとで笹澤さんがご説明されるであろう栗林式土器という言葉が出てきますが、栗林というのは善光寺平を中心で分布します。むしろ、こちらは南の松本から伊那とか美濃の山間部に分布する土器で、こういう太い沈線という模様を描くのが特徴的な土器です。(シンポジウム閉会後、「現在の研究では名古屋周辺の濃尾平野にも広く分布する」とのご指摘を愛知県の研究者の方から頂いたことを付記する)吉河遺跡の場合、特徴的な出土品としては、たぶんニワトリ型の土製品だと思うものが出土しています(写真3左下)。頭の周辺部分で、首が伸びて、ここから下は欠損していますので、全体がどういうかたちになっているかわかりませんが、ニワトリであることは問題がないと思います。上から見ると、鶴冠の部分が明瞭



写真3 吉河遺跡出土土器（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター提供）

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

に分かると思います。あとは、磨製の石の剣と青銅の磨製の銅鐵です（写真3右下）。この遺跡は弥生時代でも中期が主体の時期なので石礫や磨製石器、当然玉とか、そういうものも出ております。ちょっと弥生の普通の集落ではここまで掘って出ないようなものが出ています。

次は横枕遺跡といって、現在合併して越前市に入りましたが旧今立町、武生市というところの横にある遺跡です。これは先ほど言いました中期の末の段階でしか集落が形成されない遺跡です。奥の山をずっと廻って行くと、美濃もしくは近江のほうに抜けるところになります（写真4）。現在は和紙で有名なところです。上から見ると少し小さくて見えにくいですが、溝で囲った中に建物（平地式住居）が建てられたという遺跡です（写真5）。

この遺跡はおそらく建物に水が入ってこないように、もしくは排水用に切られた溝だと思います。柱は全周するものがありますが、やや並びが不規則です（写真6）。土器には八日市地方遺跡にも似たようなものもありますが、胴の上に点々と腹の胴部に施紋する、どちらかというと西日本的な土器です



写真4 横枕遺跡遠景（越前市教育委員会提供）



写真5 横枕遺跡全景（越前市教育委員会提供）



写真6 横枕遺跡住居全景
(越前市教育委員会提供)



写真7 横枕遺跡土坑の土器出土状態
(越前市教育委員会提供)

報告1 福井県における弥生時代の集落様相

(写真7)。あとは掘立柱建物も出ています。ちょっと分かりにくいですが、凹線文という指でナデたような線を入れるのが特徴的な土器(写真8)が目立ちます。また鳥形土製品が出ています(写真9)。出たときは逆になっていました。折れている部分におそらく鳥の頭が付くのでしょうか。実は近江系、滋賀県の土器も多くて目立ちます(写真10)。斜格子しゃくごうしという線の文様か斜めに線が入っているのですが、どうも近江でもどちらかというと南から東にかけて多い。つまり隣接する福井県に近い北のほうではなくて、もう少し離れた東もしくは南のほうの土器です。これが木製容器の脚の部分です(写真11)。幅が約20cmと小さいですが、ただ装饰性が強いものです。足の上にお皿がきて、もう一方に脚がつくわけですが、その片脚が残っていて出てきたものです。時期が特定できて明確な木製品はこれぐらいです。八日

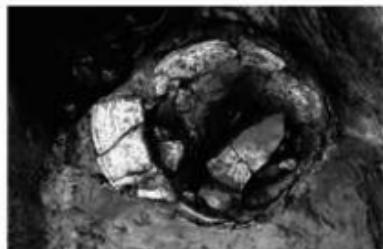


写真8 横枕遺跡凹線文土器出土状態
(越前市教育委員会提供)



写真9 横枕遺跡鳥形土製品
(福井県教育委員会所蔵)



写真10 横枕遺跡 蔵
(越前市教育委員会提供)



写真11 横枕遺跡木製容器 正面
(越前市教育委員会提供)

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

市地方遺跡みたいに多量に出ないものですから、八日市地方遺跡のほうが、データが豊富というかよく分かります。

次は瓜生助遺跡と言いまして、今の越前市（旧武生市）と鯖江市の市境に位置します（写真12）。JR北陸線の東側すぐです。奥が鯖江の市街地、手前が武生の市街地になりますけれども、このちょうど境ぐらいにある遺跡です。北陸線で通ると、すぐ分かるところなのですけれど、今は建物も何も建っていないので分かりません。ここにも中期の集落があります（写真13）。これが溝みたいに見えて、環濠でないかと言われるところなのですが、このように蛇行していると想定されますので、環濠でなくて自然の川ではないかとも考えられます。方形周溝墓に一部隣接するかたちで堅穴住居でなくて、中期だろうと考えられる掘立柱建物が建つと思われます。

同じ瓜生助遺跡でも、先ほどの集落から少し離れたところに方形周溝墓という弥生時代の伝統的な墓が並んでいます（写真14）。先ほどの吉河遺跡で



写真12 瓜生助遺跡遠景
(越前市教育委員会提供)



写真13 瓜生助遺跡全景
(越前市教育委員会提供)



写真14 瓜生助遺跡周溝墓 真上
(越前市教育委員会提供)



写真15 瓜生助遺跡周溝墓 真横
(越前市教育委員会提供)

報告1 福井県における弥生時代の集落様相

は列状に並んでいましたけれども、瓜生助遺跡ではどうも列状ではなくてばらばらに点在するような感じになります。ただこの遺跡の場合、ここに大きいお墓、倍以上の面積のお墓がありまして、中期でも後半ぐらいになると、このように大きいお墓をつくるのが福井県では幾つか見られます（写真15）。このあと資料にも入れてあります、糞置遺跡ねねいたやまとという遺跡のすぐ近くでも、そういうお墓が出ております（大田山古墳群1号墓と2号墓）。瓜生助遺跡の方形周溝墓からは供献土器というお供えをした壺が出ています（写真16）。非常に見難いですが、ここに櫛描文という弥生土器の特徴的な文様が入っております（写真17）。もう一つ、弥生時代中期とは若干異なりますが、弥生時代後期もしくは古墳時代に入るか入らないぐらいで、竪穴住居がつくられるようになりました。そこから小銅鐸、弥生時代の伝統的なサイズでいう銅鐸を模した小型のものが出土しております。手ずれというか、ぼろぼろになるまで使い込まれた状態で出ていて、壊れてもいます（写真18）。今回ご紹介できたのはかなり多くの部分が後期もしくは



写真16 瓜生助遺跡
供献土器出土状態
(越前市教育委員会提供)



写真17 瓜生助遺跡供献土器
(越前市教育委員会提供)



写真18 瓜生助遺跡小銅鐸
(越前市教育委員会提供)

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

古墳時代初頭まで下るかなというものです。

次に福井市の南のほうにある今市岩畠遺跡で、音楽堂という大きい建物を建てたときに調査をしたものです(写真19)。中期の方形周溝墓がありますが、先ほどの吉河遺跡みたいに並びません。点在しています。その横に環濠集落、おそらく3分の1か半分以下しか掘ってないので、全周するかは分かりませんし、内部も良くは分かりませんが、北陸で一番古い環濠集落だろうというのが出ています。あとで話題になるかと思いますが、(北陸での)稲作の定着をいつと見るかですが、基本的には環濠集落が入ってくる時期が最初に稲作の定着した時期ではないかと考えております。それと同時に、西日本ではこのサイズ(今市岩畠遺跡の環濠と同じ大きさ)、おそらく復元すると直径が70から100メートルまでの環濠集落が弥生時代の前期の終わりぐらいから中期の初頭、それこそ稲作が定着したであろうとする時に西日本の鳥取県や京都府、兵庫県辺りにも見られますので、こういうものが入ってきたというところで、稲作が定着した遺跡として今市岩畠遺跡があるのでないかなと考えております。



写真19 今市岩畠遺跡全景(福井県教育庁埋蔵文化財調査センター提供)

報告1 福井県における弥生時代の集落様相

ちなみに糞置遺跡という遺跡もこれのすぐ近くですが、そういう福井平野の南のほうのエリアに、今のところ初めのころの稲作農耕が定着した遺跡があるということです。次に中角遺跡という遺跡ですが、JRで（金沢方面から）行くと福井駅に入る手前に九頭竜川という大きい川がございますが、その川の縁にあります。ここも集落は弥生時代後期と後期以降しか見つかっていないのですが、中期につきましては、一部お墓だけ見つかっております。方形周溝墓というお墓です。弥生時代の中期だけではなくて、弥生時代後期、古墳時代、古代、中世とこの遺跡は続いていますので、どれがどの時代のものかなかなか分かりにくい状況です。福井県の弥生時代を代表する遺跡の多くは各時期の遺構が重複しているので、弥生時代そのものが非常に見えにくいので確実なことがお話しにくいのが実情です。ちなみにこの遺跡で、あとで笹澤さんが発表されます善光寺の栗林式土器というのが見つかっております。おそらく北陸では一番南限であろうと思います。

中角遺跡では条痕文系土器という、いわゆる愛知県、特に三河地方を中心とする土器もあります。このように伊勢湾の土器も入ってきており、信州の土器も入ってきており、つまり遺跡、遺構としては八日市地方遺跡と比較できないが、各地の土器が入ってきており、この遺跡がひょっとしたら今回問題となる拠点集落という要素の一つに入るのかなという気もしています。

最後の紹介になり下屋敷遺跡です。先ほど言いましたが、銅鐸の鋳型を出している遺跡です（第3図）。何か建物のようなものがあって、平地式住居というか、溝、先ほどもありました建物を溝で囲うものです。北側がずるずると地形が落ち込んでいて、おそらく潟湖か川の縁になるのかなというところです。

この遺跡のすぐ北側には石川県の加賀市に広がる加越丘陵です。それが広がっていて、福井県でも一番北端の弥生時代の集落と言えます。この遺跡から発見された銅鐸の鋳型（写真20左）と言っても、銅鐸には鐸身というか身の部分と鰐と鉢と、つり下げる部分があるのでけれども、これはそこまで作られていません。内側に銅鐸の鐸身という身を入れる。ここの縁に本当



第3図 下屋敷遺跡全体図（福井県教育庁埋蔵文化財センター 1988）



銅鐸の鉄型

柳描文系甕

条痕文系甕

写真 20 下屋敷遺跡出土品（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター提供）

報告1 福井県における弥生時代の集落様相

は鏃というのもなければいけないのですが、鉗というつり下げる取っ手の部分とともに、まだこの部分はつくり出しています（つまり完成した鋳型ではない）。下屋敷遺跡出土の鋳型については銅鐸をつくったのではなくて、銅鐸の鋳型ではないのではないかという説もあります。しかし基本的には砂岩という銅鐸の石型の石材としては一般的なものであると同時に、銅鐸分布圏の一番北端にありますので、この遺跡の周辺で銅鐸をつくっていてもいいのではないかということを言われています。

土器は普通の櫛描文という土器（写真20中央・右上）とともに、やはり条痕文という東海地方からの影響を受けた土器（写真20右下）に、工字文と言う、文様的には縄文時代の伝統を残す模様の土器も出土しています。基本的には、この下屋敷遺跡の時期はおそらく八日市地方遺跡の最盛期の時期と一部は重なるのであろうと考えていますが、八日市地方遺跡の特徴的な模様（腰や壺の口縁部内側に施文される斜行短線文）というのではなくはないのですけれども、少ないので、時期的にはない部分もあるかもしれません。この辺細かい話になるので端折らせていただきます。

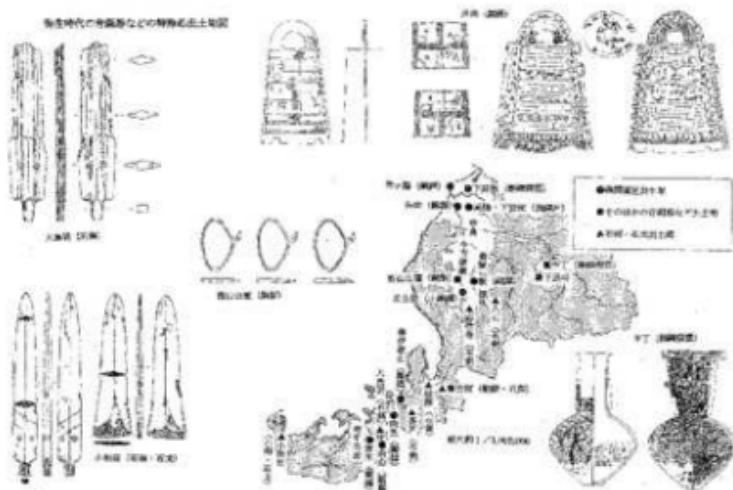
3. 福井県内出土の特殊品について

福井県の弥生時代の遺跡の多くは、具体的な遺構というものは見にくいのですが、そういうなかで考えますと、福井県の弥生時代の遺跡の場合どういうことが八日市地方遺跡と比較して言えるかというのは、単純に比較しようと思っても無理なので、それをまとめたのが第4図です。

第4図の地図に、福井県で出ている弥生時代を代表する祭祀というか、お祭りの道具、特殊品を出しました。これを見ていただければ分かりますように、一つには銅鐸、石川県では出ないので、（石川県には伝内灘町出土といふ銅鐸がありますが確証がありません）今のところ弥生時代を代表する銅鐸の北限が福井県です。一番北端が先ほど言いました下屋敷遺跡の近くで出土しています。下屋敷遺跡の横に港町の三国の街中なのですが、米ヶ脇このヶ脇といふところがあります。この三国港の米ヶ脇で出土している銅鐸が一番北限です。それからこの左側の図です。これは磨製の石剣です。一番左上が若狭の

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

大鳥羽遺跡（現在のわかさ町）というところで出ている有柄式石劍、劍の中ほどに溝が入っているものです。その下が小和田遺跡（現在の高浜町）の石劍と石戈です。戈というのは日本では発達しなかった武器の一種です。『三国志』とか、そういうのを見ると出てくるのですけれど、敵である相手を引っかける道具です。そういうのを模した石の武器のことです。それから真ん中にワッカのようなものが書いてあります。これが青銅製の鉗、プレスレットで、これが鯖江市の西山公園遺跡で9個も出ています。基本的には西日本の九州のゴボウラ貝という南海産大型巻貝の貝輪を模したもので、貝の巻いている部分に当たるのが右側の突起の部分ですね。それを模した青銅器だとされています。愛知県とかで幾つか出ておりますが、九州以外でまとまって出ているのはこの9個が非常に特異な状況です。北部九州ではそこそこ出でております。それからもう一つ右側に銅鐸形壺と書いてありますが、これでは何も分からぬので、図面を逆にすると壺の首の部分のところに横に鱗が付くように見えます。これが銅鐸を逆さまにして、壺の口にしたのではないかと考えています。細かくて模様が見にくいのですが、銅鐸と同じような模



第4図 青銅器などの特殊品出土地図

報告1 福井県における弥生時代の集落跡相

第1表 福井県における青銅器出土遺跡

銅鐸関係

遺跡名	品名	遺跡所在地	遺跡の性格	遺跡の立地	出土品の意義
下屋敷遺跡	凝灰質砂岩の 外縁付鋲1式 4区面装模様文	板井郡 三国町加戸	集落遺跡 銅鐸埋納地	沖積地旧潟湖 に築する	日本海側の銅鐸出土地東端の 越前北端でも銅鐸を製作してい た可能性
米ヶ船遺跡	外縁付鋲1式 4区面装模様文	板井郡 三国町米ヶ船	銅鐸埋納地	日本海に注ぐ九 頭龍川の河口を 臨む丘陵斜面	確実な出土例としては日本海 側で東端に位置する
井ノ向遺跡	外縁付鋲 1式流水文	板井郡 春江町井ノ向	銅鐸埋納地	周囲に山や丘陵 もない福井平野 の中央	古くに分類される銅鐸が腹内 以外でも存在する。また2点と も絵画のある銅鐸として、銅鐸 研究には欠くことのできない存 在である。
	菱形鋲2式 模様文				
井ノ向遺跡 (明治大学1号鋲)	外縁付鋲2式 流水文	井ノ向出土との伝承だけで、当地の出土との確 認はない。			井ノ向で3個。しかも比較的古 手の銅鐸出土の意義は大きい
新造跡	突錐鋲式 6区面装模様文	鯖江市新町	銅鐸埋納地	福井平野南端の 平野に面した山 麓	三造銅鐸の前身または祖形 ではないかとされる
南伊夜山遺跡	扁平鋲2式 6区面装模様文	三方郡 美浜町郷市	銅鐸埋納地	耳川の段丘を臨 む山麓	馬込には象眼調査などされる など、範囲がわかる弥生時代 の遺跡どころか、まとまった土 器の散布地も知られていない。 この銅鐸の出土で付近に大規 模な弥生時代の集落が埋没し ている可能性が高いものと思 われる。
向笠遺跡	突錐鋲2式 6区面装模様文	三方郡 三方町向笠	銅鐸埋納地	?川流域の冲積 地を望む丘陵の 先端	両者とも地形的にもまとまりが あり、弥生時代の遺跡が知られ る地域に属する。若狭の弥生 時代の単位を示す指標と考え られる。
向山遺跡	扁平鋲2式 6区面装模様文	遠敷郡 上中町野木	銅鐸埋納地	北川に面した丘 陵の先端	
(伝)野木村出土と もされる。確実な出 土地点不明 (東京大学文学部 考古学研究室蔵)	扁平鋲2式 6区面装模様文	遠敷郡 上中町野木	不明	不明	現在では弥生時代の集落が多 い小浜市東部地域に近い出土 地
不明(続日本後紀) 卷九の記事	不明	不明	不明	不明	

銅鐸以外の青銅器

古墳の副葬品を除く

遺跡名	品名	遺跡所在地	遺跡の内容	遺跡の立地	遺跡の性格
木田遺跡	鏡種不明の鏡鋲 部分の破損	福井市木田町	集落遺跡	福井平野中央 の冲積地	一般的な集落
	銅鏡1本				
西山公園遺跡	有鉤銅鏡 9点	鯖江市長泉寺町	弥生時代の 墳墓群に隨 伴	福井平野南端中 央の丘陵斜面	埋納遺跡
下黒谷遺跡	銅鏡1本	大野市下黒谷	集落遺跡	大野盆地東部の 扇状地	一般的な集落
吉河遺跡	銅鏡1本	越賀市吉河	墓地とセット の集落遺跡	敦賀平野南東部 の冲積地	一般的な集落

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

様も刻まれておりますので、銅鐸を模した壺でいいのだろうとされています。何で逆にしたかよく分からぬのですけれども、そういうものが出ているというところです。そういう意味で言うと、銅鐸に代表されますように、銅鐸分布圏の一番北限であるというところが福井県の状況ではないでしょうか。当然それに伴って、土器も非常に西日本的な土器も入っておりますが、そのへんは細かくなります。それで私のほうでは、福井県とはどういうところなのかというのを図式化したのが、第2表に示しております。縱に太い線があるのが、どうもこの辺で大きく変わるものよというところです。例えば、弥生文化の波及の象徴とされる遠賀川式土器という、遠賀川というのは北部九州の地名なのですが、その土器がある範囲、要するに遠賀川式土器が面的にある程度分布していると思われるのが丹後から若狭までです。先ほど資料に出しました府中石田遺跡のすぐ脇の丸山河床遺跡というところで多く出ておりまして、若狭までは確実に定着しているだろう。敦賀はないのですけれども、同じ沿岸部で気候的に似たようなところなので、敦賀まであるだろうと考えています。ところが越前でも福井の平野部に入りますと、今のところある程度あります、点在してしか見つかっておりませんのでこの辺がどうかな、と考えています。それから逆に東から見た場合、先ほどもスライドで若干出しました条痕文系土器という、愛知県（東

第2表 北近畿・北陸の弥生時代の地域概念

地域	若狭湾沿岸			北陸南西部			北陸東部	
	丹後	若狭	越前国 敦賀	福井平野 南部(美浜)	福井平野 北部	加賀	能登	
近畿土器	遠賀川式土器文化圏	ふくしまれいわき文化圏		?	遠賀川式土器在	遠賀川式土器のみ?	遠賀川式土器 文化圏外	
中	中前半	奈良原土器系複合	奈良原(第一・第二)		土器の構成は奈良原土器と根室文土器の二系統			
中	銅鐸		銅鐸		銅鐸分布北縫	銅鐸?		
	中後半	丹後系	近江系	遠江系が目立つ	遠江?		根室式	
	石劍			石劍分布圏(上越まで)				
弥生時代 後期	内後(若狭周)系土器			大村は法仏式土器文化圏				
	内後系土器	近江系と内後系が混在		?	法仏式土器文化圏		?	
	根室口茎熱器タイプの基形が生産			?	根室タイプがあるが少ない			
	内後型茎熱器	?	?		茎熱器		茎熱器	
	高知(西隅)	始石器	南瀬基と古代器(西隅なし)			出張		
後期的末 (土器)	内後(若狭周)系土器(実器は不明)		月影式土器在		月影式		月影式?	

* 美 蔵 (大野・勝山) は ?

報告1 福井県における弥生時代の集落様相

海)を中心とする土器がどこまで出ているかです。先ほどの敦賀の吉河遺跡で出ていますが、それから西の若狭とか丹後では、今のところ確認していないというところです。

銅鐸につきましては、越前の福井が銅鐸分布の北限であることは説明いたしましたとおりです。土器で言いますと、近江系土器とさっさと少し説明させていただきましたが、滋賀県で特徴的な土器もありと福井平野の南のほうすべての遺跡ではないのですけれども、そこそこ目立つ状況です。ところが福井平野の北側、例えば先ほど銅鐸の鉄型があると言いました下屋敷遺跡では今のところ確認しておりません。そういう土器の分布でも、どこかこの辺に境があるのだろうと考えられます。そのあと後期に入りますと、やはり越前から若狭のこの辺りに、どこか境があるのかなと考えております。

4. まとめ

それでは遺跡の概略は終えまして、福井県の弥生集落についてのまとめというところで、もう一度まとめてみます。資料集5ページに書いてあります。福井県は先ほどから言っておりますが、面積的には石川県もそうですが、かなり小さい県です。あとで発表される笹澤さんの新潟県の半分もしくは3分の1以下の非常に小さい県なのですが、律令時代の国としては越前と若狭で、旧2国ででてあります。

ところが先ほど言いましたように、若狭というところまでは確実に弥生の初期農耕文化の遠賀川式土器という文化圏に含まれるのですが、越前はちょっと今のところどうかな、と思われることは説明いたしました。発掘すれば出てくるのだよという方はいらっしゃるかもしれません、出てきても密度の具合(つまり遠賀川式土器に代表される初期農耕文化)は、若狭と違うというふうには考えております。つまり初期農耕文化が福井平野で定着してはいるけれど、集落を長期間にわたって確実に展開するまでにはなっていない可能性があるということですね。条痕文系土器の影響は弥生時代の前の縄文時代晩期以降から続くのですけれども、中期に入ってくると北陸に広がる土器だと考えておりますが、この条痕文系土器についても、先ほど言いま

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

した敦賀の吉河遺跡、これから西では見つかっておりません。東の影響も逆に言うとここまでかなと考えられます。

ところが一方、八日市地方遺跡も含める福井平野から北のほう、若狭を除く北陸は弥生時代中期以降、条痕文系土器と櫛描文系土器という土器のタイプの違うものが二つ並立といふか、二つあって、そのどっちかで構成されるというところから、越前の平野もかなり石川県の状況に近いのかなといふように考えます。若狭よりは、越前はそっちのほうに近いのかなと言えます。

山間部（現在の勝山市・大野市のある奥越地方）のほうはまだ発掘調査が少ないので、さらに条痕文系土器の占める比率が高い可能性があります。当然山を越えて、峠を越えれば美濃の長良川上流に行きますので、逆に言うと条痕文系土器が入ってくるルートも、そういうルートかなと考えております。それから後期に入りますと、若狭湾では当然近いところの近江、滋賀県との影響が強かつたりします。もしくは丹後の土器の影響が後期に入ると非常に強くなり、北陸一円が丹後の影響を受けるわけです。特に若狭湾の場合、影響というか丹後と同一といつていいような状況に見えます。

それとともに東海地方の土器も、例えば福井県の中央部、鯖江の辺りにはパレスタイルという土器が入ってきて、東海の影響も受けます。西から丹後の影響を受けつつ、南からは山越えて東海の影響を受ける。これは中期も一緒なのですが、そういう状況です。それから東日本の影響です。東日本でも長野県の栗林式土器というのが、今のところ中角遺跡で見つかっていますのが、南限です。それからもう一つ、時期的にはいろいろ問題があるので、後期前半だとされる天王山式という福島県を中心に分布する土器が鯖江市持明寺遺跡で見つかっていることを考えても、東の文化が押してくるのもここ越前までかなと言えるでしょう。

話は若干戻り先ほど言いました東海の影響ですが、これも銅鐸形土製品にある銅鐸形壺の本来の形についても、東海に多い。多いというか東海の影響を受けた土器だと考えております。それから南越盆地、福井平野の南のほうです。鯖江で三遠式銅鐸、三遠式銅鐸というのは、三は三河、遠というのは遠江ですから、三河から遠江にかけて分布が多い三遠式銅鐸の祖形ではない

かと言われる銅鐸が、鯖江市新遺跡^{しん}というところで出ておりますので、そういうことも考えると、東海の影響もこの辺にはぐっと入ってくるのではないでありますか。

最後に今回、八日市地方遺跡と比較するのに拠点集落について考えました。福井の拠点集落について発表してくれと言われて、はたと困りました。拠点集落とは何だろうと考えましたが、例えば八日市地方遺跡については環濠^{わき}というものがあって、木器とか石器とか、そういうものを生産している。玉もやっている。いろいろなことをやっている。さらに集落は大きい。その集落を溝で囲うというのが八日市地方遺跡。それと比較すると福井の場合、まず環濠集落^{わき}というものは、農耕の最初の波及定着時期に見られた今市岩畠遺跡しか今のところない。この他に環濠集落はないのです。それを考えて、どういうことかなと思いますと、一つには先ほど言いましたように、調査している面積とかいろいろありますが、北陸の場合は弥生時代中期には環濠集落はなくてもいいのかなと考えます。それと八日市地方遺跡もしくは、あとで発表があります能登の羽咋の吉崎・次場遺跡も、邑知潟^{いぢがたけ}という潟湖に面している。要するに、海上交通とかそういうものを意識したところに拠点集落がつくられると考えると、今のところ福井県の福井平野には潟湖は復元できない。北潟湖とかありますけれど、北潟湖は平野部に面してないので、あれはちょっと除外して、弥生時代の福井平野に潟湖はあるかどうかは現段階では分からぬ。そういうことで潟湖がない状況です。

ところが一方では、東海の土器とか近江の土器とかがどんどん山越えして入ってきてる。そういうものが入ってくる最初の口が越前かなと言えるのでしょう。ここを通り越して八日市地方遺跡に入っている土器もあるのですが、基本的にはずっと押してきて入ってくるところが、福井の越前というところと考えております。東海の条痕文系土器が出たり、近江系土器が出たり、あちこちの土器が出ている遺跡というのを考えますと、先ほどスライドでも見せました吉河遺跡もしくは中角遺跡^{なかかく}というのは、そういう拠点集落にあてはまるのかなと思っております。では環濠集落があるのか、木器生産をやっているのかと、今のところそういう状況はないのです。その辺が、このあと

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

の議論にはなると思います。

ということで、一応だいぶ端折ってつたない説明で申し訳ありませんでしたが、わたしのほうの成果につきましては、例えば第2表、もしくは第3図に福井県を代表する弥生時代の特異な遺物を載せてあります。この辺を見ていただければ、ほかの地域も同じ条件で資料をつくられているわけはないのですが、基本的には銅鐸が一番あるのが大きいかなというふうに思います。

最初に見ました八日市地方遺跡はうらやましいなど、たくさん木・石器が出て遺物がいっぱい出て、いろいろなことが分かってうれしいなと思う反面、ここで一つ言えば、どうだ、銅鐸そのものは持っていないだろうと言って、わたしの話を終わらせていただきます。

報告 2

新潟県における弥生時代の拠点集落の変遷

笹澤 正史

1. はじめに

皆さん、こんにちは。

わたしは新潟県上越市というところから、やってまいりました笹澤と申します。よろしくお願ひいたします。それで今日、八日市地方遺跡のフォーラムということで、こちらのほうにおじゃまさせていただいのですが、実はわたしが発表いたしま

スライド
す吹上遺跡は、八日市地方遺跡とほぼ同じぐらいの弥生時代中期の遺跡でわたくしが担当したのですが、以前吹上遺跡のことで地元のほうで講座をやったときに、下濱さんに八日市地方の話をしてほしいということでお願いして来ていただいた経緯があります。今回はそのお返しという意味も込めまして、こちらのほうに来させていただきました。

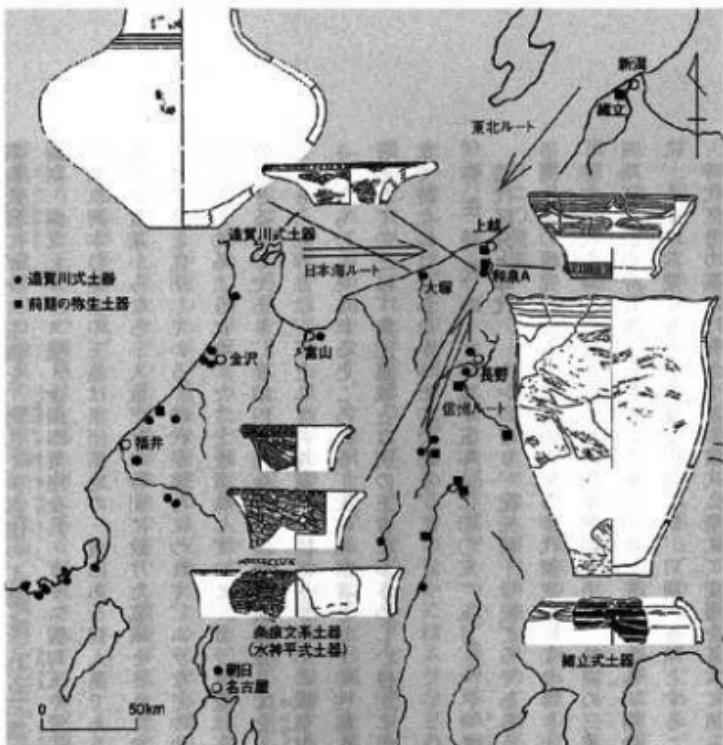
まず新潟県までは、ここから上越市までだいたい230キロぐらい離れていまして、たぶん皆さんはなかなかなじみがないところだと思います。こちらに簡単な図面(第1図)がありますが、福井のほうから新潟まで入っています。上越というのは、ちょうど今ここにあるのですが、小松市がこの辺りにありますので、ここから230キロぐらい離れたところになります。新潟県の範囲は富山市がここにあって、ここに姫川があるのですが、この辺りからさらにずっと上のほうまでと、海岸線だけでだいたい300キロメートル以上あるような南北に細長い県になります。面積のほうも、本州で3番目くらいの大きさになりまして、富山県と福井県と石川県を足すと新潟くらいの



報告2 新潟県における弥生時代の拠点集落の変遷

広さになるというくらい広い地域になります。ということで、ひと口に新潟県と言いましても、地方、場所によって風土も違いますし、文化そのものも違ってきてるという、いろいろな顔つきを持っている地方になります。

新潟県の弥生時代の特徴について、ひとことで話せと言われても、なかなか難しい部分があります。今回はそのなかでも、わたしが勤めております上越市を中心に話を進めさせて頂きます。第2図に柏崎という中越地域でも上越寄りのところがあります。その柏崎市に下谷地遺跡さとうちという遺跡があります。それからここが佐渡島ですね。日本の離島としては一番大きな島なので



第1図 初期弥生文化の波及と前期土器の分布(上越市史編纂委員会 2004 転載)

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

すが、この佐渡に新穂玉作り遺跡群という管玉なんかをたくさんつくった遺跡があります。この佐渡と柏崎と上越の三遺跡を中心に、お話をさせていただきたいと思います。

新潟県というのは今申しましたように、本州側の地域と佐渡を併せて新潟県となっております。昔の国名で言いますと、佐渡が佐渡国ですね。本州側のほうは越後国と呼ばれていましたので、ここでも越後、佐渡という区分けで話をさせていただきたいと思います。

2. 農耕集落成立以前

まず弥生文化がどういうふうに伝わってきたかということなのですが、第1図に書いてありますように、先ほど赤澤さんの話の中で弥生時代前期に環濠集落が入ってきて、稲作は一部定着しているということだったのですが、このとき新潟県はどういう暮らしをしていましたかというと、まだ縄文時代の生活を送っていた時代になります。土器も遠賀川式土器^{あんががわしき}というものはほとんどありません。第1図に示したように、縄立式土器^{ねじりてき}と言いまして、これは新潟市の縄立遺跡^{じょうりつき}というところが標識^{ひしき}になっているのですが、棒のようなもので漢字の「工」^{こう}という文字に似ている「工字文」^{こうじもん}のような文様とか、太い線で文様を書いた土器を使っていました。それに縄文なんかが加えられている土器をまだ使っている時代です。当然稲作をおこなっておりませんので、おそらく狩猟生活をしていたのだろうと思われます。先ほどからお話を出ていました遠賀川式の壺ですね。こういうものがたくさんはないのですが、それでも伝わってきます。おそらく、こちらのほうには海沿いに伝わってきたと思うのですが、縄文土器に遠賀川式土器が少量あるというのが、弥生時代前期と言われている時代の新潟県の状況になります。一方では長野県を通過して条痕文系土器、先ほど愛知県を中心に分布する土器という説明がありましたが、こういうのも伝わってきております。この信州ルートと書いてありますけれども、こういうルート。それから遠賀川式の日本海のルート。そして、より東北のほうに近い縄立式が分布するところがあります。そういうところから、いろいろなものがもたらされてきてまして、それでいろんな人の交流が

おこなわれていた時代になります。特にそういった交流が上越地域で盛んにおこなわれていたようです。

3. 農耕集落の成立と玉作り

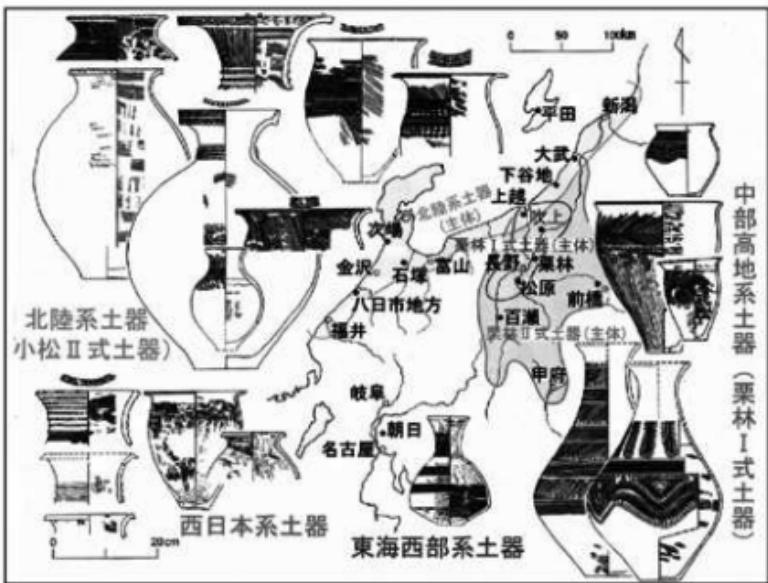
弥生時代前期と言われている時代は、結局稻作というものが定着しない状態なのですが、それから数百年たって弥生時代の中期と言われる時代ですね。ちょうど八日市地方遺跡が非常に大きな集落になるぐらいのときになりますと、ようやく新潟県も稻作文化というのがちゃんと伝わってきて、米づくりを始めます。そのときに、第2図のここに八日市地方遺跡があって、先ほど出ていた次場遺跡、富山県の石塚遺跡とかいろいろな、おそらく地域の核となるような遺跡が出てくるのですが、それからずっと伝わって、おそらくこの吹上遺跡というところに最初に大きな波及の波がくるのだろうと今考えています。だいたい同じ時期か、少し遅れるぐらいの時期に柏崎市の下谷地遺跡。それから今合併して長岡市になったのですが、旧和島村と言いう出雲崎半島に近いところにある大武遺跡。佐渡の平田遺跡。遺跡名が書いてないのですが、新潟市のさらに上のほう阿賀野川を越えた辺りに道下遺跡という遺跡があって、弥生時代中期になると一挙に稻作文化が広がってくることになります。距離的に見ますと、だいたい同じような間隔で中核になるような遺跡が出てきて、おそらく海を渡ったりして、飛び飛びに、そういう文化が波及していくのだろうと考えております。

ここに写っている図面(第2図)なのですが、これは吹上遺跡から出土した土器を、このように張り合わせたもので、どこの地域の影響が見られるかというものを示したものになります。こちらの赤く塗ってあるところが栗林式土器の文化圏、この青と赤いところです。先ほど赤澤さんの話からありました長野県の北部、長野市辺りを中心に分布する土器になります。

これから下濱さんの話で出てくると思うのですが、一方北陸の海岸沿いに広く分布する土器として小松式土器があります。吹上遺跡の土器というのは、小松式土器がだいたい7割ぐらい、長野県を中心に分布する栗林式土器が全体の3割ぐらいという構成になっております。それ以外に、これは東海

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

西部系と書いてありますが、直接愛知のほうから渡ってきたわけではなくて、おそらくいったん北陸に伝わったものが、さらに吹上のほうに伝えられたのだろうと考えているのですが、そうした東海地方の影響が見られるような土器。それからさらに石川、福井を越えて、より西のほうですね。近畿よりも少し西のほうかなというような特徴がある土器も吹上遺跡で見られます。どうも稻作文化の成立とともに、それまで以上に遠隔地域の人々との交流がすごく盛んになり、各地域からいろいろなものが吹上遺跡にもたらされてくるという。それがおそらく、それまでの縄文時代のつながりとは違う展開を見せ始める段階なのかなと考えております。一方、この下谷地遺跡については、吹上遺跡ほど広範囲な交流関係というのは見えてこない状況です。遺跡の大きさそのものは中期の吹上遺跡で、だいたい5ヘクタールぐらい、下谷地遺跡が4ヘクタールぐらいの規模なので、遺跡面積からすると、そう大きな差はないのですが、広い地域との交流関係が見られるような遺物は下



第2図 吹上遺跡と新潟県の弥生時代中期の遺跡（上越市史編纂委員会 2004 転載）

谷地遺跡にはないので、両者では他地域との交流関係の広さに違いが見られます。

一方離島になる佐渡ですが、ここに平田遺跡という遺跡があり、これは佐渡新穂玉作り遺跡群の中の遺跡の一つになります。佐渡というのは、緑色凝灰岩という管玉の材料になる緑色の石が非常にたくさん取れるところで、それを使って盛んに玉作りをおこなうのですが、この新穂玉作り遺跡群というのは、どれぐらい遺跡が広がっているのかという調査をおこなった結果、だいたい全部で40ヘクタールぐらいの広さになるという、新潟県で突出した規模を持つ遺跡になります。

それはいろいろな遺跡が寄り集まって、それぐらいの面積になっており、実際一つの遺跡の面積がどれぐらいの規模かというのは、正直分かっていないところです。ここは離島ですが、やはり吹上遺跡と同じように東北地方の土器とか、栗林式土器も出ますし、より西のほうの特徴が見られる土器もありますので、この平田遺跡も広範囲な交流関係を持っていたということが見られるものです。ただ新潟市の北のほうへ行きますと、西の方面の影響が見られる土器というのは基本的に出なくなります。ただ、信州系と言われる栗林式土器は、信濃川沿いにさかのぼって行って、新潟のほうにも伝わっています。このように、新潟県域というのは、県そのものの広さをあらわすように、いろいろな地域との交流が認められますが、県の南側と北のほうで、若干様相が違っているという特徴があります。

次に、上越市にある吹上遺跡と柏崎市にある下谷地遺跡について、もう少し詳しく見ていいきたいと思います。なぜこの遺跡を取り上げたかと言いますと、この二つの遺跡以外に弥生時代中期の集落の内容が分かる遺跡が新潟県にはないからです。石川とか福井ですと、先ほど赤澤さんの発表にありましたように遺跡名がたくさん出てきたのですが、新潟県というのは遺跡名を挙げようにも挙げられないほど、遺跡そのものが少ない状況です。これはどういうことが考えられるかと言いますと、先ほど新潟県は非常に広大な面積があるという話をしたのですが、それに比べて人口が非常に少なかったと考えられています。実際わたしの住んでいる上越市も、このあいだの平成の市町

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

村合併で 14 市町村合併というとんでもない合併がありまして、市の面積とすれば日本でも一番か二番ぐらいの広さになっているのですが、人口は 21 万人ぐらいしかないところで、やはり面積に比べて人口密度が今でも少ないところです。今、新潟は穀倉地帯というイメージがあるかと思うのですが、今の水田というのは江戸時代以降の干拓によってつくられたもので、江戸時代より前の姿というのはほとんど草や蘆が生えているような、じめじめしたような場所になります。実際に、新潟県では、人がたくさん住めるようなところが少なかったということが、最近の調査で分かってきています。

それで吹上遺跡についてですが、先ほどの福井では、遺跡がどちらかというと海沿いのほうに多く見られたのですが、これは今の直江津港からだいたい 10 キロぐらい内陸のほうに入ったところにある遺跡になります。写真 1 の上方に西ヶ原山地という標高 2000 メートル前後の山が連なっているのですが、写真の左のほうに行きますと、妙高とか飯縄という山があり、長野県のほうに抜けられます。図の右のほうに行くと海にでます。そういうこと

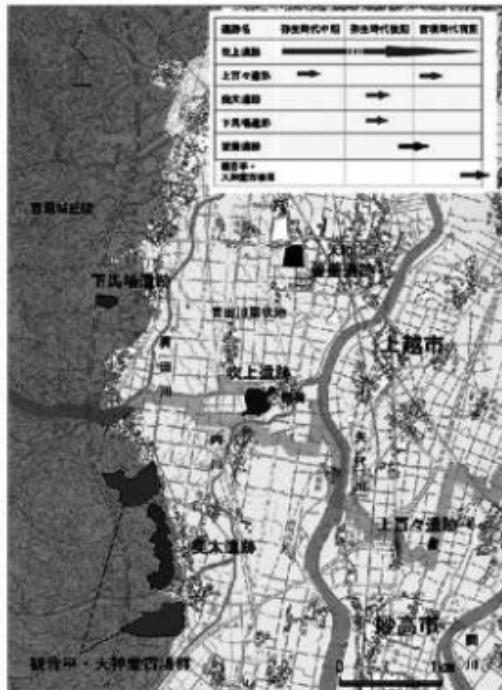


写真 1 吹上遺跡と斐太遺跡群（上越市教育委員会提供）

報告2 新潟県における弥生時代の拠点集落の変遷

で、ちょうど長野のほうに向かう玄関口辺りに、この遺跡があります。あとで出てくるのですが、弥生時代後期になりますと、斐太遺跡とか下馬場遺跡という遺跡が西頭城丘陵の低いところに出現してきます。その後に觀音平古墳群とか天神堂古墳群という、いわゆる古墳がたくさんつくられました。最初に吹上遺跡がつくられますと、統いてこれらの遺跡が周りにだんだんでてくるという変遷になります。先ほどの写真を図面にしたもののが、第3図ですが、吹上遺跡が弥生時代中期から、途中集落が小さくなったり、大きくなったりしながら、古墳時代前期まで統いていきます。弥生時代中期には、その周りに上百々遺跡というような小さな遺跡もできるのですが、遺跡数は少ないです。第3図の中

ほどに吹上遺跡があります。その北には、弥生時代の一番終わり頃の釜蓋遺跡という、環濠を持つ集落があります。山側には斐太遺跡という、これも環濠を巡らせている遺跡がありまして、その北には下馬場遺跡があります。このように弥生時代後期になりますと、だいたい吹上遺跡を中心にして半径1.5 kmぐらいに、遺跡が集中するという状況が見られます。先ほど話しましたように、上越市の平野の奥まったところでは、吹上遺跡が成立したあと、弥生時代の後

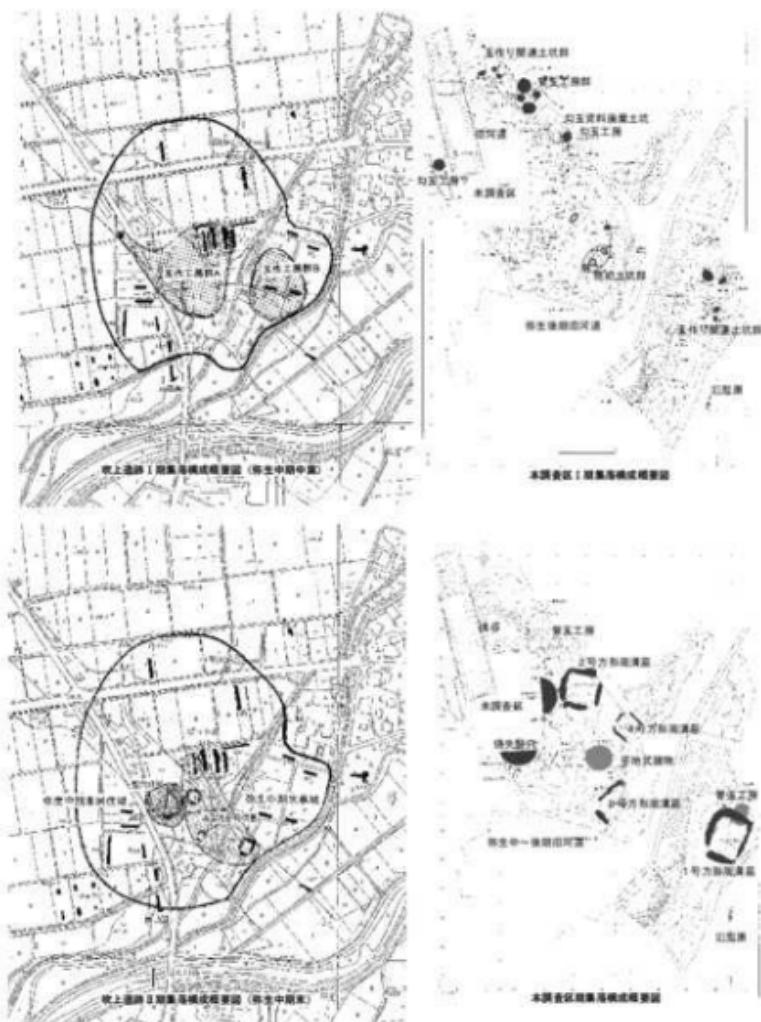


第3図 高田平野南西部の弥生・古墳時代遺跡群
(窪澤 2008)

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

期以降になると、どんどん遺跡ができる状況なのですが、八日市地方遺跡と同じ中期の状況はどうだったかを次にお話いたします。ここに吹上遺跡があります。第4図に示した範囲が、遺跡の広さになります。だいたい5ヘクタールぐらいですね。先ほど言いましたように、いろいろな地域との交流が盛んにおこなわれます。少し見づらいのですが、第4図に右上に色で塗ってあるところがありますが、これは玉作りをおこなっているところでして、管玉とかヒスイの勾玉などをたくさんつくっていた場所になります。こちらもそうですね。遺跡の真中辺りはあんまり建物がなかったところで、大きな土坑どこうというごみ捨て穴が掘られていた場所になります。その穴が掘られていたところに、先ほど赤澤さんのほうから銅鐸どうたくとかお祭りの道具の話がありましたが、銅鐸そのものではないのですが、銅鐸をまねて土でつくった銅鐸形土製品とか石劍せつけんというような、少し変わった遺物が集中して出てきています。変わった遺物が出るような場所があって、その周りに玉作りをする建物をつくる。住居とかお墓などはさらに周辺につくられるということが調査で分かりまして、吹上遺跡のムラとしての最初の姿がこのように捉えられるのではないかと思っています。それからしばらくして、弥生時代中期の終わりぐらいの時代になると、遺跡の規模はそんなに変わらないのですが、ムラの内容が変わります。玉作りをあまりしなくなり、先ほど出ていた方形周溝墓といい大きな四角い溝で囲ったお墓が幾つかつくられるようになります。この時期にはこれまで建物がなかったところに、竪穴住居とか平地式建物と言われている建物がつくられるようになります。というふうに、最初にムラができた状況から、だんだんムラの姿が変わってくるという変化が吹上遺跡の中では見られます。先ほど赤澤さんの話の中で吉河遺跡がそうだったのですが、お墓をつくる位置と、建物をつくって実際生活する場所は大きく分かれているということでしたが、どうも吹上遺跡を見てみると、建物とお墓がものすごく近くにつくられるという、厳密にお墓をつくる場所と住む場所が分かれないと特徴が見られます。

次に柏崎市の下谷地遺跡を見てみると(第5図)、吹上遺跡とだいたい同じぐらいの時期になるのですが、緑色で示したところが玉作りをしていた



第4図 吹上遺跡の集落変遷（上越市教育委員会 2006 改変）

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

建物になります。小さな緑色の部分は、玉作りをする途中で出る石くずなどの不要品を捨てていった穴になります。色を塗ってない溝が回るものは、玉作りをおこなわない建物になります。こうした建物のすぐ近くに、方形周溝墓があります。やはり建物とお墓とが分離しないで、建物のまわりにお墓がつくられるという状況が見られます。柏崎と上越では50キロぐらい離れているのですが、そのように離れた地域でも、集落のかたちとすれば、同じようなかたちを取っているという特徴が見られます。お墓と住居がはっきりと分かれいで、これから後でお話に出ます八日市地方遺跡とか、先ほどの福井の

状況とは異なるムラのかたちが見られます。それが新潟県の弥生時代中期ぐらいのムラのかたちの一つの姿をあらわしていて、もしかしたら、新潟県の弥生時代のムラの一つの特徴になるのかなと今考えているところです。

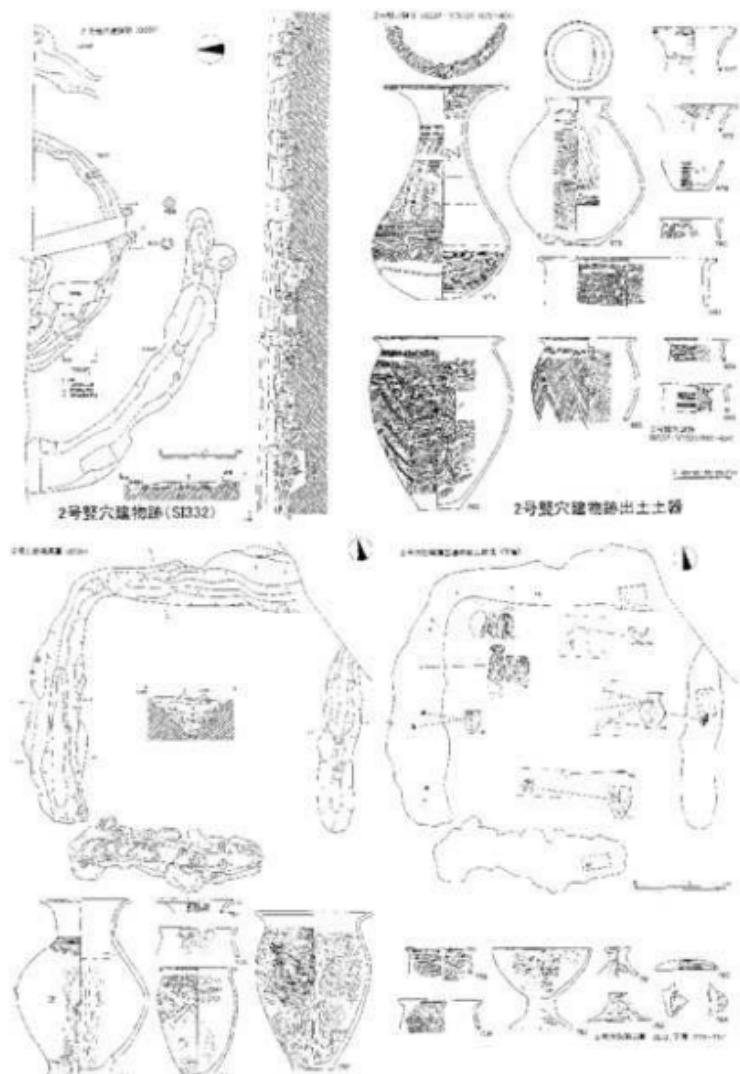
すみません、モノクロの図面で申し訳ないのですが、第6図左上に竪穴建物の図面を載せてあります。竪穴を掘って、柱を立てて住居にしたものですが、その周りを溝で囲っております。これは吹上遺跡のものになります。

下の図は方形周溝墓の図面ですね。建物とお墓は、だいたい時期的に似通つたものになります。

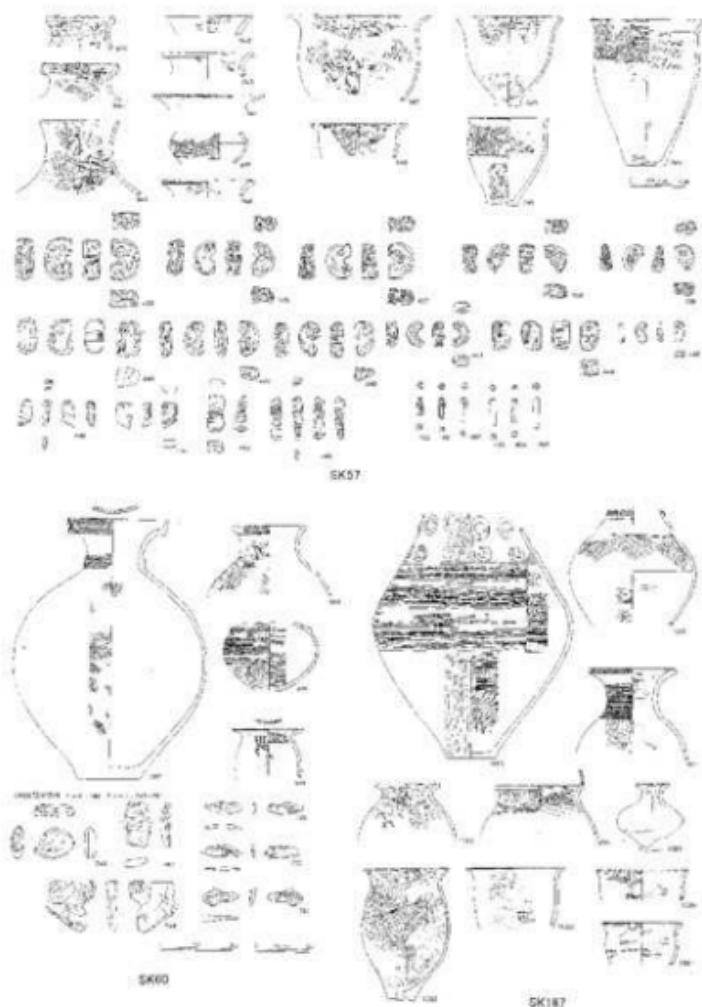
先ほど集落でお祭りをしたような地点があるというお話をしたのですが、第7図に載せたものは、そこから出た遺物になります。上の図に注目していただきたいのですが、これはヒスイの勾玉と、滑石でつくった勾玉の完成品になります。ほかにつくりかけの資料もあるのですが、完成品が全部で10



第5図 下谷地遺跡の玉作り工房と墓域
(新潟県教育委員会 1979)



第6図 吹上遺跡 2号竪穴建物と 2号方形周溝墓（上越市教育委員会 2006）



第7図 吹上遺跡特殊土坑出土遺物（上越市教育委員会 2006）

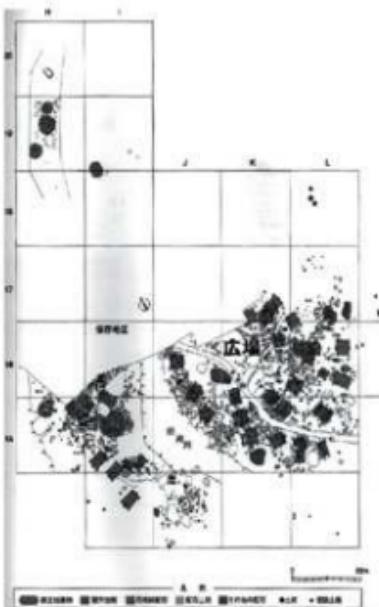
点出しております。細長いものは緑色の石を使った管玉ですが、6点完成品で出ています。これは吹上遺跡の中でも非常につくりがいいもので、ひとつの土坑から玉の完成品がまとまって出ています。

下の図の左の壺は、高さが70センチか80センチぐらいあるような大きな壺です。こうした壺が土坑の一番底にボンと置かれていたようにでていて、これに小さな石の破片が伴っていました。このように大きな壺に石の破片が伴う例というのは、吹上遺跡ができる前の弥生時代の中期の初めころの再葬墓という、壺を棺にして埋葬するお墓に多く見られます。東日本のはうにたくさんあります。骨とか、そういうものは出でていなのですが、特徴が似ていて、もしかしたら前の時代の習俗をまだ引きずっていて、こういう土坑がつくられたのではないかとも考えております。下図の右の壺も似たように大きなものですが、これは首の部分をどうも取り外したみたいですが、こうした大きな壺を一番底に入れて、ミニチュアの壺と一緒に納めたような土坑も出ています。このような土坑が先ほど言いました、建物がつくられない部分にたくさんつくられています。第4図右上にヒスイの玉がたくさん出た穴というものが遺跡の中央辺りに集中してあります(祭祀土坑群)。さらにその近くの土坑から銅鐸形土製品というお祭りの道具が出ています。お祭りをするところと、その周りに玉作りをするような建物があるのですが、これはどういう遺跡と似ているかと言いますと、縄文時代の遺跡によく見られるムラのかたちなのです(第8図)。籠峰遺跡と言いまして、上越市と長野県の境目ぐらいにある遺跡です。籠峰遺跡は、広場(空間地帯)を設けて、その周りを囲むように建物をつくっていくのですが、こういうムラの構造とかなり似通ったところがあるのではないかと。第9図は、吹上遺跡のムラのかたち模式的にしたものですが、真ん中に広場があって、先ほどのお祭りに関係するようなものなどを入れたりする土坑があります。一部にはお墓もあります。その周りに住居とか玉作りの建物とか一部に墓などがあつて、さらにその周りに住居とか玉作りの建物とか墓があると。今のところの調査では、広場の周りに玉作りをする建物が多くて、その脇にたぶん玉作りをやらない住居が多いのかなと思っています。吹上遺跡では、米づくりをおこなった道

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

具も出ていますし、それから銅鐸形土製品とか西のほうの文化も受け入れていて、集落そのものが米づくりをおこなう集落に変わっているムラでありながら、米づくりをおこなう前のムラのかたちをどうもある程度引きずっているというか、引き継いでいるような状況が見られます。図に示したものは、あくまでも模式的なものなので、実際本当に、こんなふうにきっちりなるかどうかというのは、まだ調査が必要なのですが、少なくとも福井とか石川のほうとは違ったムラのかたちというのが、どうも新潟県はありそうだと。そんなふうに今、考えているところです。

次に写真を見ていきます。写真2で、玉をつくる建物が非常に密集してつくられている状況が分かるかと思います。写真3は、玉作りをした建物で、1辺4メートルぐらいの竪穴の建物になります。真ん中に穴があるのですが、これが炉穴で、この中から非常にたくさんの中の製作途中のものが出ています。この炉の脇では大きな砥石がたくさん出ています。おそらく玉を磨いたりしていたのだと思います。小さな穴が柱を建てた穴になるかと考えています。写真4は、調査風景です。長さ1センチぐらい



第8図 龍峰遺跡全体図
(中郷村教育委員会 1996)



第9図 吹上遺跡模式図 (渡澤 2008)

報告2 新潟県における弥生時代の拠点集落の変遷

の細かい資料なので、こうして残して竹串を立てながら調査していきます。あとで土をふるいにかけて細かい資料を探さないといけないので、遺構の土は、土のう袋に全部入れておきます。最終的に1万5000袋ぐらい洗いました。

写真5が、吹上遺跡から出た玉作りの資料です。管玉をつくるときの資料になります。左は砥石です。奥のものは原石で、これを割って細長くして完成品にしていきます。奥から手前の資料の順に完成品に仕上げていきます。写真6は、ヒスイの勾玉をつくったときの資料になります。右が砥石です。奥が原石で、手前が勾玉の完成品になります。大きさが1センチ前後と非常に小さな勾玉になります。これは全部ヒスイです。吹上遺跡の玉作りの特徴は、ヒスイの勾玉をたくさんつくっていることで、ヒスイが全部で9キロ以上出ています。弥生時代のヒスイの出土量とすれば、全国でもたぶん一番多いぐらい出ております。なぜたくさんヒスイが使われたかと言うと、ヒスイの原



写真2 玉作り工房群（上越市教育委員会提供）

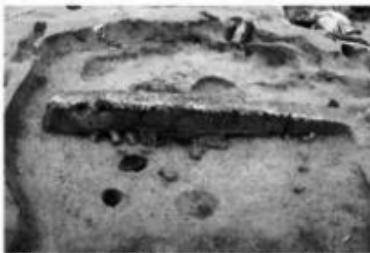


写真3 1号玉作り工房（上越市教育委員会提供）



写真4 調査風景
(上越市教育委員会提供)



写真5 工房出土管玉資料
(上越市教育委員会提供・小川忠博撮影)

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

産地の糸魚川から比較的近い。近いといっても 50 キロぐらいはあるのですが、そういう地理的な条件から糸魚川から原石を持ってきて、それでヒスイをたくさんつくったのだろうと、そのように考えています。

写真 7 が完成品の類のものです。写真の上のほうに映っている勾玉が、先ほどの土坑という穴から一緒に出たものです。ほかにこういう緑色の管玉とかがあって、赤い色をしたのが佐渡の赤玉石と言われている鉄石英という石で作った管玉です。写真 8 は、半分遊びで撮った写真ですが、吹上遺跡から出土した土器とか石器、銅鐸形土製品という特殊なものや石斧、石包丁などをまとめて撮ったものです。

土器が非常にたくさんあります。あとで話に出る八日市地方ほどの集落の大きさはないのですが、それでもこういう土器の量からすると、相当な人が住んでいたことが想像できるという状況です。先ほど土器のほうで、吹上遺跡というのは信州方面との交流がおこなわれていたというお話をしたのですが、どうも玉を見ても信州のほうとの関係が深いようなことが分かりつつあります。

吹上遺跡はヒスイの勾玉とか緑色の石を使った管玉をたくさんつくっていた遺跡ですが第 10 図に示したように、信州のほうを見てみると吹上遺跡と同じような時期と、それに続く時期に非常に玉をたくさん出す遺跡があるのです。吹上遺跡から 40 キロぐらいたところにある飯山市的小泉遺跡という遺跡があるのですが、ここでは管玉が 182 点出ています。これはほとんど緑色のもので、1 点だけ赤い管玉があります。吹上遺跡も赤い色をした管玉はほとんどつくって



写真 6 ヒスイ勾玉製作資料
(上越市教育委員会提供・小川忠博撮影)

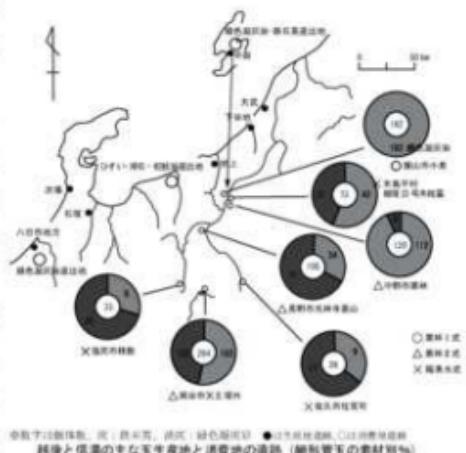


写真 7 いろいろな玉
(上越市教育委員会提供・小川忠博撮影)

いなくて、緑色の管玉ばかりつくっていますので、そういう組み合わせも非常によく似ている遺跡です。時期もだいたい同じですし、管玉の大きさも非常に似通っていますので、吹上でつくった管玉がもし運ばれていたら、この遺跡が一つの有力な候補になってくるだろうと考えているものです。実際この小泉遺跡というところからは、小松式土器も数は少ないのですが出ておりますので、おそらく吹上遺跡と何らかの交流があった遺跡だろうととらえております。円グラフの濃色で示したところが赤い色をした玉で、淡色で示した部分が緑色をした玉ということになります。○と△が弥生時代の中期で、×が後期の遺跡のものです。比率で見てみると、弥生時代の後期になればなるほど、赤い色をした玉の比率が増えてきます。これはどういうことかと言うと、吹上遺跡では先ほど話しましたように遺跡がつくられたときは、玉作りを盛んにおなっていたのですが、弥生時代の中期の終わりぐらいに



写真8 吹上遺跡から出土した数々の品物
(上越市教育委員会提供・小川忠博撮影)



第10図 信州の玉の流通状況
(上越市史編纂委員会 2005 を再トレース)

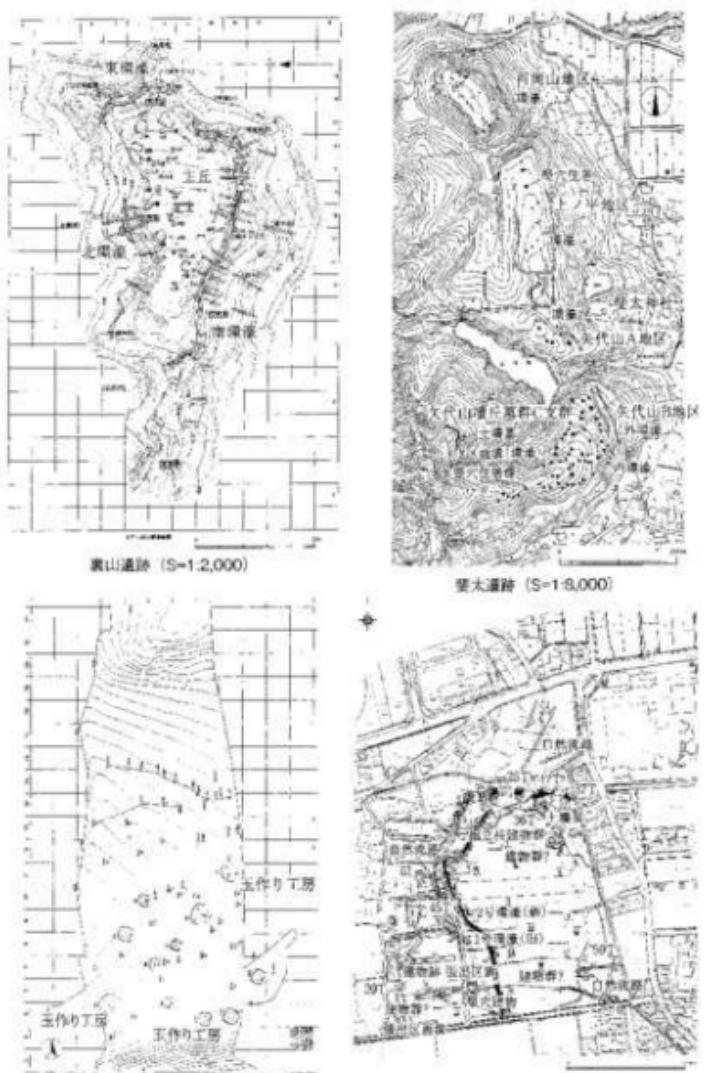
八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

なると玉をつくらなくなります。そのとき、どこでつくっていたかというと、佐渡で大量に赤と緑色の管玉をつくっています。先ほど言った下谷地遺跡も、集落ができた最初のころは玉をつくるのですが、そのあとはつくらなくなります。そういうことからすると、吹上遺跡ができたぐらいのときは越後側でも結構玉をつくっているのですが、それからだんだんつくらなくなつて、玉の原石の産地を持っている佐渡のほうで管玉をたくさんつくるようになったのではないかと。それが遺跡の範囲が、42ヘクタールもあるような遺跡群が成立していくきっかけになったのではないかと考えています。それが長野とか、玉をつくらない地域に運ばれていったのだろうと、そんなふうに考えているところです。要するに新潟県の弥生時代中期という時代は、これから話に出ます八日市地方遺跡で生まれた小松式土器が、北のほうに北上していくなかで、玉作りもおそらく一緒にセットで伝わっていくのだろうと。それが富山県の幾つかの場所で定着していくなかで、吹上遺跡にも定着して、それからここでまた一つの核ができる、周辺と関わりを持ちながら吹上遺跡のように大きな遺跡が作られていくのだろうと考えています。吹上遺跡は今申しましたように、長野との関係が強そうなのですが、長野だけではなくて、東北のほうとの関係も見られるようなものがありますので、今度は石川のほうから伝わってきたものが新潟に根付いたときに、ここを核にしてさらに北のほうの下谷地とか、道下みちしたとか、そういう遺跡がつくられる一つの原動力になってきたのではないかと考えているところです。

4. 高地性集落の出現と上越地域南西部の卓越

中期以降、新潟県の弥生時代はどうなっていくかということですが、弥生時代後期という時代に入るのですが、後期の前半段階というのは、正直よく分からぬ状況です。分からぬというのは、遺跡そのものが見つかっていない状況ですね。ある程度状況が分かるのは、弥生時代後期の後半と言われている時代になります。先ほど斐太遺跡とか下馬場遺跡、釜蓋遺跡という名前が出てきたかと思うのですが、後期の後半になると、第11図に示したように、まず山のところに大きな集落が出てきます。これは縮尺がまちまちな

報告 2 新潟県における弥生時代の拠点集落の変遷



第11図 高田平野西麓の主な弥生後期から終末の集落（上越市教育委員会 2008 転載）

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

のですが、だいたい集落の大きさがこんな程度だと理解していただければいいかと思います。

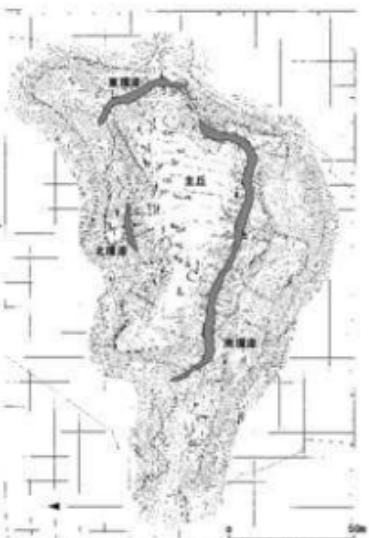
裏山遺跡というのは、直江津の海岸の近くにあって、標高 90 メートルぐらいの小さな丘の上にある集落です。一般的な集落と異なった性格を持っている集落で、高地性環濠集落と言われている遺跡になります。斐太遺跡というのは、吹上遺跡から 1.5 キロぐらい離れたところの丘陵の上にある集落で、環濠で囲まれたブロックが四つに分かれている集落です。これは 8 ヘクタールぐらいの規模があり、弥生時代後期の高地性環濠集落では、東日本の中で突出した規模を持つ集落になります。

こういう集落がある一方、環濠を持たない小さな集落があって、一部で玉作りをおこなっておりまます。このときに吹上遺跡はどうだったかというと、遺跡の面積は一番広がり、7 ヘクタールぐらいまで広がるのですが、斐太遺跡のように環濠は持ちません。そういう状況からすると、中期の段階は吹上遺跡のほうに上越地域の中核的な機能があったみたいなのですが、もしかしたら、後期になつたら斐太遺跡のほうに移っている可能性があるのかなと考えています。斐太遺跡を中心に吹上遺跡があつたり、下馬場遺跡があつたり、裏山遺跡があつたりと。そんなことを考えています。ただこの斐太遺跡というのは、50 年ぐらいするとばつたりとなくなってしまいます。なくなつたあとどうなるかというと、釜蓋遺跡という遺跡が出てきます。これも環濠集落で、図のように遺跡の東側に川が流れています。



写真9 斐太歴史の里 航空写真
(妙高市教育委員会提供)

この川に沿って環濠を巡らせているのですが、全部で3本の環濠が見つかっています。2本の環濠は時期が別で、1号環濠が最初に掘られた環濠、2号環濠が次に掘られた環濠になり、実際は一重の環濠に囲まれた集落ということになります。その面積がだいたい今3ヘクタール以上ということが分かっていて、南側のほうにまだ伸びるので、最終的には4ヘクタールぐらいになるかなという、新潟県の中では非常に大きなムラになります。この集落の面白いところは、この環濠に接続するように溝で囲まれた張り出し部分があるということです。ここは四角いようなかたちをしていて、どうも環濠内と機能が違っていた可能性があります。この遺跡は、まだ本格的に全部調査をしたわけではなくて、確認調査と言いまして、遺跡がどのようにになっているかを、試掘坑を入れながら調査をしている段階です。環濠で囲まれた部分と、張り出し区画の中がどういう関係になるかというのは、まだ今後の調査を待たなければいけない状況なのですが、非常に興味深いムラのかたちをしています。写真9は、斐太遺跡を空中写真で撮ったところです。見てお分



第12図 裏山遺跡全体図
(新潟県教育委員会 2000)



第13図 裏山遺跡出土の鉄製品と玉製品
(新潟県教育委員会 2000)

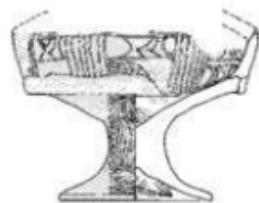
八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

かりになりますように、森に囲まれた丘陵上に、環濠で囲まれたムラができるということがあります。第11図の図面と比べると、四つの環濠で囲まれた地区の位置がどこに当るかがわかるかと思います。その斐太遺跡の環濠というのは、そんなに大きな環濠ではないのですが、幅2メートルから3メートルぐらいで、深さがだいたい1メートル前後のV字形と言っていますが、底を狭くした溝をつくっています。一般には、こういう環濠は防御的機能を持つと言われています。裏山遺跡は、上が高田平野、写真の左が日本海になります。写真を見てお分かりになるとおり、非常に小高い丘にムラがつくられているということになります。第13図は、裏山遺跡から出た鉄の斧と玉やヒスイの原石などで、ここでも玉をつくっていた状況が見受けられます。

第14図は、釜蓋遺跡から出た北陸地方によく見られる台の付く壺です。胴体の部分しか残っていないのですが、ここに変わった文様が入っていて、組帶文とか直弧文とか言われている、瀬戸内のほうに起源があるのではないかと言われている文様です。ただ東海地方にも、こういう文様がありますので、おそらく、そちらから伝わってきたのかなと考えているものです。

写真10が釜蓋遺跡の全体を写したもので、環濠があって、写真左に張り出しの区画があってという集落になります。写真写っている建物の大きさで、だいたい遺跡の大きさが分かるかと思います。

以上でスライドを終わります。



第14図 直弧紋土器
(上越市教育委員会 2008)



写真10 釜蓋遺跡 全景（南から）
(上越市教育委員会提供)

5. 結び

少し駆け足で、上越地域を中心に新潟県の集落の様相を見てきたのですが、おそらく日本海伝いに西のほうから稻作文化が伝わってきたことは確実だろうと思います。それが吹上遺跡辺りで定着をして、そこからさらに北のほうにまた広がっていったと、そういう流れが考えられるのではないかと思っております。ただ新潟の特徴として、周辺地域との交流が縄文時代から盛んにおこなわれていたので、そういう影響も受けながら弥生時代のムラがつくられ、その結果として、石川より西とは違ったムラの構造ができあがったのではないか。そのようなことを、今考えてみたいと思っています。

それはある意味、縄文時代以来の生活様式みたいなものが強く受け継がれている可能性が高いと思うのです。それは決して文化的に遅れていたからというわけではなくて、地域によって、また、そこに住む人の意識によって、新たに伝わってきたものが、当初のものとは変わっていくことを示す一つの例になるのではないかと考えているところです。

これから下濱さんの八日市地方遺跡の発表がありまして、その後また座談会になるかと思うのですが、そういうなかで東の目から八日市地方を見まると、やはり集落の大きさもかたちも新潟の遺跡とはかなり違うなというのが正直な印象です。新潟の例は、地域の実情によって、同じ稻作文化であってもすべてがかならずしもおなじものとはならないということを示しているものと考えられます。

すみません。最後まとまらなかったのですが、以上でわたしの発表を終わらせさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

報告 3

石川県における弥生時代の拠点集落について

下濱 貴子

1. はじめに

こんにちは。下濱と申します。今日はよろしくお願ひいたします。
いつもわたしが話をしますと、八日市地方遺跡エチカイチジカタというふうに思い浮かばれる方も多いかと思いますが、話の主体はもちろん八日市地方遺跡ですけれども、どうして石川県の中で拠点と言われる八日市地方が存在するのか。その背景というものを少し整理して、皆さんと再度、八日市地方を考えていきたいと思います。

2. 検討方法

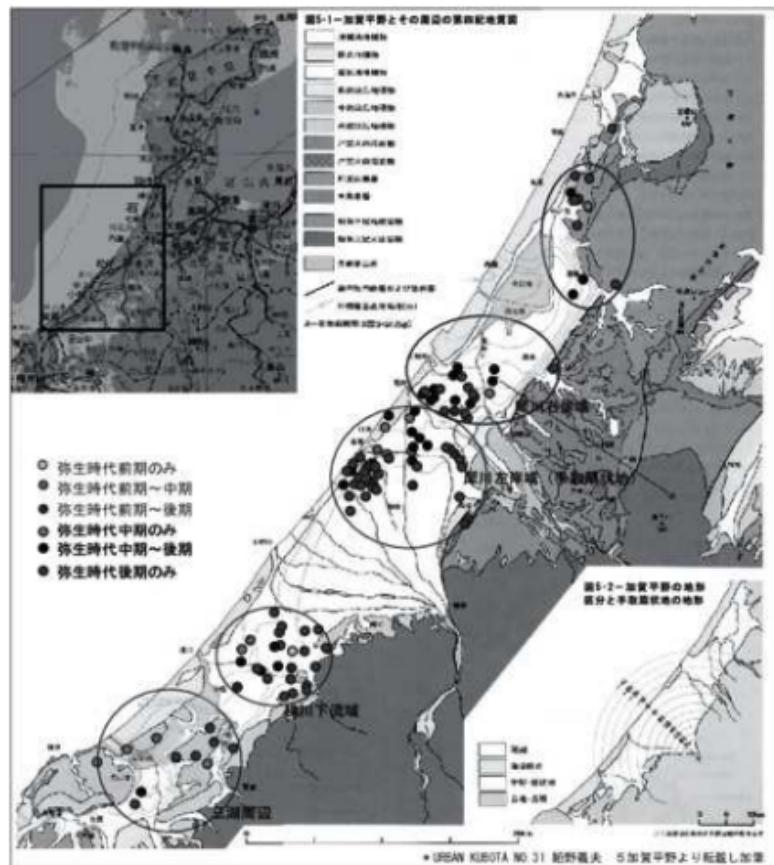
石川県というのは、旧国でいうと能登と加賀の二国で構成されています。さらに北陸地域は、北陸北西部、北陸北東部と分けられ、北陸北西部と言いますのは先ほど報告がありました赤澤さんの越前と加賀にあたり、北陸北東部と言いますのは能登、越中、越後、佐渡にあたります。なので、石川県は、両方の地域区分をもつ地域にあたります。

八日市地方遺跡はどちらに位置するかと言いますと、北陸北西部、加賀にあたります。そこで、加賀と能登では、様相が異なりそうなので、加賀地域の中で弥生時代の拠点集落と言われる遺跡がどのように展開していくのかということを、地形に即して話していきたいと思います。

わたしの話のなかで、でてきます時期区分ですが、まず弥生時代前期、弥生時代中期、弥生時代後期と大きく三区分していきたいと思います。途中、八日市地方遺跡を説明する際に、中期をもう少し細分し、中期前葉、中期中葉、中期後葉という言葉が出てくるかと思います。発表資料は、一部、資料に付いておりますが、基本的にはスライドのほうを見てください。どう

報告3 石川県における弥生時代の拠点集落について
しても見にくいやうでしたら、この図は何ページにあるという形でお話したいと思っております。

第1図は、加賀地域における弥生時代の遺跡の分布です。能登半島がある四角の部分を大きくした図が、右図になります。加賀地域を大きく遺跡の分布に分けますと、このエリアの中で見られるのは、南加賀の地域では梯川



第1図 石川県加賀地域における弥生時代遺跡の分布

八日市地方遺跡記念フォーラム

流域にある集中部分と南側にある三湖周辺と、大きく二箇所に分かれます。次に、手取川を挟む北側に説明をうっていきます。北側の地域では、犀川左岸側、手取川扇状地に展開します遺跡群と、もう一つは犀川右岸側にあたる大野川を介した遺跡群と大きく二つあります。あともう一つは、今では埋めてしまった渦があるのですが、その渦の裏側にあたる今の津幡町と金沢の上のほうにあたるところに遺跡の集中分布を見ることができます。

今回は、犀川右岸域と左岸域、梯川地域と三湖周辺、この四つの様相をおまかに見ていきたいと思います。両先生の話でもありましたこの地域の時期ごとの変遷を、地域ごとに話していきたいと思います。

3. 地域ごとの比較

(1) 南加賀 梯川流域

縄文時代から弥生時代前期の始まる段階というのは、加賀地域の中では湧水点という、水が湧いてくるようなところに集落が展開していたと考えられております。それが河川の水系ごとに展開してくるのは、弥生時代中期以降になります。

梯川流域には、屈曲した山麓に囲まれた閉鎖的な渦が埋積された小松平野がみられ、集落は梯川、八丁川、鍋谷川と、こういう水系ごとに時期を通じて遺跡は展開しています。梯川下流に展開する遺跡は、梯川という川が渦を介した水運に適していることから、水上交通の結節点であり、交通の要衝と言われる位置になります。弥生時代前期からみていきますと、遺跡は数えるほどしかありません。現在見つかっているものは、ほとんど長期継続的な遺跡ではなく短期的なものであります。八日市地方遺跡からも、展示を見られた方は知っておいでになるかもしれません、前期段階は在地の条痕文土器だけではなく遠賀川式土器も出土しているのですが、ただこれは土器の出土のみで、さほど大きな遺跡が展開するような時期ではなかったようです。中期に入りますと、前時期同様に遺跡の数は少なく、八日市地方遺跡だけが大規模で長期継続である遺跡に該当します。

そのほかの遺跡としては大長野A遺跡や、一針B遺跡で中期の遺跡がみえ

報告3 石川県における弥生時代の拠点集落について

とのですが、これらは中期から後期へと続く遺跡であります。八日市地方遺跡の集落が終わるところから展開してくる遺跡にあたります。この梯川流域で遺跡が大規模に展開してくるのは、弥生時代後期になります。後期になりますと、梯川、八丁川や鍋谷川など、この黒い点で書いてあるものの大半は



第2図 南加賀地域における弥生時代遺跡の分布

群	No.	遺跡名	I						群	No.	遺跡名	I					
			I	II	III	IV	V	VI				I	II	III	IV	V	VI
梯 川 流 域	1	八日市地方	—	—	—	—	—	—	梯 川 流 域	15	鐵堀	—	—	—	—	—	—
	2	梯川鉄堀	—	—	—	—	—	—		16	松型	—	—	—	—	—	—
	3	中庄梯川	—	—	—	—	—	—		17	高堂	—	—	—	—	—	—
	4	白江梯川	—	—	—	—	—	—		18	中庄	—	—	—	—	—	—
	5	添町(野)	—	—	—	—	—	—		19	八里向山	—	—	—	—	—	—
	6	佐々木アサバタケ	—	—	—	—	—	—		20	河田山	—	—	—	—	—	—
	7	古竹	—	—	—	—	—	—		21	佐佐木林南	—	—	—	—	—	—
	8	八幡	—	—	—	—	—	—		22	輪見町西	—	—	—	—	—	—
	9	千代オオキダ	—	—	—	—	—	—		23	柴山出村	—	—	—	—	—	—
	10	一戸B-C	—	—	—	—	—	—		24	新切川	—	—	—	—	—	—
	11	五長野A	—	—	—	—	—	—		25	堀堀	—	—	—	—	—	—
	12	千代テシロA	—	—	—	—	—	—		26	弓波	—	—	—	—	—	—
	13	牛島ウハシ	—	—	—	—	—	—		27	島	—	—	—	—	—	—
	14	和田山下	—	—	—	—	—	—		28	南津スワシヤブ下	—	—	—	—	—	—

八日市地方遺跡記念フォーラム

弥生時代後期に該当してくる遺跡になります。

八日市地方遺跡は、この「1」という位置になるのですが、それから基本的には梯川のもう少し上流に上がったところに遺跡が多く展開してくるということと、あとは弥生時代後期の後半になりますと、この色が少し変わった、丘陵の上にも遺跡が見られるという特徴があります。このままこの図を使いまして、次に南加賀のもう一つの地域にあたる三湖周辺の話もしたいと思います。

(2) 南加賀 三湖周辺

三湖周辺と言いますのは、ここが今江潟、柴山潟、木場潟と言いまして、ここに三湖台という月津台地があります。詳細には、月津台地と柴山潟から流れる八日市川は別地域になりますが、今回は大きくここを一つのグループとして話をしたいと思います。三湖周辺は、第2図のように、遺跡が点在する地域でして、小松平野とは橋立台地と月津台地で、基本的に隔てられていて、遺跡の分布というのは分かれていると思われます。

梯川流域というのは、すぐ海に出る場所があるので、三湖周辺というのは、どこから日本海に出るかと言いますと、この柴山潟から今江潟に上がって梯川に上がらなければなりません。梯川流域に比べると、少し中に入ったような状況になります。この地域で見られる弥生時代前期は、石川県の弥生時代前期の代表的な遺跡である柴山出村遺跡があるのですが、ただ土器はでているのですが、遺構等詳細は不明です。南加賀地域では弥生時代前期と言いますのは、遠賀川式土器が出たとしてもまだ波及段階で、定着はしていないようです。

次に弥生時代中期ですが、遺跡の数は梯川周辺に比べて少ないです。中期から後期へ続く遺跡としてあげられるのは、こちらの「25」の猫橋遺跡というところで、「27」というのは島遺跡です。これも中期の遺跡ですが、土器がほんのわずかでているだけで、それほど大きな遺跡ではないようです。このような状況なので、八日市地方遺跡のような遺跡はでておりません。

弥生時代後期になりますと、この八日市川の周辺に遺跡が展開し、中期か

報告3 石川県における弥生時代の拠点集落について

ら続く猫橋遺跡と、もう少し下にあります弓波遺跡や、後期後半になりますと、梯川流域で丘陵に上がるといった遺跡と同じように、月津台地上でも遺跡の展開が見えるようになります。それは額見町西遺跡とか、念仏林南遺跡などがあげられます。

(3) 北加賀 犀川右岸地域

北加賀地域ですが、先ほどの南加賀地域のような大きな図面は準備しておりませんので、広域な第1図を使って話をしていきたいと思います。大野川から犀川に挟まれた犀川右岸域は、平野と山地からなっており、平野は犀川と浅野川、金腐川といった中小河川の土砂排水によって形成された沖積平野、河北平野に位置しております。河北平野は、沿岸に長大な内灘砂丘が発達し、その内側には北陸最大の汽水湖である河北潟が見られます。

かつては、この平野にも海が侵入し、ほぼ全域が湾域であったと思われるところです。また、この大野川というのは先ほど話しました梯川と同じように、木場潟や今江潟と同じように、河北潟から日本海へ通じるという交通の要衝にあたる場所になります。このエリアの様相を時期ごとに見ていくと、まず弥生時代前期というのは、河川跡などから弥生時代前期の土器が出るのですが、詳細は不明であります。

この時期の土器は、弥生時代後期以降の生活面と同様、または下層から出土しているのですが、先ほどの南加賀地域と同様、土器は出るのですが、遺構はよくわかりません。弥生時代中期に入りますと、大野川でも結構先のほうにあたるところに戸水C遺跡がみられます。弥生時代中期前葉の平地式建物跡がでていますが、建物数は少なく、土器も少量で、中期中葉、中期後葉と続くような遺跡ではありません。中期中葉になると、金沢市の寺中遺跡や無量寺遺跡などが展開し始めます。ただこれらも、同水系のエリアを転々動きながら存在する遺跡であり、八日市地方のように同じ場所で継続するような遺跡ではありません。逆に中期後葉になりますと、磯部運動公園遺跡、千田遺跡とか、西日本色の強い戸水B遺跡が出現し、中期から後期へと続く大型の遺跡へと発展していく西念・南新保のような遺跡も出てくるような地域

八日市地方遺跡記念フォーラム

にあたります。そして後期後半になりますと、南加賀地域と同様に、山麓部に遺跡が点在し始めます。

(4) 北加賀 犀川左岸域（手取扇状地）

簡単に話をしたいと思います。こちらは北西を日本海、北東を犀川と伏見川、東を富樫山地、南を手取川に画された箇所に該当します。手取扇状地というの、標高 80 メートルの鶴来町付近を扇頂として角度 120 度で、北西へと広がっております。この扇状地というのは松任、金沢の沖積低地には扇頂から河川が幾筋にも伸びているのが分かると思うのですが、そのあいだに島状の微高地が形成されていたと考えられております。

遺跡はその扇状地の中でも海に近い、10 メートル前後に集中しております。弥生時代前期には、ほとんどの水系で土器の出土が見られるのですが、ただ少数で小規模であります。今までお話しましたほかの三地域と同じような様相です。そのなかでも安原川水系では、乾遺跡や倉部川水系で八田中遺跡など土器が多く見られる遺跡があります。しかしことも、そのあと弥生中期にずっと継続的に続くような集落ではなく短期間の集落であります。弥生時代中期では、安原川水系で矢木ジワリ遺跡という中期前葉にあたる遺跡と、海岸部には下安原海岸遺跡がみえます。下安原海岸遺跡は、唯一砂丘の上にある遺跡になります。野本川水系には野本遺跡。倉部川水系に先ほど話しました八田中遺跡の近くに八田中ヒエモンド遺跡が見られます。前時期に比べますと建物跡などが見られるようになり、集落は大きく展開はしてくるのですが、八日市地方遺跡のように中期の前葉から継続的に大規模になる集落は見当たりません。中期後葉になりますと、安原川水系では上安原遺跡や横江莊遺跡、専光寺養魚場遺跡、上荒屋遺跡などかなり複数遺跡が展開します。弥生時代後期に入りますと、この倉部川水系から遺跡の増加が見られて、複数増えてきます。それとともに傾向としては、中期後葉の時期に比べて、南加賀地域同様、水系の上流側へと遺跡は展開してくるようです。

以上、加賀地域の遺跡の動態を四地域に分けて簡単にしました。少しまとめてもう一度整理しますと、弥生時代前期と言いますのは、四つのエリ

報告3 石川県における弥生時代の拠点集落について

アすべてで遺跡は存在し弥生時代の文化の波及は見えるのですが、まだ定着していないような状況だと思われます。弥生時代の文化の定着が見えるのは、どの場所においても弥生時代中期のようです。そのなかでも、どこがいち早くできているかと言いますと、継続性の高い八日市地方遺跡が点在する梯川流域になるのではないかと思います。八日市地方遺跡が終焉を迎えていく弥生時代中期後半になりますと、遺跡は、川の上流へ移動し、それとともに、北加賀地域では遺跡の数が増えてくるような状況がみられます。弥生時代後期に入りますと、遺跡数はもっと増えます。川の水系ごとに群をなすように見えてくることと、後期後半になりますと、今までには見えなかった低地以外の丘陵上にも、遺跡が展開してくるようです。

換言すると、加賀地域の中で交通の要衝といえる場所は、河北潟を背景にして大野川へ流れる日本海と潟の資源を持つ地域である犀川右岸域と、梯川と三湖台を背景に持つ梯川流域の二箇所があげられ、犀川左岸域（手取川扇状地）というのは、遺跡が広範に広がる生産力は強いところにあたるのですが、広域な交通・交渉をするという場所では、少し不向きなところにあたるかと思われます。

4. 石川県内の拠点集落について

次に石川県内の拠点集落について考えていきたいと思います。わたしが拠点集落と言える、拠点となる理由を項目として五つ挙げました。

(1) 拠点となる理由：地理的好条件に位置し、交通の要衝である

加賀地域では、先ほど話しました犀川右岸域と、梯川流域が該当しやすい位置になります。能登半島では邑知潟という潟があります羽咋市と、石川県の中では三か所が該当する場所になると思われます。これらの場所は水運だけではなくて、地域の情報伝達の場といえます。邑知潟に位置する羽咋市は、富山への玄関口としてはすごく有力な位置にあげられます。逆に南に位置する東海地方との情報伝達の場として有利な場所はどこかとあげますと、私としてはこの犀川右岸域よりは梯川流域ではないかと考えております。た

八日市地方遺跡記念フォーラム

だし、犀川右岸域の位置というのは弥生時代後期以降、加賀地域の中で一番広範に展開する平野があるなど、遺跡の展開が大きく広がれる場所なのですが、中期段階では弱いのが、時代背景に応じた拠点の位置が地理的な状態のなかで選択されているのではないかと思われます。そうしますと、弥生時代中期の段階では広域な交通要衝の意味を示す場所としては、東の玄関口にもあたる邑知潟を介する羽咋市の吉崎・次場遺跡と、東海と水運という意味で広域な位置を示す小松市の八日市地方遺跡の二点が地域的な条件で該当するのではないかと思われます。梯川流域に位置する八日市地方遺跡が、東海との関係が加賀地域のなかでもっともとりやすい状況を、図面で確認していただきたいと思います。第3図は、今日も会場においてくださっています愛知県の永井さんが作成した図を日本地図に合わせて、もう一回わたしのほう



第3図 条痕文土器（沈線文系土器）からみた分布・情報ネットワーク図

報告3 石川県における弥生時代の拠点集落について

で色塗りをさせていただいた図面です。これは永井さんが沈線文系土器といふ、北陸では鍋として使う土器のネットワークを示す図であります。わたしはこの沈線文系土器だけではなくて、先ほどから赤澤さんや笹澤さんから話がでております、縄文時代の伝統をそのまま受け継いだような様相の中でつくられる条痕文系土器も含め、文化交流の意味でも使えるような図式と思い、利用させていただきました。朝日遺跡などの太平洋側と交流をするためには、もちろん福井のほうが近くて、西濃ルートがあげられると思いますが、加賀地域で考えていきますと、北加賀（犀川右岸域）よりは、この北の美濃の辺りを通って勝山から大野へ抜けて小松へ来る北濃ルートが考えられ、小松の方が太平洋側の情報が伝わりやすいと思われます。こういったわけで、北加賀というよりは南加賀は、海だけではなくて内陸の条痕文系土器にみられる縄文時代から続くネットワークも、強い地域にあたるのではないかと考えました。羽咋の邑知潟は、日本海に面し、富山へと抜けるよ



第4図 南能登 邑知潟における弥生時代遺跡の分布

群	No.	遺跡名	遺跡名					
			I	II	III	IV	V	VI
子 浦 川	1	勝山・支那						
	2	本田ニシカワダ				-		
	3	二口かみあらた			-			
	4	利野原らくはわり						
	5	坂市				-		
	21	東的埴多ケノハナ						
舞 文 台	6	東生シモテ						
	7	新屋				-		
	8	寺家						
	9	細田うわの						
	10	佐須須田						
	11	浅谷八幡社						
邑 知 潟	12	谷内ブンガヤチ						
	13	妙谷チャバタケ						-
	14	猪丸						
	15	西柳白山下						
	16	曾根C						
	17	勝井サンジョガリ						
	18	小田田中おはたけ						
	19	久江ツカノコシ						
	20	猿前C						

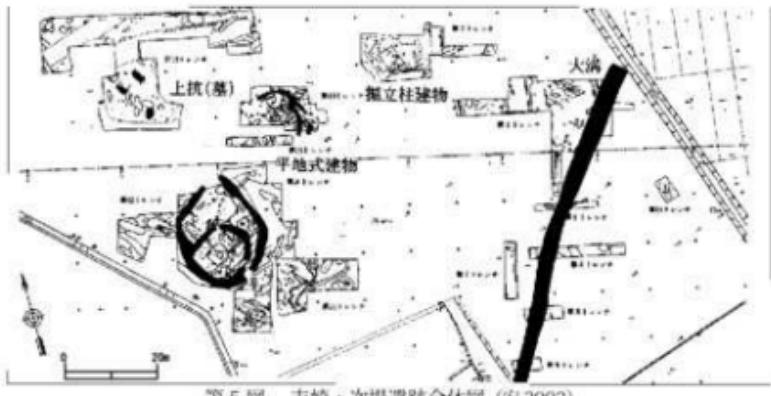
八日市地方遺跡記念フォーラム

うなかたちになるところです。拠点集落と言われる吉崎・次場遺跡は、この「1」に当たります。

邑知潟周辺の遺跡の状況は、加賀地域と類似しています。第4図をみてください。弥生時代前期は、前期の終わりごろの土器が吉崎・次場遺跡でみえます。やはり土器はでるのですが、集落としてのかたちはよく分からないような状況です。やはり遺跡が大きく展開するのは、中期に入ってからになります。八日市地方遺跡と、この吉崎・次場遺跡の時期の違いというのは、吉崎・次場遺跡の主体は中期の前葉、中葉で、中期の後葉は抜けるようななかたちになりまして、後期でも大きく広がっていく遺跡になります。

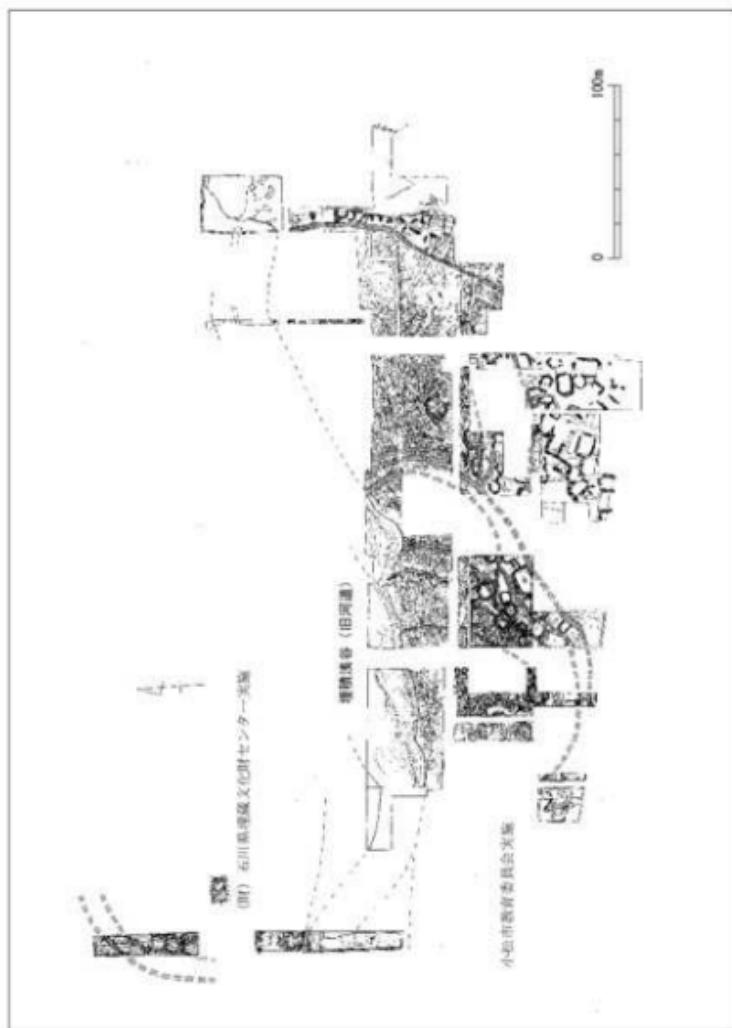
では弥生時代中期後葉の抜ける時期がそのままに残っていますと、ここの「21」というところに東的場遺跡というのがあるのですが、この遺跡が吉崎・次場遺跡を補完するようななかたちで中期後葉に営まれております。こちらの少し高いところに位置してくるところは、中期の後葉から後期に展開してくる遺跡であります。

八日市地方遺跡と吉崎・次場遺跡の大きく違いますのは、発掘調査の面積があげられますが、検出した弥生時代中期の遺構密度が吉崎・次場遺跡と八日市地方遺跡ではかなり違います。八日市地方遺跡の密集度は、あまりにも吉崎・次場遺跡に比べると多いということが言えます。



第5図 吉崎・次場遺跡全体図 (安2002)

報告3 石川県における弥生時代の拠点集落について



第6図 八日市遺跡全体図（小松市教育委員会2003）

八日市地方遺跡記念フォーラム

こちらの吉崎・次場遺跡のなかでは、ここに大溝という区画される溝がありまして、中に掘立柱建物という倉庫群、平地式建物がみえ、居住域にあたります。居住の場というものとお墓という方形周溝墓が、現段階では見つかっておりません。お墓は、この土坑という素掘りの穴の中に埋められるようなものが見つかっております。

(2) 拠点となる理由：集落内で物資の生産をおこない、且つ地域の主導的立場に立っている

石川県内における物資の生産ですが、何がおこなわれているかと言いますと、玉生産、木器生産、石器生産と、大きくこの三つが挙げられます。金属器は、先ほど赤澤さんの発表にもあったようなものは、弥生時代中期の段階ではおこなっていないと思われます。弥生時代後期になると、加賀地域の梯川流域でも、一針遺跡で銅鑄の鋳型とか、南能登の吉崎・次場遺跡で銅鑄の鋳型がありますが、今回は基本的には八日市地方遺跡を考えるために、中期に限定した生産の話をしたいと思います。

まず玉生産ですが、弥生時代中期中葉には小松式土器が広がるとともに、碧玉製の管玉製作をする遺跡が加賀地域に見られるようになります。能登では碧玉製に加えて鉄石英、赤い玉をつくる遺跡も見られます。能登で赤い玉が見えるというのは、加賀地域と違って、富山以東との関係が深いことによって見られるものだと考えられます。碧玉製の管玉の生産がもっとも多く見られるのは、露頭の問題が関係してくるかと思うのですが、八日市地方遺跡は加賀地域と能登半島を踏まえ石川県全域で見ても、筆頭に多いということが言えます。ここでもう一つ注目できるものは、広域な流通でしか入手ができないヒスイです。先ほど笛澤先生のほうで話がありましたヒスイ製の勾玉生産です。碧玉製の管玉づくりというのは、弥生時代中期の遺跡では、ほとんどの遺跡でみられます。しかし、ヒスイ製の勾玉生産は、基本的には小松市の八日市地方遺跡と羽咋市の吉崎・次場遺跡の二遺跡しかおこなっておりません。先ほど管玉生産は八日市地方遺跡が筆頭に多いという話をしましたが、吉崎・次場遺跡は管玉生産よりもヒスイ製の勾玉生産が主体であった

報告3 石川県における弥生時代の拠点集落について

という可能性が高いと言われております。

次に木器生産を説明したいと思います。小松市の八日市地方遺跡では、弥生時代中期前葉から農耕具、加工具、容器、食事具、弓など豊富な種類の生産がおこなわれております。羽咋市の吉崎・次場遺跡では、くわ鐵の未製品が見られることから少なからず木器生産をおこなっていたと思われるのですが、八日市地方遺跡の生産の規模を越えるものではありません。

梯川流域では、八日市地方遺跡の廃絶後も能美市の大長野A遺跡や白江梯川遺跡など、木器生産が継続的に見える地域であります。中期後半以降になると、犀川右岸域でも戸水B遺跡、西念・南新保遺跡で木器生産が見られるようになります。まとめますと、弥生時代中期段階では、小エリアの核になるような遺跡では、農耕具や溝を掘削するような土木掘削具のようなものは加工しているけれども、精製品である容器とか食事具などの生産には至っていません。それをおこなっているのは八日市地方遺跡のみです。

次に石器生産ですけれども、石鐵などの石の道具は大方つくっていたと思われるのですが、一番見えやすいものとしては大型蛤刃石斧ふとがたはくばくという伐採具があげられます。石斧は羽咋市の吉崎・次場遺跡では、大規模におこなわれておりますし、小松市の八日市地方遺跡では、逆に、少なからずおこなっているというような状態になります。

(3) 石川県内いち早く弥生文化の導入をおこない、祭祀にかかわる道具などの豊富さから見る精神文化の高さ

該当する遺跡は、どこがあげられるかと言いますと、あとでお見せします八日市地方遺跡の祭祀具というのは本当に豊富で、鳥形木製品をはじめ、全国初の魚形木製品や人面付土器などを多種多様なものがあげられます。また分銅形土製品は、今年、発掘調査を実施している分を加えますと20点以上でております。あとは剣形木製品です。その種類の豊富さも、これらを合わせると石川県内という話ではなくて、北陸地域の中で最大という話になってくると思います。

弥生時代中期後葉になりますと、この八日市地方遺跡以外でも吉崎・次場

八日市地方遺跡記念フォーラム

遺跡や犀川左岸域（手取川扇状地）や三湖台周辺の猫橋遺跡など、少しずつ複数の集落でも祭祀貝は見えるようになりますが、多くの祭祀遺物が見えるというのは、現段階では八日市地方遺跡が筆頭的に突出しています。

もう一つ文化面で特徴的にあげられるものは、葬制です。お墓があげられると思います。西日本に多く展開してくる弥生文化圏では方形周溝墓という、先ほど赤澤先生の写真を見せていただきましたが、方形に溝で区画するお墓が見られます。ここに埋葬される人は低い墳丘上に土葬で木の棺や素掘りの穴に埋葬されます。この方形周溝墓を採用した葬制は、加賀地域の、これは能登も踏まえても、もっとも早い遺跡が八日市地方遺跡であります。先ほど笛澤先生から、新潟県では、お墓と居住域が隣接した形でつくられているという話がありましたが、八日市地方遺跡は逆に居住区の縁辺にお墓を展開するという、かなり計画的に配置したような状態が見られます。では八日市地方遺跡以外の石川県内の葬制とはどういうものかと言いますと、方形周溝墓は基本的に中期後葉になるまでは展開しておらず、木の棺である木棺墓や土坑墓が主体の葬制であったようです。

（4）継続性のある長期間続く集落であること

これは再度繰り返す話になります。弥生時代中期前葉から後葉にかけて継続する遺跡は、基本的には八日市地方遺跡ともう一つ吉崎・次場遺跡があげられるのですが、吉崎・次場遺跡自身は、先ほども話しましたように中期後葉で少し位置をずらしたところに展開してきます。少し八日市地方遺跡とは意味が変わってくるということと、逆に八日市地方遺跡は弥生時代後期という時期には、基本的には存在しておりません。吉崎・次場遺跡は後期に大きく展開してくる集落であります。

それ以外の加賀地域で見られる遺跡というのは、短期間で集落が移動しながら水系ごとに展開しているのですけれども、長期に継続する遺跡はない状態にあります。

（5）地域内だけでなく、広域な交流関係が見られること

報告3 石川県における弥生時代の拠点集落について

搬入品として分かりやすいものは、露頭が限定できる石材や土器の搬入品があげられます、加賀地域は主に北近畿や山陰地方の土器が多く搬入される地域であります。

そのなかでも八日市地方遺跡の量は筆頭でして、もっとも普通に見られる北近畿や山陰地方の土器以外に、八日市地方遺跡では東海地方と大きく言わずに尾張と言っていいのでしょうか。そういう搬入や信越地方の土器など、種類の豊富さでも、八日市地方遺跡は筆頭であると思います。逆に吉崎・次場遺跡は西の土器というよりは、東日本の笹澤先生の話にありました栗林系など、東の土器の搬入が多く見られて、ヒスイ製の玉づくりからも見えるよう、東日本のものが吉崎・次場遺跡のほうから多く見られて、逆に西のものは八日市地方遺跡のほうが多く見られるようです。

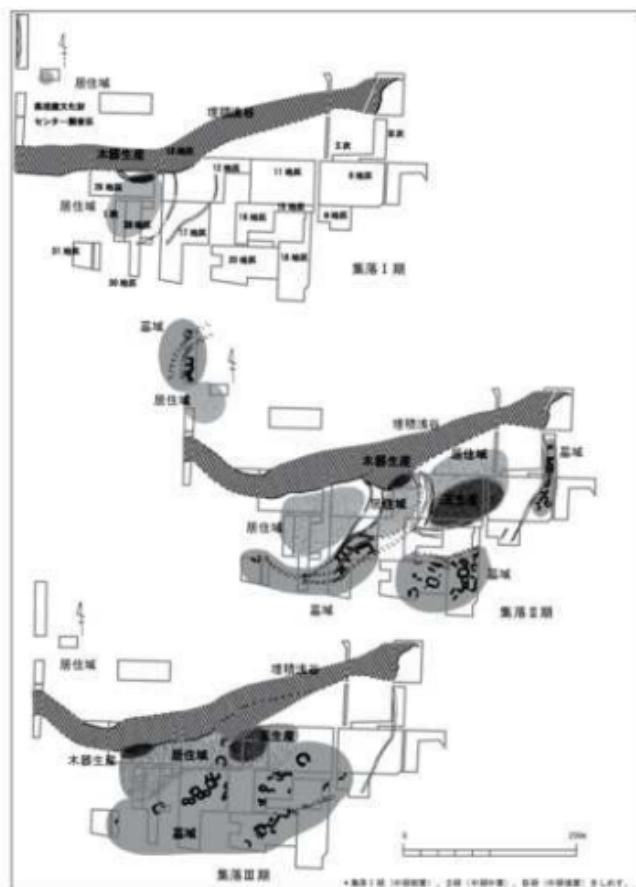
5. 八日市地方遺跡の概要

以上、加賀地域と能登も含めた石川県内で、八日市地方遺跡がどうして拠点に見えるのかというのを整理してきました。最後に、八日市地方遺跡の中身を見ていきたいと思います。簡単にお話していきます。

第7図をみてください。これは大きく時期の変化を示すために準備した図です。集落1期は、主に中期前葉の状態を示しております。中期前葉では八日市地方遺跡の大きさはこれぐらいです。環濠は巡っているのですが、まだそれほど規模としては、4ヘクタールいくかいかないかと小さな状態で集落が展開しています。この段階から木器生産は始めております。今年掘った発掘調査区は、自然河道右岸部にあたり、ここでも中期前葉の土器が出てきており、面白い様相がみえてきております。今回ここの報告のなかでは、内容をお話しするのは取っておきまして、次回の報告のほうで発掘調査を担当しました宮田のほうから、詳しい話が聞けるかと思います。この調査は、図式に書かれていないのですが、エリアとして書けるような図はあったということだけお話しておきます。

集落2期、中期中葉です。小松式土器の成立段階にあたる時期になります。黄色い箇所（居住域）は、人々が住んでいた居住の場所と思われるところで

八日市地方遺跡記念フォーラム



第7図 八日市地方遺跡変遷図（小松市教育委員会 2007）

す。緑色の箇所（墓域）は、方形周溝墓というお墓の位置になります。見ていただいても分かるように、居住域の外側にの墓域が巡っております。それで先ほどの吹上遺跡や下谷地遺跡などまったく様相が違うかたちがわかつていただけると思います。もう一つ特徴的なのが、石川先生や赤澤先生も今日お話をされました環濠、溝です。八日市地方遺跡は多重に巡ります。それは

報告3 石川県における弥生時代の拠点集落について

ただムラを囲う溝というだけの意味ではなくて、居住域が少しずつ途切れている理由は、ムラの中に溝が区切ってあるのです。なぜこの溝がムラのなかに区切ってあるのかという話になるのですけれども、同じムラなのだから溝は区切らなくていいと言われればそうなのですけれども、何か区切ってお墓の場所も別の場所を持つ。居住域と相対する位置に持っていて、そして溝で囲うという意味には、ムラの中でも集団を別にするようなものが八日市地方遺跡の中では展開していたのではないか。ということが考えられるのではないかと思っております。

それと一緒に対応するというか、できることが生産です。八日市地方遺跡の中では玉づくりと木器生産が見えるのですが、木器生産が集中的におこなわれますが、この河道の肩を使った部分にあたります。玉づくりというのは木器よりも外側に位置するところで、広域におこなっているようで、集中的におこなう場所というのは集落全域に分散してあるわけではなくて、この溝で囲まれたエリアごとに存在しているのではないかということが言えるかと思われます。

複数の集団がより多く見えて展開していく状態というのがもっとも見えるのが、小松式土器が成立した中期中葉と思われます。次に集落3期、中期後葉です。遺跡の終わりに近づいてくる時期になります。この時期になりますと、多重にみえた環濠、溝が埋まってきます。埋まつてくるなかで、逆に大きな溝の中で一つのように混在して混じつてくるような状態になってくるのが集落の終わりの段階になります。図は一体になっていますが、居住域は蝶々みたいになり、お墓も二つのならびが見えます。この集落3期の段階でも、やはり木器生産と玉づくりというかたちがあるように、中期後葉段階でも大きく二つあったのではないかと、今再検討をしている次第です。

では発掘調査をした中身を見ていきたいと思います。八日市地方遺跡のなかで、特別展を見ておいでになられた方は気付かれたかもしれません、特徴として多量の木製品が見られることです。その大きな要因は、先ほどどの図で見せました遺跡の中央に旧河道、川が見られることです。その川から木製品が多量に出ておりまして、これは発掘調査の風景ですけれども、水中ポン

八日市地方遺跡記念フォーラム

で水をどんどん掲げてもベタベタの状態であるという。逆にだから木器が腐らずにきれいに残っていたと考えられます。

この河道の中からは、土器や木製品などだけでなく、貝層もみられました。貝層からは、貝、動物の骨などがまとめてみつかっています。あと、施設としては、木器の貯木場所と木の実の貯蔵穴があげられます。木器の貯木場所は、川の流れで浸食されたできたくぼみを利用して、そこに木道を渡し5メートル四方ぐらいのブロックを配していました。木の実の貯蔵穴は、川の肩部に数か所掘り込まれており、トチ、ドングリ、ヒシ、クルミがみられました。

こちらは把付磨製石剣と、貯木場所から発見された容器のつくり途中のものです。居住域の調査の説明をします。これが環濠が調査された地区の写真です。この無数にあく穴は建物の柱跡と思われます。こちらが川にあたる部分ですが、ここには長方形状の土坑が数個展開しています。この土坑の性格ですが、掘った際にはもう土器が埋納されているような状態だったのです



写真1 八日市地方遺跡埋積浅谷
(旧河道) 作業状況



写真2 貝層検出状況



写真3 木製容器の未成品及び
把付磨製石剣検出状況

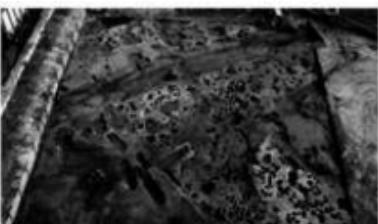


写真4 居住域完掘状況

報告3 石川県における弥生時代の拠点集落について

が、機能としては木器を水漬けするような、川の肩を利用した水漬け用の貯木土坑のようなものではないかと考えております。

こちらの写真は平地式の建物になります。ここに掘られている溝の中からは、管玉製作用の工具や管玉のつくり途中のものが出ております。次に、この写真は環濠を掘っている作業風景ですが、この溝を半分ぐらい掘りますと、足の踏み場がないぐらい土器や木器が捨てられております。今捨てられているという話をしたのですが、それは集落をだんだん大きくする際に、少しずつ埋めながら、また拡大してというような状態が見ておりまして、このような環濠があたる居住域の調査を $1,000\text{m}^2$ しますと、100箱は土器が出ます。もっと多いところですと、ここの調査区のもう少し東側にあたる玉作生産と書いてあったあそこの部分でしたら、 $1,000\text{m}^2$ で300箱の土器が出ております。

この写真は、土坑の土器検出状況です。土器が埋納されている土坑ですと、



写真5 平地式建物跡検出状況



写真6 環濠掘削状況



写真7 土器の検出状況

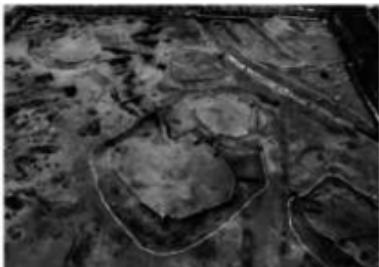


写真8 墓域検出状況

八日市地方遺跡記念フォーラム

完形に近い形の土器がガンガンといっぱい入っておりまして、こちらに見えますのは東海系の細頸壺と、小松式土器が多量に廃棄されていました。今度は墓域の調査写真です。方形周溝墓の溝の中には、掘削のときに使われたかと思われる鋤なども発見されております。それ以外にも

お供え物とする土器などが割れない完形で出てもおります。八日市地方遺跡というのは基本的に削平されておりまして、残りが良かった箇所は、低い川の部分だけです。なので、お墓とかがつくられる少し高い部分というのは削られてしまっております。埋葬施設はほとんど見つかっていないのが現状です。70基以上越えるお墓のなかで、主体部が見つかっているのは、現在3基のみであります。そのなかで、もっとも残りがよかったお墓はこれに当たりまして、だいたい一辺が長いほうで14メートルになるお墓であります。そこには四角いかたちの木の棺が一体見つかっています。その中からは管玉の出土が見られます。このお墓の時期ですが、ちょうど集落の最盛期の中期中葉にあたります。



写真9 主体部検出状況



写真10 人面付土器



写真11 木偶



写真12 人物陽刻意匠板



写真14 人形土製品



写真15 鳥形木製品



写真18 鳥形土器



写真16 魚形木製品



写真19 シカと狩人が描かれた絵画土器

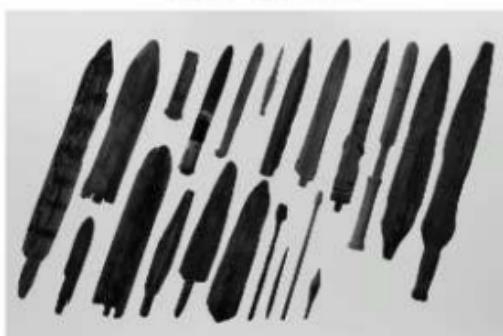


写真17 武器形木製品



写真20 銅鐸形土製品

出土品は、さらっと流していきたいと思います。特別展のほうでも展示しております遺物になります。この写真は、人を表現した祭りの道具で人面付土器であります。これは木製品でして、人物が万歳して、こちらに鳥装といって、鳥の様相を示して、羽ばたくような様相を描いたようなものになります。こちらは木偶です。本当は木偶というのは、滋賀県を中心に分布しているお祭りの道具ですけれども、八日市地方遺跡でも見ることができます。次に鳥形木製品です。この鳥形木製品の数は、全国的に考えても量が筆頭的に多い

八日市地方遺跡記念フォーラム

と言われております。こちらは鳥形土器ですが、先ほど赤澤先生が吉河でしたか、あれはニワトリの頭だという話でしたが、ああいうものが頭に付けられるようなものと思われます。次にシカと狩人が描かれた絵画土器です。こちらは人形土製品として、胸にシカと思われる絵画が描かれたものであります。次に魚形木製品です。金属器を表現したものとしては武器形の木製品、剣形木製品などが数多く出ております。金属器、銅鐸の出土は八日市地方遺跡にはないのですが、銅鐸は八日市地方遺跡の人々は知っていたと思われまして、このような銅鐸形の土製品が出ております。そして生産です。生産されたものには、容器や食事具の



写真 21 片刃石斧の柄



写真 22 鋳造鉄斧の柄

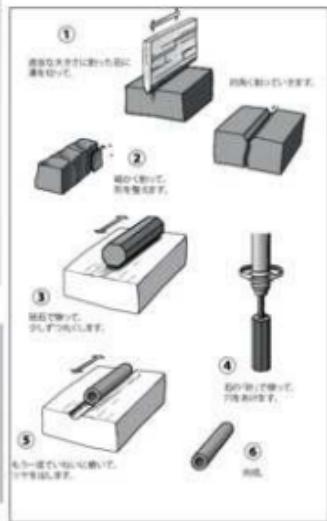


写真 23 碧玉製管玉の製作工程



写真 24 丸く形を
整えたヒスイ

写真 25 ヒスイ製勾玉



第8図 管玉の製作工程(模式図)

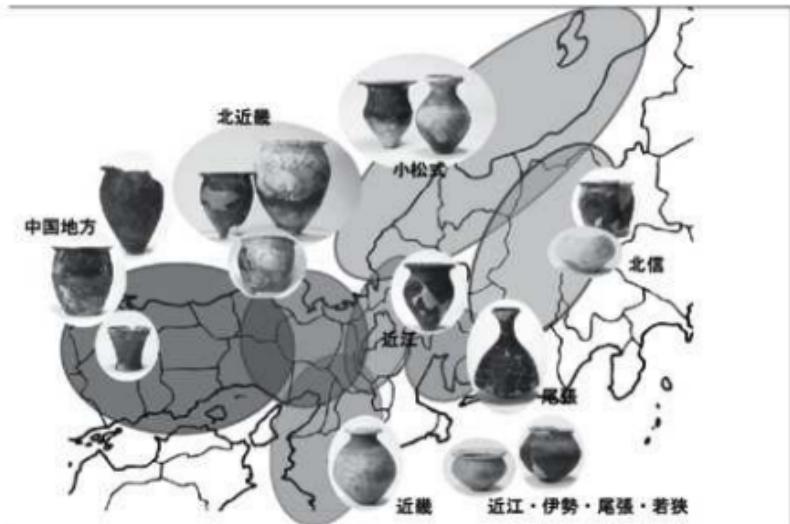
報告3 石川県における弥生時代の拠点集落について

匙や農具の鍛などがあります。これは鍛の製作工程ですが、今もう時間がないで流していきたいと思います。これは木の伐採具です。こちらの柄は石器の柄になりますが、こちらのものだけが鉄斧、鉄の斧もあったようです。鉄斧は中期中葉から見られるようです。

こちらが管玉の製作工程です。これも特別展のほうで説明がしてあります。ヒスイ製の勾玉です。勾玉だけではなくて、このようなこぶし状のヒスイの原石や、つくり途中のものも出でています。

ここからが本当は大事な話だったのですが、そこまでなかなかいけずに、話を簡単に終わらせなければいけなくなりました。広域な地域の土器ということで、先ほどの笹澤先生の図面のような、写真版を私もつくりました。

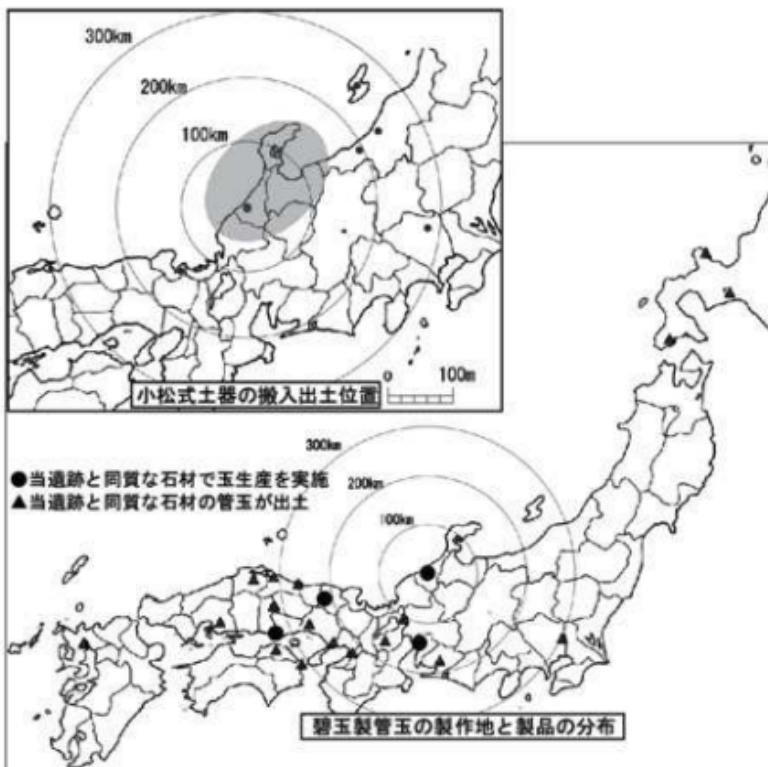
こちらの写真のものはすべて八日市地方遺跡から出たものです。広域な小松式という北陸圏の中にありますて、八日市地方遺跡からは先ほどのこの北信にあたります長野や尾張の土器、近江の土器、そして一番見られます北近畿の土器、もう少し離れたところの中国地方の土器、そして近畿の土器と広



第9図 広域に分布する搬入された土器

八日市地方遺跡記念フォーラム

範囲土器が見ることができます。このなかでひとつお話ししておきたいのが、この土器です。これは今写真のなかに出てるものでも、もっとも古い土器になります。これは集落の1期といつております中期前葉の土器で、八日市地方遺跡の集落にもっとも関係しているところは北近畿を主体としている土器が、集落の最初にとても多く見られるのです。この地域の人たちが、八日市地方遺跡の形成にかかわっていたのだと予想しております。次に小松式土器と碧玉製管玉の流通というのが書いてあるのですが、これもさらっと流し



第10図 小松式土器と碧玉製管玉の流通

報告3 石川県における弥生時代の拠点集落について

ます。ここが八日市地方遺跡の位置になります。ここは浦入遺跡と言いまして、舞鶴市にあたるところで小松式土器が出土しております。もう一つ東にの遠いところですと、吹上遺跡や下谷地遺跡、平田遺跡でもみられます。この辺りは小松式土器が展開していくところですが、小松式土器以外の栗林式も展開している地域で、この主流のラインから外したところに書いてあります。埼玉県の小敷田遺跡というところでも小松式土器が見つかっております。こんな離れたところまで小松式は行っているのです。こちらの図は碧玉製の管玉の製作図と製品の分布というので、薦科哲男先生という方がつくられた図ですが、この黒い点は同質の石材で玉つくりをおこなっている遺跡です。三遺跡ありますと、朝日遺跡、八日市地方遺跡、兵庫にある遺跡にあたります。このように同質の石材で玉作りをおこなっているところは少ないのでそれとも、逆に同質の石材の管玉が出土しているところになると、北海道まで飛んでいるような図になって、これが本当に同じ一つの石を使っているかどうかというのは、別の話としましても、似たような文化圏で同じようなものをつくるということがあるのではないかというふうに見ればどうかと思ております。そうしますと、先ほどお見せしました土器の交流と、とても似たようなこの辺の展開が見えてくるのではないかと思います。すみません。まとめにならなかった分もあるかと思いますが、下濱の報告は終わりにしたいと思います。

座談会 「八日市地方遺跡の役割について」

1. はじめに 一フォーラム開催の経緯と座談会の趣旨一

○望月

本座談会の進行役を務めさせていただきます、小松市教育委員会埋蔵文化財調査室の望月精司でございます。よろしくお願ひいたします。

これまで、「弥生時代の西と東」というテーマで、3名の先生方に各地域の報告をいただきましたが、この座談会では、「八日市地方遺跡の役割」という部分に絞って、討論を行っていく予定であります。

さて、今回のフォーラムは八日市地方遺跡出土品984点が石川県指定有形文化財の指定を受けたことを記念して開催する事業であります。この記念事業といたしましては、第1回目に明治大学教授石川日出志先生をお招きし、「弥生環濠集落とはなにか」という題名で講演をいただきました。第2回目は大阪府弥生文化博物館館長金閥恕先生をお招きし、「弥生時代の祭りの伝統」と題する講演をいただきました。今回のフォーラムは、この2回の記念講演会を受けまして、北陸地域の弥生時代中期集落について、西と東の様相、文化の違いなどに焦点を当て、福井県域を赤澤徳明先生、新潟県域を筆澤正史先生、そして石川県域を下濱貴子調査員に報告してもらいました。この座談会では、ご報告をいただきました3名の先生方々をパネラーとして、北陸地域の西と東の弥生文化の様相差、西からの弥生文化波及の様子、どのように、どのような経路で伝播したのか、または縄文時代に存在していたであろう既存のムラが、弥生の稲作文化によって、どのようなムラに変わつていったのか。そのような各地域の弥生集落の構造差などを整理する中で、北陸の拠点集落と言われている八日市地方遺跡の役割について、そして、何



座談会 八日市地方遺跡の役割について

故、小松にそのような基点となる弥生集落が作られたのかというところに問しても、これから討論していきたいと思います。

私は弥生時代を専門とする研究者ではございませんので、一般市民の視点で、できるだけ分かりやすく座談会を進行させていただく所存です。よろしくお願ひします。

2. 会場からの質問に対して

さて、会場に質問箱を設置し、参加者の質問を求めるましたところ、たくさんの方の質問がありました。あまりに多岐にわたり、全ての質問をこの場で取り上げますと、それだけでこの座談会が終わってしまいますので、こちらの方で、3人の先生方の報告において、既に述べられている質問は省かせていただき、また、座談会で取り上げる論点と重なる質問についても後で取り上げるとして、それ以外の質問について、各先生方にこれからお答えいただきます。まず、^{どうらく}銅鐸関連の質問ですが、「福井の銅鐸が県境を越えて、加賀ではなぜつくられなかつたのでしょうか、そのわけをどう思われますか?」、「銅が手に入らなかつたからつくられなかつたのでしょうか」という質問が来ております。これは福井県の赤澤先生にお答えいただきます。よろしくお願ひします。

○赤澤

はい。第1表(P85 参照)をご覧ください。福井県出土の銅鐸を出してあります、一応全部10個ありますが、そのうちの5個までが若狭、残り5個が越前。としますと面積の比率の割合からは若狭が非常に多いということで、越前のほうは密度が薄い。とすると石川県加賀にも銅鐸が今のところ出土した確実な事例はない。可能性としては1個か2個あるかもしれない。

実は内灘出土の銅鐸はありますが、少しそれは怪しいのです。先ほど下濱さんの報告にあった能登の吉崎・次場遺跡というところで土製の銅鐸の鋳型でないかというのが出ております。そういうのも含めると今後見つかる可能性はありますが、今のところないので、ないものを実証しようがないのです。

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

銅鐸が絶対ないとは言いませんが、あっても1個か2個あるのかなと。将来発見されるのかなというところしか、お答えできない範囲だと思います。

○望月

ありがとうございました。

さて、続きまして玉作り関係、ヒスイの勾玉などに関する質問が3件来ております。1件は「玉つくり工房、玉資料の廃棄場所に研磨によって生ずる研磨粉などが層状に堆積した場所が見つかっていないのでしょうか。相当量の粘土が堆積しそうですが」という質問、2件目は「堅いヒスイをどうやって削ったのか」という質問、3件目は「ヒスイの勾玉はどのような用途があつたのですか」という質問です。これは玉作り関係の遺跡を調査された新潟の笹澤先生にお答えいただきたいと思います。よろしくお願ひします。

○笹澤

質問の趣旨、順番ごとにお答えしたいと思います。まずヒスイを磨いたときのくず、研磨粉が出た痕跡はないのかということですが、調査そのものは明確にとらえられなかったのですが、確かに白い灰色をした粘土状のものがたまっていた場所はあります。どういうところにたまっていたかと申しますと、ヒスイの勾玉をつくっている建物の中に小さな穴を掘っているところがあります。そういうところに何か白っぽい粘土みたいなものが出ているところはありますので、そこに研磨粉が堆積していた可能性はあるかと思います。次のヒスイのような堅いものをどうやって削ったり、磨いたりしたかということですが、おそらく同じぐらいの硬さのもの、例えばヒスイをハンマーにして削ったり、ヒスイを熱して急速に冷ますと、石の目に沿って割りやすくなるというような例もあるみたいですので、もしかしたら、加熱して石の目に沿って削っていた可能性はあるかと思います。

どうやって磨いたかということですが、遺跡ではメノウがたくさん出ています。メノウというのはヒスイと同じぐらいの硬さでして、今のヒスイの加工もそうらしいのですが、メノウ片を非常に細かく砕いて粉状にするので

座談会 八日市地方遺跡の役割について

す。それを媒介にして水を足して研磨剤として使って、それで砥石で磨いていくと。おそらくそういうやり方をしていたのではないかということが想定されています。ひたすら砥石で磨きながら、形を整えていくという工法がとられていたのではないかと考えられます。

最後の用途ですが、これはお墓から出たような例を見てみると、基本的には胸飾りとか腕飾り、ブレスレットですか。そういう用途が一番考えられるかと思います。ほかにも身に着け方、要するにファッションの問題にかかわりますが、髪飾りとか耳飾りとかイヤリングなど、いろいろなやり方があったのではないかと思います。実際に身に着けないで、ヒスイそのものを非常に高価な貴重なものとして埋納する例もあった可能性があります。その例としまして、長野県の岡谷市というところに天王垣外遺跡という遺跡があるのですが、そこではヒスイの勾玉が何十個という量で一度に出ている場所があります。もちろん完成品です。ほかに管玉もたくさん一緒に出ていますが、それが何か壺みたいなものに入っていたと報告されていますので、もしかしたら、そういうものが身に着けないで、お祭り用に埋めていた可能性があるのかなと、お答えできるのはそのぐらいです。

○望月

丁寧にお答えいただきありがとうございました。

続きまして、八日市地方遺跡の年代観について質問が来ています。「今回の当日資料集の32ページに時代区分ⅠからⅣの各区分が示されているのですが、そこに西暦が付されていないので、各時代は何年頃から何年頃までを示すのか教えてほしい」という質問です。これは報告者の下濱調査員に答えてもらいますが、あわせて、「弥生時代の戦闘に関する質問」が来ていますので、これもあわせて、下濱調査員からお答えいたします。

○下濱

はい。分かりました。下濱のほうから話したいのですが、まず当日資料集36ページの「まとめ」というところですけれども、時間がなくなりまして、

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

ちゃんとまとめができなくお話しできなったのですが、今、新説でいうAMS、前回の金閑先生のほうでもお話がされました実年代でお話したいと思います。それと水位の気候の変化です。それも報告であったという話でしたが、一部読みみたいと思います。約3000年前ごろ、これが弥生時代のはじまりに位置付けられると思います。弥生時代前期というのは、紀元前800年というふうにお話しておきたいと思います。海水準は今より2メートルか3メートルほど低下しております、その後約2000年前ごろ、弥生時代中期後半ごろになると、海水準が上昇し始めて、やがて今の海面のレベルまで上がってくると、^{ケヤのよしお}絶野義夫さんの報告のなかにあります。これをもって、実年代と地形の水位の変化の両方のお答えをしたいと思います。

次に戦いの件ですが、争いのあと・出てきている遺物はあるのですかという話です。まず石鐵、鐵ですね。縄文時代と比べて大型になるということが言われております。先日も笹澤さんと八日市地方遺跡の石鐵を見ていたのですが、やはり東日本の石鐵と比べるとかなり大きいというお話をいただきました。それ以外に守る武具ですね。櫛も八日市地方遺跡の中で見ることができます。

弥生時代後期後半になると、加賀地域、能登でも台地や丘陵に上がるという話を報告いたしました。あと笹澤先生のほうからも、丘陵状に上がるという遺跡の報告があったと思います。この件ですが、すべてが高地性集落という防御的な機能を持った遺跡に該当するかというのは別ですが、そういうものを加味したような遺跡が、後期の終わり頃になると見えます。そういう遺跡が政治的な背景だけではなく、争いといったものも充分加味された中で生まれたということで終わりたいと思います。

○望月

ありがとうございました。会場からの質問はこの辺で終わらせていただきます。

3. 座談会テーマの説明—弥生文化の波及及び定着と拠点集落—

○望月

そろそろ、今回の座談会テーマに沿って、討論を進行させていただきますが、今回の座談会を行う上で3つのテーマを設定させていただきました。

第1点は弥生文化の波及と定着の問題です。

弥生文化は大陸から伝わった新しい稲作文化です。それ以前は縄文時代、山で木樹の産物を採集したり、魚や獣を狩猟したりと、そういうものを生活の糧として暮らしていた社会です。それが大陸から伝わった稲作文化とともに、大きく世の中が変わっていきます。弥生時代の前半から中頃ぐらいまでの時代、そのような時期に社会が大きく変わっている。北陸において、そのような弥生文化の波及というのが、どのような形で見えてくるのか。先生方の報告の中で、弥生時代初期の波及は、弥生前期の土器は出土するけれども、集落は大きくなっているのかなど、などの話がありました。

弥生初期の土器が北陸に持ち込まれる要素は、大阪とか早く弥生文化が定着するような西日本地域との、ある程度の人の交流の中で見られる現象でしょうが、それが稲作文化の定着となると、単なるモノやヒトの移動だけでは成り立たない。そのような時代が初期の弥生文化の波及段階だと言えます。

その次に、稲作文化の定着という段階がある訳で、弥生文化の波及には二つの局面があったと考えています。それは、北陸、北陸と言っても東西に長いですので、西に当たる福井と東の新潟との間で、どのような時間差があり、そこにはどのような地域差や異なる局面が見えてくるのか。その点に関して、パネラーの皆さんにお答えいただきます。

第2点は拠点集落とはどのような遺跡なのかという点です。本日の報告の中で、拠点集落にもいろいろな形態があるのではないかといった報告がありました。八日市地方遺跡は拠点集落であります、北陸の他の拠点集落と言われる遺跡とは少し異なる、特別な拠点集落だといった報告があったと思います。パネラーの皆さんには、その拠点集落の性格や様相の違い、その辺の話を少しお分かりやすく説明してもらおうと思います。

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

拠点集落と呼ぶ要素としては、まず、集落の立地というのが重要なファクターとなります。集落がどのような場所につくられたのか、交通の要衝であったり、農作業のできる低湿地帯であったり、広い平野を持ち、交通の要衝であることが大きなポイントとなります。それと集落内部で玉作りとか木器製作、石器・土器などの生産も行っている。集落内で自前の生産をおこない、それを広く流通させているということも、立地と関係して重要な要素です。また、遺跡の規模や集落構造も重要な要素です。周辺集落よりも各段の規模を持ち、集落内で、居住する空間と墓域とを分けている。それを濠や溝で区画し、環濠集落というものを構築している。そのような点が揃うこと、それにより拠点集落の性格は決められています。

もう一つ、このような拠点集落がいつ出現し、消滅していくのか。集落の拡大時期、そして継続期間が長いということも重要な要素です。

さらには、祭祀遺物として稻作に関わるような出土品。絵画土器、絵が描かれた土器が存在するとか、銅鐸や銅戈とかの青銅器の祭祀道具、木製の祭祀道具、そのような祭りに伴うような特殊な出土品が存在すること。加えて、地域の交流を示すような土器とか石器、木製品、金属製品など、そのような搬入品が遺跡から出てくること。

以上述べた要素が揃うことが拠点集落と呼ぶ要素であり、定義であると考えられます。ここで述べたもの八日市地方遺跡での拠点集落としての定義だと思うのですが、これが他の地域ではどう見えてくるのかいうところを、今からパネラーの皆さんにお聞きしたいと思います。

4. 福井の拠点集落の特徴と八日市地方遺跡成立の要因

○赤澤

稻作の定着ということは、わたしもスライドで出しました。72ページの今市岩畠遺跡というのがあって、こちらは先ほどもお話しましたように、環濠という西日本では一般的に初期の稻作農耕が定着した証しではないかと考えているものがあって、環濠集落というものが出ていて、ただ集落内部については、ほかの方形周溝墓というお墓と一緒に非常に削られていて、微妙な

深さしか残っていませんので、建物は分かっておりません。

ほかの集落を見ても、この中に竪穴住居がぽんぽん建つわけではなくて、おそらく掘立柱建物の柱穴だけが残るような建物で構成されている場合が多いので、そういうものがたぶんあったと。そのなかで、先ほど質問にもありました縄文との継続性についても、この近くにある糞置遺跡では微妙ではあるが連続するように土器が出土し、今市岩畠遺跡でも、実は若干この調査に関連して縄文時代の最終末の土器が出ております。ですから縄文時代と全然関係ないところで成立したわけではなくて、おそらく縄文人がいたエリアに、継続して初期の農耕集落がおそらく定着したのだろう。エリヤ的にはそういう地域なのだろうと考えております。

ですから、この遺跡がおそらく初期農耕集落の定着した証しとして、一番最古の環濠集落があるというところを私は評価したいと思います。拠点集落につきましては個々の要素です。今下濱さんがあげられた個々の要素すべてが当てはまる遺跡というのは、今のところありません。例えば、八日市地方遺跡のように木製品をつくっている。これは残りがよくなければ木は残りませんので、そういう痕跡がないとなかなか分からぬのです。

例えば地理的条件に地域交通の要衝であるというのは、わたしの資料ではつくりませんでした。中角遺跡というのがあります。これは九頭竜川のすぐ脇です。そんな河川の洪水を受けやすいところに、縄文時代の終わりから弥生時代、古墳時代、古代、中世まで連続と人が住んでいる、また居住した跡があるということを考えれば、やっぱりそこが九頭竜川と川を渡る渡渉地点というか、渡航点ですね。そういうところで川を跨いでの交通の結節点であるというところは評価できる。

それから例えば糞置遺跡です。そこも拠点かどうかとありますが、こちらについては当日資料集 15 ページです。人面土器という人の顔をしたような土器が出ております（第 1 図参照）。こういうものが逆に言う



第 1 図 福井市糞置遺跡出土 人面土器

と普通の遺跡で出ないもので、そういうものがあるということ。

それから吉河遺跡です。吉河遺跡についても、ニワトリ形の土製品。例えばシカの土器、そういうものが出ているというところと、もう一つは丹後とかそこまで行くとあるのですが、北陸の一番西端の玉つくりをやっている遺跡です。生産のなかでも玉つくりをやっている。敦賀から西の若狭では、今のところ玉つくりをやっている遺跡は見つかっておりませんので、玉つくりをやっているという意味でいけば、ここも拠点だろうと思います。

ただこの遺跡の場合はちらっと言いましたが、方形周溝墓が列状に並んでいる。こういう配列というのは北陸はないもので、むしろ西日本とか近江とか、そちらにあるパターンですので、非常にそちらに近い。実際出ている土器も近江、滋賀県の土器が大量に出ておりますので、そういう結びつきから考えると、そういうところでの交通の要衝でもあると考えております。

○望月

近畿地域の弥生文化に近い様相を、やはり越前は持っているというふうに考えてよろしいですか。

○赤澤

そうですね。若狭はむしろ北近畿系ですね。特に小浜とかのほうは、自分たち住んでいる人は北陸の一部とは思っておりませんし、福井県だとも思っていません。あのひとたちは大阪とか京都に福井よりも親近感持っている地域だと、越前では思っています。そういうところですので、ただ敦賀まで来ると若干その様相はないけれども、非常に北近畿に近い。

敦賀からもう一つこっちへ来ると、広い意味での北近畿に近いのだけれど、もう少し敦賀とか小浜よりも遠くなる。距離的な問題がありますから、そういうもので基本的には北近畿だけれども、どこまで北近畿だと言われると小浜、敦賀までかなというふうには思います。

○望月

座談会 八日市地方遺跡の役割について

つまり、八日市地方遺跡のような性格をもつ拠点集落は、越前には存在しなかった、成立しなかったと考えてよろしいのですか。

○赤澤

はい。日本海側のほうに拠点集落を見てみると、やはり潟湖というものがなければと思います。拠点集落は潟湖というものにくっついている。

○望月

潟湖があるということが、立地においてどのような意味を持ちますか。

○赤澤

潟湖というのは、おそらく当時外洋というか、風待ちというか、安定した港がつくれるということで、より遠くと頻繁に交易ができると。舟便を考えたことの潟湖ですが、そういうものが吉崎・次場遺跡であり、有名な妻木晚田遺跡や青谷上寺地遺跡などもそういう縁にあったり、日本海側は、潟湖に大集落があるのかなというところで、今のところ潟湖がないというのが、拠点集落がないというかな。

○望月

ありがとうございました。今の赤澤先生のお話で重要なポイントが出されました。潟湖。つまりは港湾です。港湾的な地形を求める中で、八日市地方遺跡は、この小松市に選定されたのではないかということです。

それともう1点、加賀地域よりも1段階古い時期に越前では拠点集落が成立するという点に関し、稲作文化の初期波及の点も含めて、よりそれは近畿に近い様相、地理的な隣接地域という性格から来るものということでよろしかったでしょうか。

○赤澤

そうですね。そういうところです。

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

○望月

赤澤先生ありがとうございました。

5. 能登、越中の拠点集落と八日市地方遺跡との違い

○望月

次に、加賀、能登、越中の様相に話を移します。ただ、加賀地域については、下濱貴子が報告のなかで詳細に述べていましたし、八日市地方遺跡を総括として最後にまとめてもらいましたので、加賀を除いた地域、能登と越中の様相について、能登の拠点集落と呼ばれている吉崎・次場遺跡が八日市地方とどのように異なるのか、どのように比較できるのか。富山の地域に吉崎・次場のような拠点集落は存在しないのかという点に関し、下濱調査員より示してもらいます。

○下濱

この会場にも富山の方が多くきているかと思って、少し不服に思うところもあるかもしれません、取りあえず私ごととして話したいと思います。

まず能登と越中地域の弥生文化の波及と時期の様子ですけれども、実はこっそりと付けてあります裏の図を見ていただきたいと思います。何もタイトルも付けておりません。何も説明もしておりません。この赤い点はわたし自身が、ここに拠点があればいいと思う遺跡をプロットしている部分に当たります。この黒い点は弥生時代中期の遺跡に当たります。赤も、もちろん弥生時代中期に当たります。能登のこの点は吉崎・次場遺跡に当たります。

次に富山に二つ赤い点を付けてあります。中のほうに入っているのが高岡の石塚遺跡で、もう一つが新湊の高島A遺跡や作道遺跡、その辺りを点として位置しております。もう少し東に行ったところに、上越の吹上遺跡と下谷地遺跡と柏崎市のところに点を付けてあります。

能登と越中地域の弥生文化の波及の話ですが、能登のほうは先ほどのわたしの報告で話しましたように、加賀地域と基本的には同じような状況で、羽咋に関しては櫛描文が出てくる。それぐらいから文化の定着といつていいの



第2図 八日市地方遺跡周辺における拠点集落の位置

ではないかと思います。越中地域ですが、今お話しました石塚遺跡と高島A遺跡や作道遺跡などを見ておりますと、現状では導入期は中期の前葉にあるかもしれません、波及という定着の意味では中期の中葉あたりまで待たなければならぬのではないかと思っております。

越中地域に吉崎・次場遺跡クラスの中期の拠点集落は存在するのかという話ですが、話が重複しますが、この石塚遺跡や高島A遺跡など、この辺りがそれに存在してくるのかと思うのですが、ただ八日市地方遺跡と違う点があると思います。それは逆に言うと、一遺跡に限定できないという、この複数に跨るというところで大規模な集中の大きい遺跡がなりえなかつたのではないかと考えております。以上です。

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

○望月

吉崎・次場遺跡に弥生文化が波及する時期は、八日市地方遺跡と基本的に同時期でよろしいのですか。

○下濱

ただ、前期の新段階の土器は見えます。ただその時期の遺構というのは、はっきりしておりませんので、吉崎・次場遺跡のほうが八日市地方遺跡より早いとはわたしは言えないと思っておりまして。Ⅱ様式後半から小松式の成立に当たるところですね。

○望月

それでは、越中の石塚遺跡、高島A遺跡について、そちらの方は八日市地方遺跡と時期がずれているのですか。

○下濱

そうですね。石塚遺跡のほうでは、中期中葉を待たなければ難しいということと、中期の中葉でもまたこれを細かく分けますと、中期の中葉でも本当の頭のほうではなくて、少しやや八日市地方遺跡より一段階下がった段階に一番多く展開してきております。

○望月

では、吉崎・次場遺跡と八日市地方遺跡との様相の違いですが、下濱調査員は、吉崎・次場遺跡は東へ向いた基点という話を報告のなかでされていましたが、ヒスイが多いこととか、土器の交流とかですね、そういう点から言わわれていると思うのですが、その点に関し、もう少し説明してください。

○下濱

八日市地方遺跡の特徴的な生産遺物と吉崎・次場遺跡の生産遺物とは違う特徴を持っております。八日市地方遺跡は、木製品を多量におこなっている

座談会 八日市地方遺跡の役割について

ということと、小松市民の方は知っている方もいると思いますが、菅玉をつくる碧玉の露頭というのが、菩提や山中のあの辺りにあるわけです。そうしますと八日市地方遺跡は、大規模に碧玉製の菅玉をつくっておりまます。

逆に吉崎・次場遺跡は八日市地方遺跡では弱い、東に近い海を介して入りやすい大型蛤刃石斧の生産やヒスイ製の勾玉をということをつくっておりまます。こうして見ていきますと、逆に八日市地方遺跡から50キロ圏内で入った広域の分布で考えたときに、同じような補完関係で違う生産物資を補いながら、こここの地域で存在していたのではないかと思っております。

○望月

ありがとうございました。先程の赤澤先生の報告の中で、潟湖、港湾がキーポイントであるという提言があったわけですが、その意味では、吉崎・次場遺跡も邑知潟を港湾としてそのような条件に合っているというわけですね。それと集落のなかでの生産の問題とか、規模とか、遺跡の消長、環濠、方形周溝墓の存在など、そういう違いは見えるのですが、八日市地方遺跡と類似する点はあるけれども、質、量、規模が違うということになるかと思います。大・中・小のクラス分けをするとすれば、八日市地方遺跡を大とすると、吉崎・次場遺跡は中か小という拠点集落のランクにある。そのようなことになるのでしょうか。

6. 越後の拠点集落の特徴と西からの弥生文化波及の様相

○望月

続きまして、新潟の状況に移りたく思います。まず、新潟における弥生文化の波及は、海を越えて、沿岸部伝いで初期波及があったと笹澤先生から報告がなされました。弥生文化の定着の段階も、近畿圏などの西から直接というよりも、北陸で形成された弥生文化が波及したと。それは八日市地方遺跡であるかもしれないし、吉崎・次場遺跡であるかもしれないけれども、どこか、北陸地域から新潟に弥生文化が波及した。言ってみれば、北陸西部に

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」

入った弥生文化が、北陸東部へ波及したというようなことだったと思うのですが。

それと笹澤先生の報告のなかで、縄文時代から続く集落の中で稻作文化を受け入れ、共存する形で仲よく生活したのではないかという話もございました。その辺のところも含めて、八日市地方遺跡と新潟の吹上遺跡とか下谷地遺跡というものが、どのような点で違うのかということと、弥生文化の波及の様相について、もう一度詳しくお話しいただけますでしょうか。

○ 笹澤

波及についてですが、先ほどお話しましたように、弥生時代前期の土器とか石器を見ますと、西からのものがありますので、人が移動したりするような交流は認められるのですが、いわゆる稻作をおこなうということは定着していなかったと考えています。それが定着するのは、八日市地方遺跡とか、今出た吉崎・次場遺跡がおそらく完全に成立して機能し始める、その段階ぐらいにおそらく稻作文化が定着するのだろうと。それはもちろん日本海を越えて、やってくるのだろうと思います。

質問のなかで、縄文時代から弥生時代に続く遺跡が見えないのですかということですが、それは遺跡そのものとして続く遺跡は見えません。ただ発表のなかで言いましたように、どうも新潟の弥生時代の遺跡というのは、縄文時代の生活習慣とか、例えはうちをどこに配置するとか、そういうものを伝統的に受け継いでいる可能性が高いのだろうと考えています。

縄文時代は、上越とか新潟はどこもそうなのですが、海よりも内陸のほうのルートのほうが強いのではないかという考えを個人的には持っています。それは、先ほどの沈線文系土器で永井さんがつくられた下濱さんの124ページの地図を見ると分かりやすいのですが、どちらかというと小松式土器が新潟に入る前までは、長野県のルートとか飛騨方面ですか、そういう山のほうのルートが非常に重要だったのではないかと。これは縄文時代の交流関係を見てもそうです。それと同時に、東北方面の内陸の山間部を抜けてやってくる文化というのが非常に大きな影響を及ぼしていたと考えられます。

それが小松式期の稻作文化の波及のときは、内陸ではなくて海を渡って一挙にやってくると。そうしたなかで、まず比較的西に近い上越の吹上遺跡に定着するのだろうと思います。ところが先ほど赤澤さんのはうから、北陸の拠点集落の条件として港湾、港を持っていることが要件に挙げられていたのですが、吹上遺跡は内陸のはうにあるのですね。私はここが吹上遺跡の最大のポイントと思っておりまして、弥生文化そのものは海沿いに伝わって定着するのですが、いったん定着するとここに基盤をもって、本来持っている縄文時代のルートを巧みに生かして、今度は逆に周りに影響を与えるようになったのではないかと考えています。

新潟県の中で例外的なのは佐渡です。佐渡は四方を海に囲まれていて、平田遺跡があるところは両津港があるのですが、非常にいい入江を持っている港があるわけです。佐渡については、おそらく北陸の吉崎・次場遺跡とか八日市地方遺跡と同じような形態・規模を持った集落がある可能性は考えてもいいのではないかと。特に玉の原石の産地をバックボーンに持っているというところからも、その可能性は高いと思います。

あと拠点集落についてですが、今ほど申しましたように吹上遺跡というのは集落規模からすれば、八日市地方遺跡や吉崎・次場遺跡にはとてもかなわない規模です。これは遺跡の自然環境や立地条件とか、そういうものにもかなり制約された結果と考えております。下濱さんが124ページの中であげました条件にあるように、交通の要衝とか祭祀関係の道具、継続性、地域内だけでなく広域な交流が見られることというのは、吹上遺跡にすべて当てはまる要件になります。

第3図をみていただければお分かりかと思うのですが、最後に下濱さんが八日市地方遺跡から出た土器の写真で交流関係を示した図面と、私がその図面で示したものとは非常に似通ったものができあがるわけですね。青銅製祭器と模倣品分布図というのがあります。小さくて見づらいのですが、番号1の吹上遺跡の上にあるのが吹上遺跡から出た銅鐸とか銅戈を土でまねてつくったものです。

これは当然そういうものを知っているからこそ、まねてつくったものがあ

八日市地方遺跡記念フォーラム「弥生時代の西と東」



第3図 青銅製祭器と模倣品分布図（上越市史編纂委員会 2005 転載）

るわけで、そういう意味では、やはり弥生文化に必ず必要なお祭りもちゃんとおこなっていると。集落規模とか、そういうものは八日市地方遺跡にかなわないのですが、新潟県全体を考えると拠点的な意味合いは持っていたのだろうと。ただそれが八日市地方遺跡と同等とか、そこら辺まではとてもではないが言えないレベルということですね。

それが地域の中での以前の交流関係とか、歴史的背景のなかでできあがってくる一つのかたちではないかと考えています。あと下谷地遺跡ですが、下谷地遺跡ではこういう広範囲な交流範囲を示す土器とか特殊なものは出ておりません。ということで、下谷地遺跡は吹上遺跡とはまた違った面を持っているのではないかと思います。

ただ遺跡面積からすると、4ヘクタールぐらいという新潟県の中では突出した規模を持っていますので、柏崎平野のなかでの中核的な役割を担った遺跡ではないかと。ただ吹上ほどの広域な交流関係をなぜもてなかつたかです

座談会 八日市地方遺跡の役割について

が、柏崎と上越のあいだに米山という山があって、これがもしかしたら障壁になっているのかなと。

中世の文献に日記なのですが、「米山より奥」という言葉があるのです。都から見ますと、米山よりさらに北は異国世界だという観念があって、そういうものが鎌倉時代とか、それぐらいの文献に見られるということは、上越までは西のほうのものが流れやすいという地理的要件にあるのですけれども、そこを越えると文化が波及しづらくなるのかなと。そういうところに両者の違いがあらわれているのではないかなどと考えているところです。

○望月

ありがとうございました。確認ですが、新潟における弥生中期に成立する集落は吉崎・次場遺跡の成立時期よりも遅れるということですね。

○笹澤

吉崎・次場遺跡、八日市地方遺跡が集落のかたちとして見えてくる段階よりは確実に遅れます。

○望月

ここで会場からの質問に「弥生文化の波及の時間差は何で生じてくるか」というのがあったのですが、今の笹澤さんのお話と関連性が深いので、質問に答える形でお願いします。

○笹澤

非常に難しい問題なのですけれども、下濱さんが示した第2図を見てください。これが現状をあらわしているのかなと思うのですが、各県で中核になるような遺跡がだいたい50キロか100キロぐらいで出てくると。もしかしたら文化が波及して伝播するときに、それが根付くまでにある程度の期間が必要になってくるのではないかと。その時間がずれにつながってきている可能性があるのではないかとなということです。

○望月

ありがとうございました。

7. 八日市地方遺跡が担った役割とは？

－西の視点と東の視点から－

○望月

もうそろそろ、フォーラム終了の時間が迫っていましたので、まとめへと座談会を導かなければならぬのですが、総括をする前に、本日の話の中で見えてきた八日市地方遺跡像というものを再度確認する必要があります。

これまで、弥生文化の波及及び定着と拠点集落の様相について、各地の様相を整理することで、八日市地方遺跡の性格やその位置づけを見てきましたが、八日市地方遺跡が担った役割について、何故それが小松の地だったのか、という理由も含めて、西の視点と東の視点でまとめていただきたく思います。

まず、赤澤先生に、西からの視点、近畿圏と北陸西部の視点で、八日市地方遺跡を見た場合に、それより東に位置する吉崎・次場遺跡とどのように違うのか。本日のまとめという形で、コメント願いします。

○赤澤

なかなか難しいですけれども、やっぱり稻作文化イコール米をつくらなければいけない。米をつくるためには山ではつくれない。初期のころは。当然沖積地平野部とすると、今金沢平野というのは平野と言っていますけれども、おそらく小松周辺と比べると平野の面積は狭いのだろうと。するとやはり福井平野も大きいですけれど、小松のこの辺り、加賀市にかけての沖積地というのは、これより東へ行くとこれほど大きい沖積地はないので、ここがやっぱり初期稲作、稻作が定着するところとしては東端なのがなというのが大きな漠然としたところです。

さっきの銅鐸の話もありましたけれど、銅鐸がある、ない、ではなくて銅鐸分布圏の北側にあるというところを含めると、越前もしくは加賀のこの辺

座談会 八日市地方遺跡の役割について
りまでが、弥生の農耕文化の波及する地域としてはぎりぎりのラインなのかなと思っております。

○望月

ありがとうございました。

次に、笛澤先生に東の視点からコメントをいただきますが、先程、吹上遺跡の陸路の話について、山越えのルート。八日市地方遺跡、小松式土器の流れとして、たぶん信濃へ入って、北関東へという流れから考えると、吹上遺跡が何故あの場所に立地したのかというのは、港湾のみならず、もう一つ峠越えのルートの基点、つまり、陸と海の交通の接点が、吹上遺跡の成立と関係しているということだと思うのです。その辺も含めて、八日市地方遺跡から発信した玉作り技術、それと弥生文化。そのシンボリックな存在として小松式土器という櫛描文土器があるのではないか。そのような小松発信の弥生文化が東日本の中で、どのような地域まで広がっているのか、というところも含めて、東の視点からのまとめのコメントをお願い致します。

○笛澤

小松式土器そのものは、先ほど下濱さんの話にあったように埼玉県ですね。東は埼玉まで確實に行っております。北の方は新潟県のはずれまで行っている状況です。玉を見ると、八日市地方でつくられたかどうかというのはさておき、新潟県内まで小松式土器の文化圏の中で含めれば、そこで生産された玉というのは北海道、東北、東日本、そこら中に行くという状況です。ですから八日市地方遺跡で根付いた文化を基盤にした大きな文化が、さらにその周辺に影響を及ぼしていると。そういう理解が一番しやすいのではないかと考えております。

○望月

ありがとうございます。

8. 総括—八日市地方遺跡の役割と今後の展望—

○望月

それでは、総括に入らさせていただきます。

これまで2回にわたる記念講演会と今回の記念フォーラムを通して、八日市地方遺跡について、多くの先生方の講演と報告を聞いてまいりました。最後に、この八日市地方遺跡の総括を、これまで発掘調査を担当し、今回の記念事業の企画と八日市地方遺跡特別展の展示、図録作成全般を担当してきました下濱貴子調査員にしていただきます。

○下濱

かなり重たいように言われてしまいました。八日市地方遺跡は、やはり西の文化圏の東端でもあり、東の文化圏の西端にも当たるという東西交流の拠点に当たる場所だと思います。この場というのは常に情報の交換、そして物資の交換の場として盛んにおこなわれ、人々が交流するという場だけではなくて、ここに複数の集団というものが居住した、複数の集団としてつくられたムラだったと思われます。

この小松の人々というのは、西や東の人々と一緒にそういう交流をして、そしてまた各地へと、その情報を広げていくといった本当に広域な場としての意識であったと思われます。この八日市地方遺跡がつくられた要因は、今赤澤先生のお話にありました潟湖です。潟湖があるということは資源にも恵まれていると、潟には動物が集い、小松には碧玉の資源にもなる露頭となる石もある。そして港の意味も持つという。

そういう水運、そして資源にも恵まれた梯川、加賀三湖を持ち、陸路として東海とのつながりも持つという。こういう小松の交通の要衝というものが、弥生時代の北陸における拠点を小松につくったのだと思われます。

○望月

今の総括にもありました八日市地方遺跡の実像というものが、少し見えて

座談会 八日市地方遺跡の役割について

きたのではないかと思います。それが小松の地につくられたということを、現在を生きる我々は考え、後世へ伝えていかなければならない。そのように思います。

また、八日市地方遺跡は、未だ地下に眠っている部分を残す遺跡です。発掘調査後に破壊された部分も多くありますが、まだ手つかずで残っている区域があります。今年度調査を行いました遺跡において、マスコミ報道にもありました。これまでの調査では発見されていない新たな絵画土器が出土しています。まだまだ重要な発見が地下に眠っている。そのような予感を強く感じさせる、本当に魅力ある遺跡です。

そのような遺跡を、我々埋蔵文化財保護行政に携わる者は、保護していくしかありませんし、市民の皆さんにも協力していただき、小松の宝を全国の宝にしていきたいと思っております。

本日は質問用紙をたくさん寄せていただきましたが、なかなか取り上げることができませんでした。ご容赦ください。また、会場には多くの考古学の先生方がお越しになっております。本来であれば、先生方に総評をいただき、より八日市地方遺跡の評価を高めることができます。時間がなく、それも割愛させていただきました。申し訳ございません。ご了承ください。

3回にわたって開催してまいりました八日市地方遺跡出土品の県指定記念特別事業、このフォーラムをもちまして終了とさせていただきます。

○司会

ありがとうございました。これをもちまして、第19回まいぶん講座フォーラム「弥生時代の西と東」を終了させていただきます。パネラーの先生の皆さま、本当に長時間ありがとうございました。いま一度盛大な拍手をお願いいたします。

今日お集まりいただきました皆さま、遠方からのお客さまも多いようでございます。お帰りの際、充分お気をつけてお帰りください。

どうもありがとうございました。(終了)

挿図一覧

成果報告1 第17回まいぶん講座

第1回 八日市地方遺跡県文化財指定記念特別講演会 「弥生環濠集落はとはなにか」

安藤広道 1990「弥生時代集落群の構成」「調査研究集録」8 横浜市埋蔵文化財センター

石川県かほく市教育委員会 2005「鉢伏茶臼山遺跡(II)」埋蔵文化財分布調査報告書

池上曾根遺跡史跡指定20周年記念事業実施委員会 1996「弥生の環濠と巨大神殿」

川崎雅史ほか 2002「堅田遺跡」御坊市教育委員会

湖南省考古研究所 2006「彭頭山与八十とう」科学出版社

酒井仁夫 1984「葛川遺跡」菊田町教育委員会

佐賀県教育委員会 1994「吉野ヶ里遺跡」吉川弘文館

下條信行 1986「弥生時代の九州」「岩波講座 日本書紀学」5

下城正・女屋和志雄ほか 1988「三ツ寺1号遺跡」群馬県埋蔵文化財事業団

白川静 1994「普及版『土統』」平凡社

武井剛道 1991「大塚遺跡—弥生時代環濠集落の発掘調査報告1 遺構編」横浜市埋蔵文化財センター

新潟県教育委員会 2000「裏山遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集

福岡県飯塚市立岩遺跡調査委員会(岡崎敏ほか) 1977「立岩遺跡」河出書房新社

藤田三郎 2002「奈良県における弥生拠点集落」「北陸における弥生都市一小松市八日市地方遺跡を検証する—」フォーラム成果報告書 小松市教育委員会

宮本一夫 2005「中国の歴史01 神話から歴史へ」講談社

山崎純男 1979「福岡市板付遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書49

成果報告2 第18回まいぶん講座

第2回 八日市地方遺跡県文化財指定記念特別講演会 「弥生時代の祭りの伝統」

金闇 惣 2004「弥生時代の祭りの伝統」(株)学生社

滋賀県立安土城考古博物館 1995「弥生の祈り人—よみがえる農耕祭祀—」

成果報告3 八日市地方遺跡県文化財指定記念フォーラム 「弥生時代の西と東」

報告1 福井県における弥生時代の集落様相 赤澤徳明

福井県教育府理蔵文化財調査センター 1986「吉河遺跡発掘調査概報」

福井県教育府理蔵文化財調査センター 1988「下屋敷遺跡 善江十葉遺跡」

福井県教育府理蔵文化財調査センター 1991「平成5年度 年報9」

福井県教育府埋蔵文化財調査センター 2006「第21回福井県発掘調査報告会資料—平成17年度に発掘調査された遺跡ー」

報告2 新潟県における弥生時代の拠点集落の変遷—上越地域を中心として—

新井市教育委員会 2005「妻太歴史の里確認調査報告書1」妻太歴史の里調査報告書 第3集

渡澤正史 2008「吹上遺跡の玉作りと人と物の交流」「ヌカワヒヒスイー講演録ー」

ヒスイ文化フォーラム 2007「糸魚川市

渡澤浩 2004「第3章弥生文化と農耕社会」「上越市史通史編1」上越市総務部公文書館準備室

上越市教育委員会 2006「吹上遺跡」

上越市教育委員会 2008「釜蓋遺跡範囲確認調査報告書」

新潟県教育委員会 1979「下谷地遺跡」北陸自動車道 埋蔵文化財発掘調査報告書

新潟県教育委員会 2000「裏山遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書 第96集

新潟県中郷村教育委員会 1996「龍峰遺跡発掘調査報告書1 遺構編」

報告3 石川における弥生時代の拠点集落について

小松市教育委員会 2003「八日市地方遺跡1」

小松市教育委員会 2007「八日市地方遺跡—地中から今、弥生時代が甦るー」

安 英樹 2002「北陸の弥生集落概観」「北陸における弥生都市一小松市八日市地方遺跡を検証するー」フォーラム成果報告書

資料編



土製品（第1図1～3）

1 土器（1～3）

1は、ほぼ完形の細頸壺である。内外面ハケ調整の後、外面は頸部から体部にかけてナデ消した後、5本一組の櫛状工具で左回りに直線文、波状文が施されている。最下段の直線文は、角度が急なためか3本のみ確認できる。櫛描施文後、口縁端部横方向、頸部から底部にかけて縱方向のミガキ調整が施されている。なお、体部下半にはほぼ円形の焼成後穿孔がみられる。現場の状況では、穿孔片が土器内でみつかっていることや、口縁片がすこし離れたところからみつかることから、墓に供獻時に破碎されたものと思われる。時期は集落3期に相当する。2は東海系細頸壺である。色調は黒色を呈し、胎土も在地のものとは異なるため、搬入品と考えられる。櫛描施文具は当遺跡に主体的なやや太めの管状の結束工具ではなく、細かい線状のものである。尾張地方の所産と石黒立人氏にご教授を受けている。時期は集落2期に相当する。3はII系（条痕文系）を受け継ぐ櫛描文土器、大型の受口壺である。頸部までしか残存しない。破損後補修して使用した痕跡がみられる。補修孔には樹皮製の緊縛紐がみられ、また接合面には一部接着剤が残る。時期は集落2期に相当する。

2 土製品（4）

4は耳栓と考えられる。断面形状は臼形を呈し、両側中央に突出部をもつ。表面に赤漆と思われる塗料が残存しており、おそらく全面に塗布されていたのであろう。時期は集落1期に相当する。

石器（第2図～第13図 5～48）

1 磨製石斧類（5～18）

5・6は磨製石斧未成品である。長大な円礫の礫面を剥離により取り除く工程初期段階の資料である。7～10は、大型蛤刃石斧である。4点とも折損歴があり、刃部再生が施され、8がこの途上の資料である。11～14は、折れた大型蛤刃石斧身部の転用例であり、いずれも叩石または錐石である。

12はさらに再加工により石錘に転用されている。15は大型蛤刃石斧の刃先の破片であり、刃部に使用痕が顕著である。石材は信州産と思われる。16～18は、形態的には扁平片刃石斧である。用途を反映してか、寸法は様々である。

2 石鎚（19～24）・石鎌（48）

19～24は、大型の円礫を剥離した横長の礫端片を素材とする石鎚である。22～24は、礫端片をさらに割って粗成形している。二次加工は原則として身部側辺のみで、ベッキングにより辺を潰す。刃部は辺をそのまま利用するが、19・21は再生加工が施されている。

48は、石材の節理を利用して得た板状の素材を加工した石鎌である。図の「B」と表示した箇所が刃部で両面加工が施されるが、ほかはベッキングにより辺を潰している。基部は着柄を考慮してか、予め片面を大きく剥離して辺を薄くしている。使用痕は認められず、身部中央に打ち込みと擦り切りを併用して折断を試みた痕跡がある。

3 石鎌（25～32）・石錐（33・34）・磨製石剣（35）

25～32は、打製石鎌の当遺跡における稀少例である。25～27は長身大型、28は柳葉形で、ともに優品で目立つ資料である。29は側辺がえぐれる形態の凸基（尖基）型、30・31は有茎型、32は肩部が突起する五角形である。

石錐は、製作法として身部に両面加工を施したものに限定した分類としている。32は身部を細らせた例で、34は身部を尖らせた例である。

35は珪化木製の磨製石剣である。基部は両側辺に擦り切りによる抉りを作出し、明らかな傾きがある。両端に折損があり、先端の折損部はベッキングにより中央に抉りを作出している。

4 その他の剥片石器（36～47）

不定形な剥片石器として、当遺跡では碧玉質岩を多用するが、36～45は、この中で最も多い穿孔具としての使用例である。36は製玉工程品の角を利用した例で、37～40も同様に厚手の剥片の角を利用している。対して、41～44は薄手の剥片の角を利用した例で、43は2箇所に使用痕がある。

資料編

45は剥片の右側を片面加工で細らせた例だが、使用痕は明瞭でない。46・47は、紫水晶の結晶を折り取って穿孔具として利用した例であり、先端部に使用痕が認められる。

製玉・玉類（第13図 49～63）

1 製玉（49～58）

49・50は、既報告資料中で「奈良岡第一技法類似」とした例の追加資料である。49は剥片の背腹両面をある程度研磨して両面施溝した工程品で、側面も施溝している。50も同様に両面施溝して分割された例だが、打面転移があり、素材は必ずしも剥片でない。51は施溝折断された管玉未成品で、両側穿孔で貫通したものを折断している。3例とも石材は硬質だが、51のみ風化したような質感である。52～56は黒色安山岩製の磨製石針である。先端形状は、54を除いて中央に半球状の凹みがある。54の先端は円周状に削れて突起が形成される。極端に短い2例は、55は片側を削り、56は両側に使用痕がある。57・58はメノウ製の磨製石針であり、当遺跡では稀少例である。

2 玉類（59～63）

59は、硬玉製の小玉である。あるいは小型の丸玉か。60～63は、ガラス製の小玉である。61・63は巻き取り、ほかは鋳込みにより製作されたと考えられる。中村晋也氏の協力による蛍光X線分析結果では、ガラスは4例とも成分的に鉛ガラスの可能性が高いとされ、出土状況等を考慮すれば弥生時代の資料の可能性は低いが、判定のためには、より高精度の分析が必要とのご教示を得た。

木製品（第14図～第32図 64～103）

1 農具（64～66）

64は曲柄鍬身いわゆるナスピ形である。木器集成図録分類D IIにあたり、八日市地方遺跡I内掲載（85・86）曲柄鍬未成品の完成品にあたると考えられる。現状は身半分欠損しているが、中央には三角形状の透かしがあるこ

とがわかる。時期は集落2～3期に相当する。65は直柄横鍬いわゆるエブリと考えられる。2つの方形のほぞ穴がみられ、Y字状の柄がつくものと思われる。考古資料大観掲載の韓国・良将里遺跡出土木製品エブリや滋賀県松原内湖遺跡出土エブリに類似する。時期は集落3期に相当する。66は田舟または大型の槽であると考えられるが、1mを超えることから田舟として分類している。一本削りぬきで横木取りで作られている。半分欠損するものの、形状が復元できる好資料である。時期は集落3期に相当する。

2 祭祀具（67～72）

67は武器形木製品と思われる。刃部形状は先端が欠損するが、反しの付く鉤状を呈している。柄部は断面が半円状であり、欠損するものの細くなりつつあることからさほど伸びないものと思われる。断面形状及び緊縛紐が残存することから、反し側に別部材との装着が予想される。68は刀子形木製品と思われる。当初、柄が握りやすく成形されていることや、当遺跡出土武器形木製品はほぼ平面形であることから工具柄との想定もしたが、林氏のご教授から形代として扱うこととした。刃部及び握り部はほぼ同じ長さに作られている。大阪府鬼虎川遺跡出土刀形木製品に形状・寸法ともに類似するものである。樹種は未鑑定のため不明であるが、おそらく針葉樹であると思われる。69は武器形木製品と思われる。刃部形状は槍状を呈し、断面は丸い。柄部は断面半円状を呈し、8mm程度の円形の穴が2つあいており、別部材との装着が予想される。樹種同定は行っていないが、おそらく広葉樹と思われる。70～72は線刻板である。70は区割線をもうけた後、斜めに線をいれることで矢羽状の文様が描かれている。71は不明瞭な線があるものの、中央部から細くなる方につれ、線鋸歯文が描かれていることが確認できる。両者とも非常に細く薄い線である。72は重区画文が描かれており、木目を利用し、縦の筋は引かれている。3点とも樹種同定は行っていないが、針葉樹と思われる。73はヒョウタンで表面に赤色顔料を塗布した後、被熱により重区画文が施されている。愛知県春日井市松河戸遺跡に類例があげられる。時期は69・70・72・73は集落1期、71は集落2期に相当し、それ以外は弥生時代中期以上の細分は不明である。

3 服飾具（74・75）

74は、かんざしである。髪にさし込む側にいくにつれ、断面が円状を呈し先端は尖る。非常に精巧に作られており、骨製かんざしに類似した鋸歯状の装飾がみられる。75は形状から儀仗としたが受け材である可能性もある。

4 容器・食事具（76～91）

76～79はいずれも優品である。76は、口縁部分が欠損するものの。木目が装飾にもみえ、台の作り出しも薄く精巧に作られている。77・79は透かし高台のつく蓋付容器で、77は梢円状になるものと思われ、79は方形を呈す。77は底の外側には2条の突帯が削り出されており、類例として青谷上寺地遺跡桶形容器があげられる。^{あおや}_{かみじち}78は脚と一部の身が残る。二脚のうち一脚のみ残存、身は立ち上がりの様子からさほど伸びず皿状になると思われる。透かし孔の数は異なるが、類例として山口県宮ヶ久保遺跡出土の脚付容器が想定される。80～83は容器の未成品である。80は小ぶりながらも高さがあり、樹種もヤマグワであることから、透かし高台付容器の未成品になる可能性が高い。81は心持ちの容器の未成品である。把手部分は二股枝部分を利用して加工している。84・85は粗製の槽である。84は柾目板を方形に削りぬき成形している。身中央に炭化がみられるが、成形時かは不明である。85は、底部から広がりながら立ち上がる端辺は欠損する。樹種同定は行っていないが、おそらくスギと思われる。86は有孔板である。取り上げ時には、緊縛用の樹皮紐2本が穴に付いていたが、水漬け保管時に元位置から離れてしまい図化していない。おそらく、凸側が内側になる桶形容器の底になるものと思われる。87は例物の桶である。4分の1程度の残存であるが、当遺跡では稀少のため報告する。蓋と合わせ用の紐孔がみられ、おそらく両端につくであろう。底板をとめる目釘孔等確認はできなかった。樹種同定は行っていないが、おそらくスギと思われる。88は粗製の縦杓子である。当遺跡から出土するケヤキやヤマグワで作られるものと比べると雑な作りである。89・90は筒形容器である。半円状を呈し組み合わせて使用したと考えられる。身の外側には、3か所の帯状の浅い彫りこみがあり、樹皮等で緊縛することにより、円柱状の容器になると思われる。なお、89、90

は同遺構から出土しており、90は残りが悪いが、対になる部材と考えられ、そうすると、両方とも水平な口縁になるものと思われる。91は、長方形土坑もしくは、方形周溝墓の1辺かと思われるところから、組み合った状態でみつかっているが、緊縛紐は残存しない。一部材ずつ図化したため、配置図を付記した。配置図は見込みから広げた状態で並べたものである。側板と底板は3箇所、小口と底板は2箇所で固定されている。側板と小口の固定は、側板側に3箇所、2つずつ穴がみられるため、小口を2つの穴中央に固定するようになっている。また、側板及び小口上方の穴があるため、蓋板がつくものと思われる。側板穴近くにみえる後は、埋納時に付いた痕跡で、箱の組合せに係る痕跡ではない。なお、この部材は、木取り・切断面等から、一枚板を区割り切断し、部材にしていることが確認できた。

木取りは、75・81・87・88を除きすべて横木取りである。時期は、81・82が集落1期、78・79・84・86・88・90・91は集落2期、80・83は集落3期、87は層位から弥生後期前半の可能性が高い。その他は弥生中期である以上の細分は不明である。

5 その他 (92~103)

92・93は枠である。当初、92は小弓の可能性も考えたが、当遺跡の枠の形態を観察したところ、輪にする際、端を重ねて緊縛するため、両者の面は、水平な面をもつ側が表裏異なるよう加工してある。92も同様であるため、小型の枠であろうと思われる。92は樹種同定は行ってないが、イヌガヤもしくはカヤと思われる。

94は竿受けである。片側を平らに加工しており、別部材と3箇所で緊縛するものと思われる。樹種同定は行っていないが、広葉樹であると思われる。

95は自在鉤である。股木を利用して、一方は鉤状に、一方の端は有頭状にすることで紐掛け部分を作り出している。一部表皮が残存する。

96は用途不明である。断面が円形を呈する箇所が10cm程度柄部と思われ箇所があり、それより上は二股側を平らにし3箇所の浅い彫りこみがあることから、別部材を結合し固定できるよう成形されている。

97は、かせの部材である。対になる同一部材を工字形に軸で設け、糸をか

けるものとされている。ただ、腕木に糸をからめた痕跡は確認できないため、糸のかけ方としては、形状がまっすぐではなく弓なりにやや反ることや、腕木両端が有頭状であることから、そこに紐をかけ、張った箇所に糸をかけたのではないかと想像する。寸法、形状等類似するものが兵庫県玉津田中遺跡、愛知県朝日遺跡あさひにみられる。樹種同定は行っていないが、針葉樹と思われる。

98・99は用途不明である。98は、断面円形であり、樹皮が多条に巻かれている。上方には対の抉りがあり、内側は削りぬかれていることから、別部材が挿入するものと思われる。剣把か。99は2.7cmの厚みをもち、残存する傾きから、外径7cm、内径5cm程度に円形状の輪に復元できる。外側表面には赤色顔料が塗布されており精製品である。立ち上がり部分が欠損し形状は不明瞭である。腕輪か。

100～102は八日市地方遺跡Ⅰ報告内で組合せ釘に分類されているものである。樹種同定は行っていないが、スギと思われる。100は先端とがるタイプではないが、穴をあけ別部材と組み合わせる類として同類に扱った。101は棒状の部材が装着した状態で被熱を受け、密着部分が炭化せず生焼けである。102は当遺跡ではもっとも小型である。別部材が装着する側は浅く彫りこまれている。

103は一木作りの腰かけである。座る個所にあたる中央は浅くくぼむ。樹種同定は行っていないが、針葉樹おそらくスギであると思われる。

時期は、98、99、102、103は集落2期、94、96、101は集落3期、それ以外は弥生中期である以上の細分は不明である。

骨製品（第33図103～105）

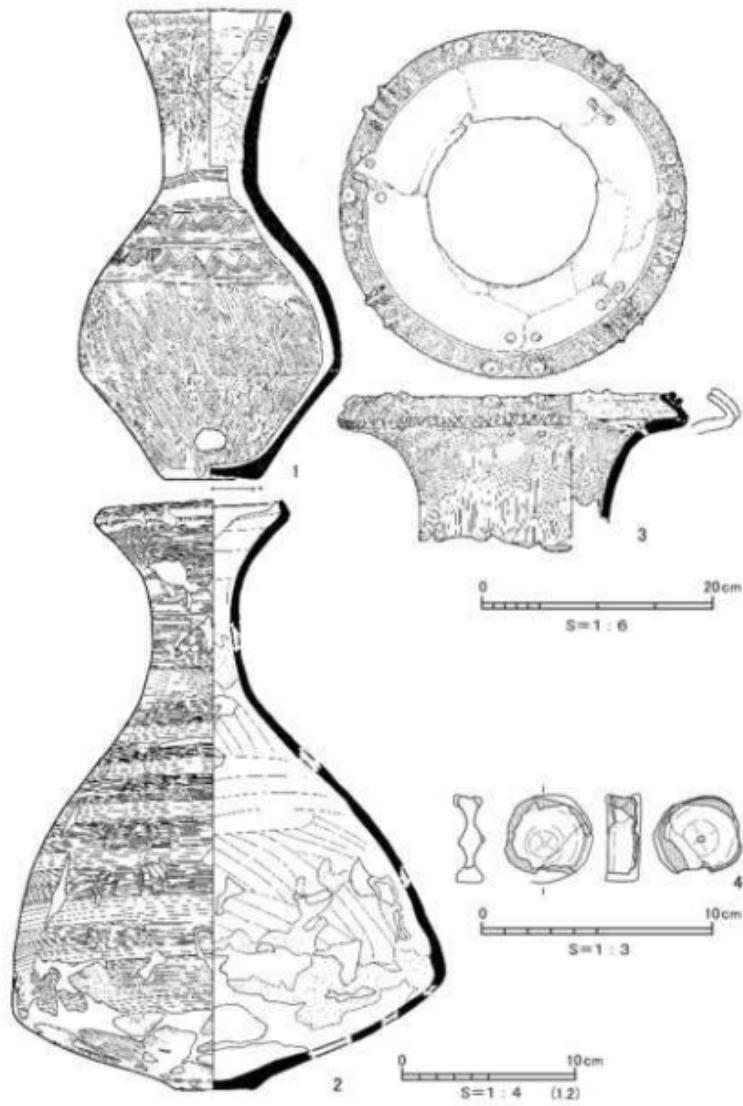
103は骨製の紡錘車である。中央に片側から孔が穿たれている。近くに仕損じた未貫通の孔がみられる。104、105は八日市地方遺跡Ⅰ内で、報告されているものである。104は図版10の23、105は図版10の22に該当する。その際、実測図を掲載していなかったため、本書で実測図を付記するものである。詳細は報告書を参照されたい。

備考								
番号	整理番号	器種	類型・名稱	長・高	幅	厚	遺構名	
1	287	壺		21.3 cm	15.0 cm		万形壺蓋部周溝内	口径：9.0 cm 深さ：5.4 cm 体側に焼成後穿孔あり
2	S-07	壺		34.0 cm	25.0 cm		土坑	口径：10.3 cm 深さ：4.5 cm 東海系細頸壺瓶入品
3	S-36	壺		14.0 cm	30.0 cm		環縫	口径：25.8 cm 補修孔・緊縛縫現存
4		耳鉢		3.7 cm	(3.1)cm	1.3 cm	埋植	全面に赤色顔料塗布
5	3998	両刃石斧	未成品	16.2 cm	7.1 cm	5.3 cm	平地式性層周溝内	重量：848.1g 完成砂岩
6	7934	両刃石斧	未成品	19.3 cm	7.3 cm	6.4 cm	埋植浅谷	重量：1277.1g テイサイト
7	2582	両刃石斧	大型始刃	14.4 cm	6.3 cm	4.1 cm	万形壺蓋部周溝内	重量：581.8g 安山岩
8	10420	両刃石斧	大型始刃	(14.8)cm	6.6 cm	4.8 cm	埋植浅谷	重量：783.5g 安山岩
9	10238	両刃石斧	大型始刃	10.0 cm	6.2 cm	3.6 cm	埋植浅谷	重量：398.5g 完成砂岩
10	10404	両刃石斧	大型始刃	10.8 cm	5.3 cm	3.3 cm	土坑	重量：306.4g 完成頁岩
11	10407	両刃石斧	大型始刃	—	6.4 cm	4.0 cm	包含層	重量：447.4g 完成砂岩 命石に転用
12	22603	両刃石斧	大型始刃	10.8 cm	6.9 cm	4.2 cm	包含層	重量：576.6g ブロブライト 命石に転用石錐に再加工
13	2292	両刃石斧	大型始刃	11.5 cm	6.8 cm	5.2 cm	土坑	重量：719.5g ブロブライト 命石に転用
14	2994	両刃石斧	大型始刃	10.3 cm	7.1 cm	4.2 cm	土坑	重量：607.2g 完成頁岩 命石に転用
15	23490	両刃石斧	大型始刃	—	—	—	包含層	重量：2342.2g 四面削岩（信州産石材）刃部後片
16	25500	片刃石斧	扁平	6.8 cm	3.8 cm	1.2 cm	土坑	重量：62.7g 完成頁岩
17	27120	片刃石斧	小型扁平	3.7 cm	1.5 cm	0.5 cm	万形壺蓋部周溝内	重量：3.77g 錠灰質砂岩
18	5261	片刃石斧	小型扁平	2.2 cm	0.9 cm	0.5 cm	包含層	重量：1.41g 錠頁岩
19	2203	石鏃		18.8 cm	10.9 cm	3.0 cm	埋植浅谷	重量：615.9g 火山帶凝灰岩
20	3801	石鏃		19.3 cm	10.3 cm	2.8 cm	包含層	重量：573.4g 安山岩
21	7765	石鏃		19.5 cm	11.5 cm	2.8 cm	環縫	重量：757.1g 安山岩
22	2554	石鏃		—	—	—	埋植浅谷	重量：438.9g 安山岩
23	20581	石鏃		20.6 cm	11.4 cm	2.9 cm	土坑	重量：594.4g 火山帶凝灰岩
24	6675	石鏃		(14.6)cm	9.1 cm	2.8 cm	埋植浅谷	重量：455.5g 玻璃質岩
25	2975	打製石鏃	長身大型	7.3 cm	1.8 cm	0.5 cm	包含層	重量：550.6 黑色安山岩
26	2976	打製石鏃	長身大型	(5.4)cm	1.4 cm	0.5 cm	土坑	重量：4.00g 黑色安山岩

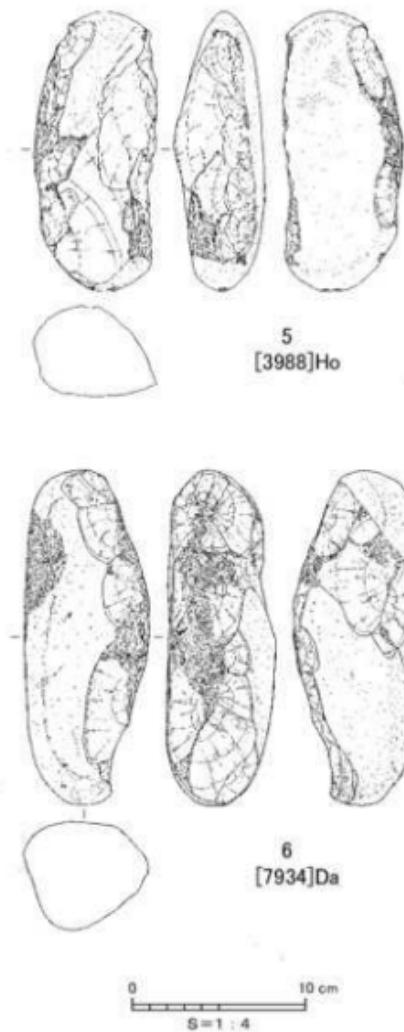
番号	整理番号	器種	類型・名稱	長・高	幅	厚	遺構名	備考
27	3088	打製石器	長身大型	(5.9)cm	1.3 cm	0.5 cm	包含層	重量 - 4.67g 黑色安山岩
28	6270	打製石器	柳葉形	5.2 cm	1.7 cm	0.5 cm	包含層	重量 - 3.69g 黑色安山岩
29	3062	打製石器	心基型	4.7 cm	1.3 cm	0.5 cm	埋積淺谷	重量 - 2.45g 黑色頁岩
30	7625	打製石器	有茎型	(4.3)cm	1.6 cm	0.9 cm	土坑	重量 - 4.98g 玻璃質浮子サイト
31	23002	打製石器	有茎型	3.3 cm	1.3 cm	0.5 cm	土坑	重量 - 1.27g 玉質岩
32	3151	打製石器	五角形	3.0 cm	2.5 cm	0.5 cm	土坑	重量 - 2.79g 流紋岩
33	7340	石錐		4.3 cm	2.0 cm	0.5 cm	包含層	重量 - 2.27g 黑色安山岩
34	7990	石錐		2.8 cm	1.4 cm	0.5 cm	(不明)	重量 - 1.42g 黑色頁岩
35	21144	磨製石劍		17.9 cm	4.8 cm	1.1 cm	土坑	重量 - 116.4g 鈴化木
36	4856	剥片石器	穿孔具	1.7 cm	1.3 cm	0.8 cm	埋積淺谷	重量 - 1.99g 翡翠質岩
37	9353	剥片石器	穿孔具	2.4 cm	1.2 cm	0.8 cm	埋積淺谷	重量 - 2.30g 翡翠質岩
38	20132	剥片石器	穿孔具	2.1 cm	1.0 cm	0.9 cm	溝狀遺構	重量 - 1.69g 翡翠質岩
39	13436	剥片石器	穿孔具	3.5 cm	1.3 cm	1.0 cm	埋積淺谷	重量 - 3.99g 翡翠質岩
40	22542	剥片石器	穿孔具	3.0 cm	1.9 cm	0.8 cm	土坑	重量 - 4.76g 翡翠質岩
41	3877	剥片石器	穿孔具	2.0 cm	1.3 cm	0.6 cm	土坑	重量 - 1.40g 翡翠質岩
42	16840	剥片石器	穿孔具	2.0 cm	0.9 cm	0.3 cm	包含層	重量 - 0.59g 翡翠質岩
43	4415	剥片石器	穿孔具	1.8 cm	1.8 cm	0.6 cm	埋積淺谷	重量 - 2.20g 翡翠質岩
44	15291	剥片石器	穿孔具	2.4 cm	1.7 cm	0.4 cm	埋積淺谷	重量 - 1.52g 翡翠質岩
45	16930	剥片石器	穿孔具	3.6 cm	1.7 cm	0.7 cm	埋積淺谷	重量 - 5.58g 翡翠質岩
46	11269	剥片石器	穿孔具	5.2 cm	2.0 cm	1.6 cm	(不明)	重量 - 20.88g 紫水晶
47	11114	剥片石器	穿孔具	2.9 cm	1.0 cm	0.9 cm	土坑	重量 - 2.81g 紫水晶
48	23228	石錐		5.7 cm	12.5 cm	1.1 cm	埋積淺谷	重量 - 98.09g 粘板岩
49	32175	製玉工程品	分割片	3.6 cm	4.9 cm	0.7 cm	埋積淺谷	重量 - 18.32g 翡翠質岩 素貝圓第一技法類似
50	46553	製玉工程品	分割片	3.6 cm	0.5 cm	0.4 cm	土坑	重量 - 1.37g 翡翠質岩 素貝圓第一技法類似
51	32052	製玉工程品	折断片	2.0 cm			包含層	重量 - 4.46g 孔徑 - 0.40cm 翡翠質岩 西川津技法類似
52	26987	磨製石針		1.4 cm			土坑	重量 - 0.03g 黑色安山岩
53	8001	磨製石針		1.0 cm			包含層	重量 - 0.02g 黑色安山岩

番号	整理番号	器種	類型・名稱	長・高 幅	厚	遺構名	備考
54	8002	磨製石針		0.8 cm		包含層	重量 : 0.016 黒色安山岩
55	26965	磨製石針		0.4 cm		包含層	重量 : 0.016 黒色安山岩
56	5460	磨製石針		0.3 cm		包含層	重量 : 0.016 黒色安山岩
57	26871	磨製石針		0.6 cm		包含層	重量 : 0.026 黑褐色
58	5461	磨製石針		0.6 cm		包含層	重量 : 0.026 黑褐色
59	2628	小玉		0.2 cm		土坑	重量 : 0.056 孔径 : 0.08cm 硬玉
60	6390	小玉		0.2 cm		包含層	重量 : 0.028 孔径 : 0.14cm 鉛ガラス 銀込み 銀色
61	6391	小玉		0.4 cm		包含層	重量 : 0.108 孔径 : 0.13cm 鉛ガラス 卷き取り 青緑色
62	6392	小玉		0.3 cm		土坑	重量 : 0.068 孔径 : 0.14cm 鉛ガラス 銀込み 白色
63	6393	小玉		0.2 cm		包含層	重量 : 0.068 孔径 : 0.14cm 鉛ガラス 卷き取り 黄色
64	34014	雷柄鏡		(44.0)cm [7.1]cm	1.3 cm (不明)		コナラ属アカガシ亞属
65	23106	えぶり		50.3 cm	6.4 cm	2.4 cm	埋積浅谷
66	32221	田舟		132 cm	{(01.5)cm 4.6 cm	埋積浅谷	短輪幅 : (36.0)cm 2.4
67	33651	武器形		(29.6)cm	4.3 cm	2.1 cm	埋積浅谷
68	32756	工具形		22.8 cm	2.5 cm	2.0 cm	埋積浅谷
69	25372	武器形	楔形	33.5 cm	3.3 cm	3.0 cm	埋積浅谷
70	22499	線刻板	矢羽根状	(37.7)cm	2.7 cm	1.8 cm	埋積浅谷
71	35042	線刻板		(27.8)cm	1.7 cm	0.6 cm	埋積
72	23455	線刻板	重区画	24.4 cm	6.2 cm	1.8 cm	埋積浅谷
73	32322	線刻	重区画	(7.0)cm	[7.0]cm	0.4 cm	埋積浅谷 ひょうたん
74	34604	かんざし		17.4 cm	1.3 cm	0.2 cm	土坑
75	33500	儀仗		(71.9)cm	3.5 cm	2.1 cm	埋積浅谷
76	32329	容器	鉢	(7.8)cm	[6.0]cm	1.4 cm	埋積浅谷
77	32763	容器	鉢	24.4 cm	[11.9]cm	2.6 cm	埋積浅谷
78	32226	容器	皿	(7.4)cm	[16.8]cm	2.3 cm	土坑
79	32229	容器	鉢	14.6 cm	22.0 cm	1.3 cm	埋積
80	32285	容器	合子	13.2 cm	14.8 cm	10.0cm	埋積浅谷
							未成品 ヤマグワ

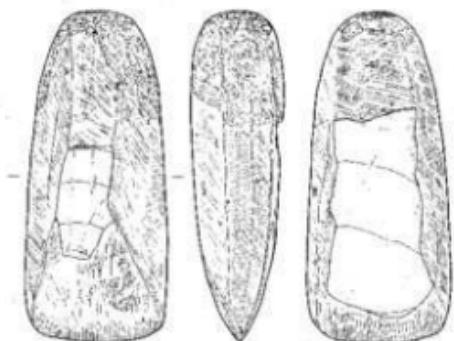
番号	整理番号	器種	型名	長・高	幅	厚	遺構名	備考
81	33280	容器	鉢	10.8 cm	20.6 cm	14.5 cm	埋積浅谷	未成品 ツバキ属
82	32714	容器	鉢	9.8 cm	22.3 cm	18.9 cm	埋積浅谷	未成品 トチノキ
83	23883	容器	合子	19.8 cm	41.7 cm	23.4 cm	埋積浅谷	未成品 ケヤキ
84	34996	容器	桶	5.0 cm	45.6 cm	3.2 cm	埋積浅谷	短輪幅: 20.3 cm スギ
85	33245	容器	桶	7.2 cm	28.3 cm	2.4 cm	埋積浅谷	短輪幅: 17.0 cm 材質不明
86	33240	容器		0.8 cm	11.7 cm		埋積浅谷	短輪幅: 10.3 cm 檜板 2キ
87	33283	容器	桶形	22.2 cm	(5.4)cm	2.9 cm	埋積浅谷	材質不明
88	33275	食事具	鍤杓子	35.5 cm	11.8 cm	10.7 cm	埋深	2キ
89	34738	容器	筒形	4.1 cm	89.9 cm	1.0 cm	埋深	短輪幅: 8.2 cm スギ
90	34737	容器	筒形	(45.9)cm	(2.2)cm	0.7 cm	埋深	2キ
91		容器	箱	8.7 cm	26.1 cm	2.3 cm	土坑	短輪幅: 12.9 cm スギ *計測値は復元値を示す
92	33947	枠		41.3 cm	130.0 cm	0.7 cm	不明	材質不明
93	33265	枠		49.0 cm	40.4 cm	1.3 cm	埋積浅谷	力ヤ
94	23517	平受け		(26.8)cm	(8.4)cm	2.4 cm	埋積浅谷	
95	33386	自在脚		18.0 cm	12.4 cm	2.2 cm	埋積浅谷	マツ属複数管東亜属
96	23869	不明		28.9 cm	3.6 cm	1.8 cm	埋積浅谷	材質不明
97	33708	かせ		58.3 cm	3.3 cm	2.0 cm	埋積浅谷	材質不明
98	21890	不明		(6.3)cm	3.1 cm		埋積浅谷	材質不明
99	32749	不明		(1.8)cm	(5.8)cm	2.7 cm	埋深	ヤマグワ
100	23606	櫛状木製品		33.4 cm	8.2 cm	1.1 cm	埋積浅谷	材質不明
101	8457	櫛状木製品		(28.4)cm	(10.0)cm	1.1 cm	埋積浅谷	材質不明
102	21794	櫛状木製品		(18.1)cm	12.0 cm	1.3 cm	埋積浅谷	材質不明
103	34762	腰かけ		9.3 cm	29.4 cm	4.0 cm	埋深	短輪幅: 19.9 cm 材質不明
104		筋轡車		7.3 cm	7.2 cm	0.9 cm	埋積浅谷	材質不明
105		骨角器		6.5 cm	1.2 cm	0.5 cm	貝層	二心ジカ
106		不明		18.7 cm	5.1 cm	2.7 cm	貝層	クジラ類 鰓糸の切断面有



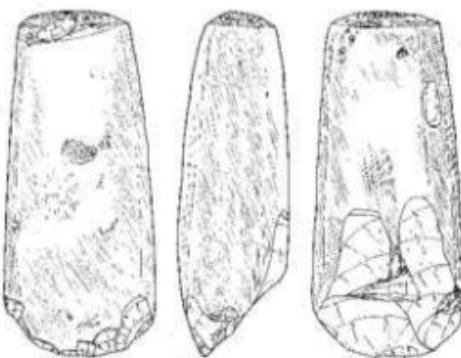
第1図 土製品



第2図 石器 1



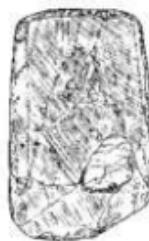
7
[2582]An



8
[10420]An

0 10 cm
S=1:3

第3図 石器2



9
[10238]Ho



10
[10404]Ho

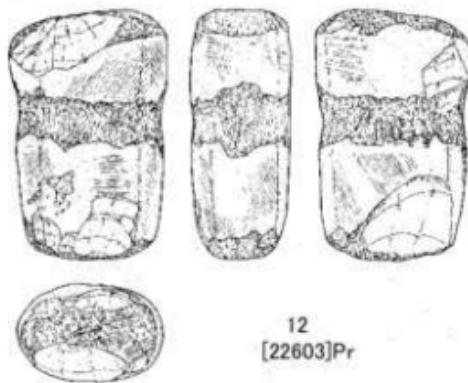


0 10 cm
S=1:3

第4図 石器3

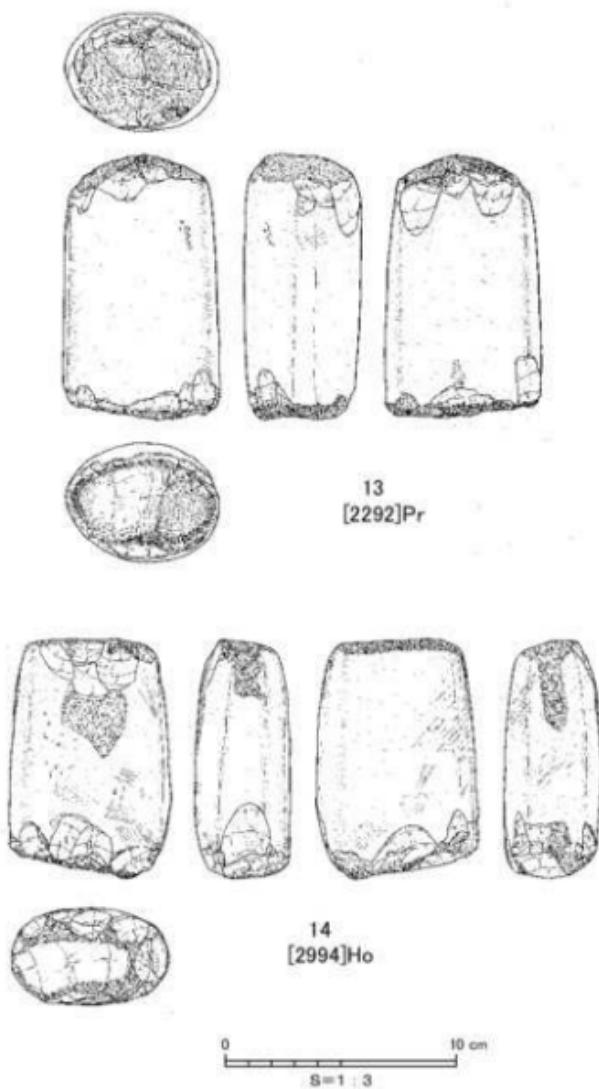


11
[10407]Ho

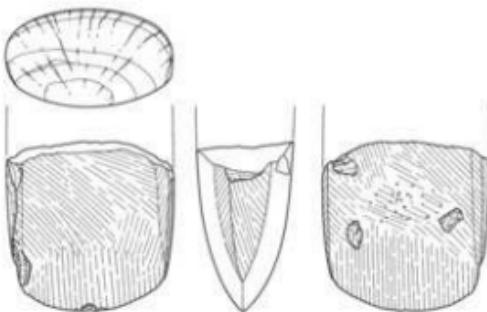


12
[22603]Pr

0 10 cm
S=1:3

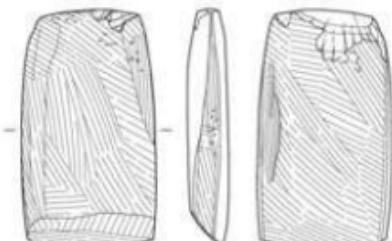


第6図 石器5



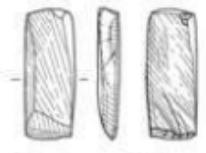
15
[23499]Di

0 10 cm
S=1:3



16
[23500]Ho

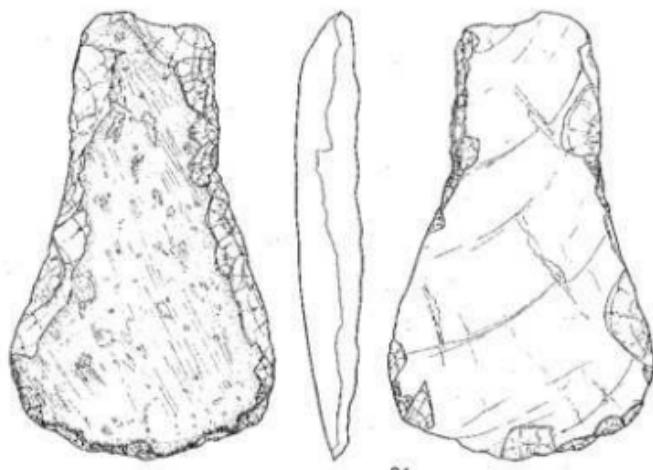
0 5 cm
S=1:2



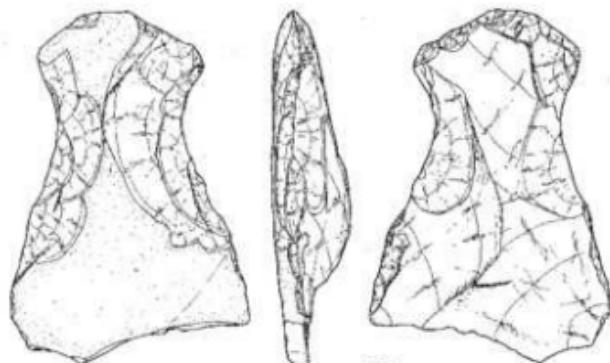
17
[27120]Ts



18
[5261]Ss



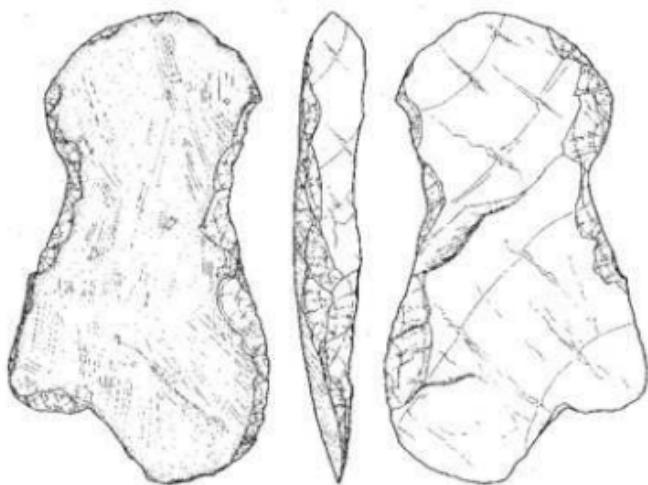
21
[7765]An



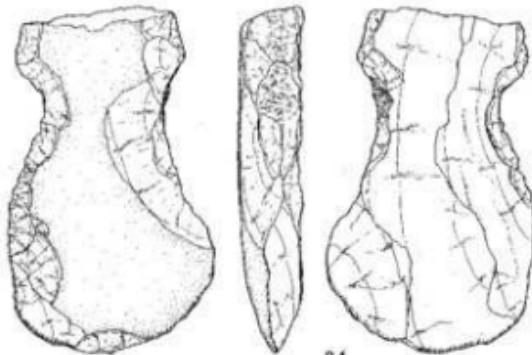
22
[2554]An

0 10 cm
S=1:3

第8図 石器 7

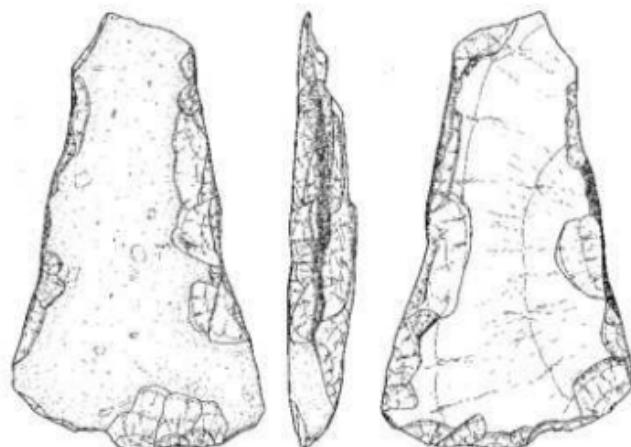


23
[20581]Lt

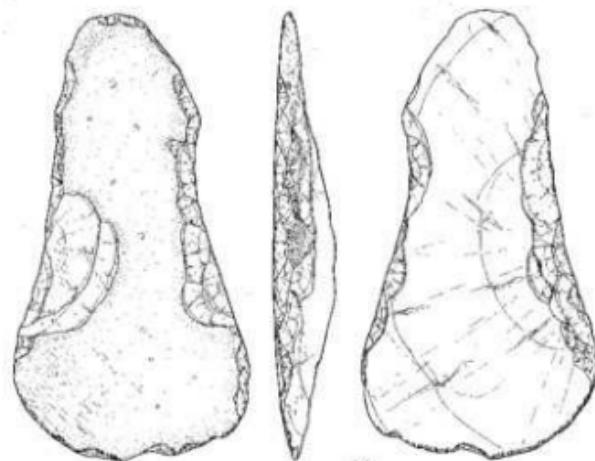


24
[6675]Vi

0 10 cm
S=1 : 3



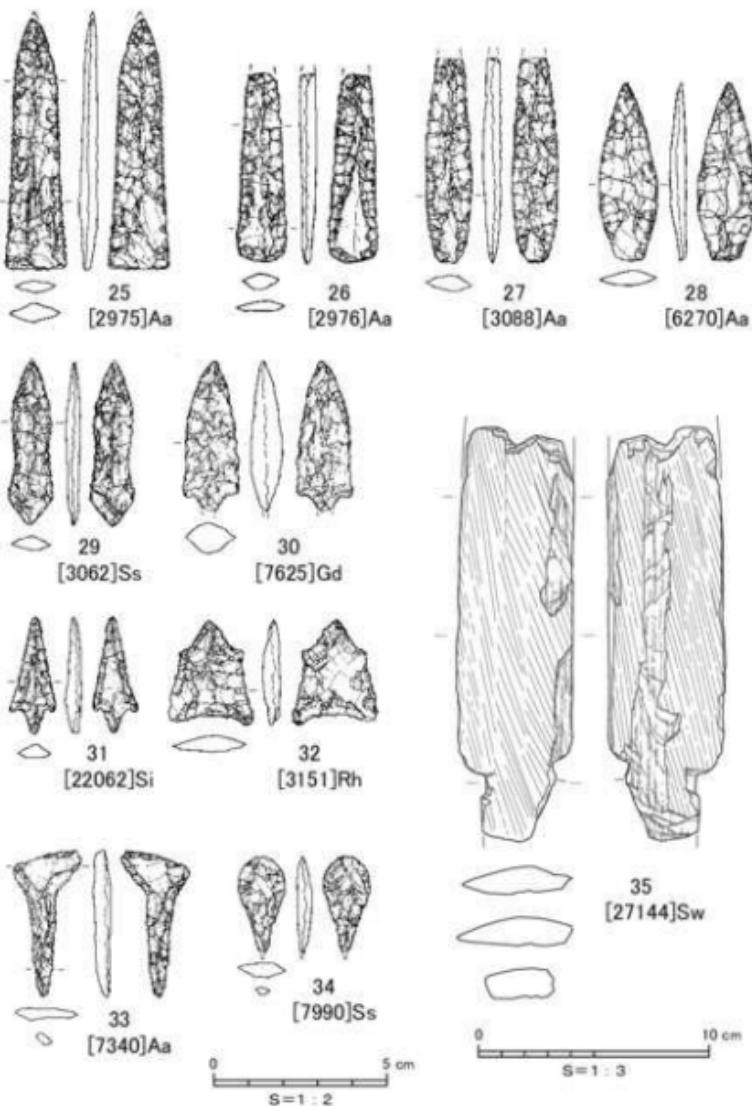
19
[2203]Lt



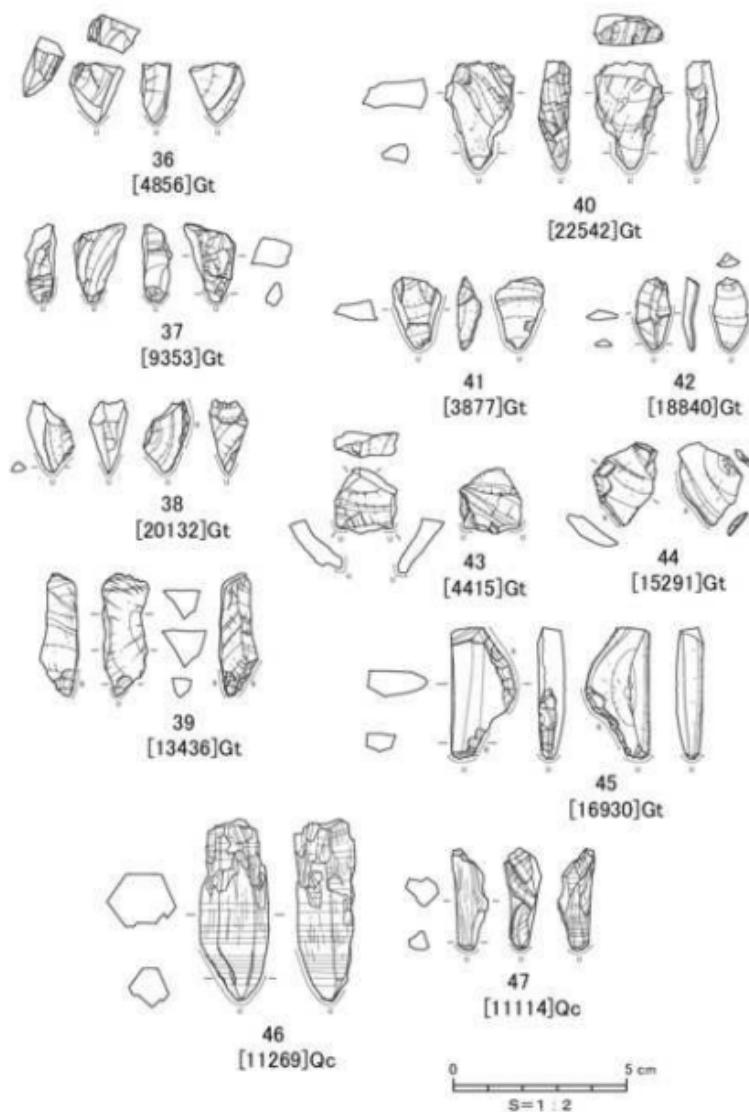
20
[3801]An



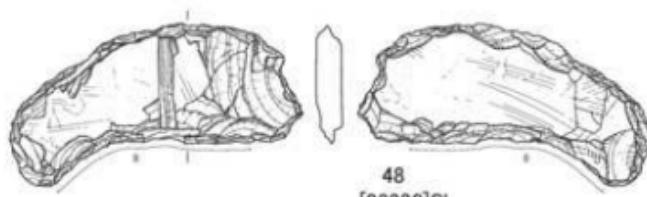
第10図 石器9



第11図 石器10



第12図 石器 11

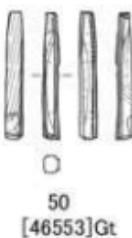
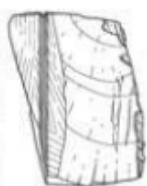


48
[23228]SI

0 10 cm
S=1:3



49
[32175]Gt



50
[46553]Gt



51
[32052]Gt

0 5 cm
S=1:2

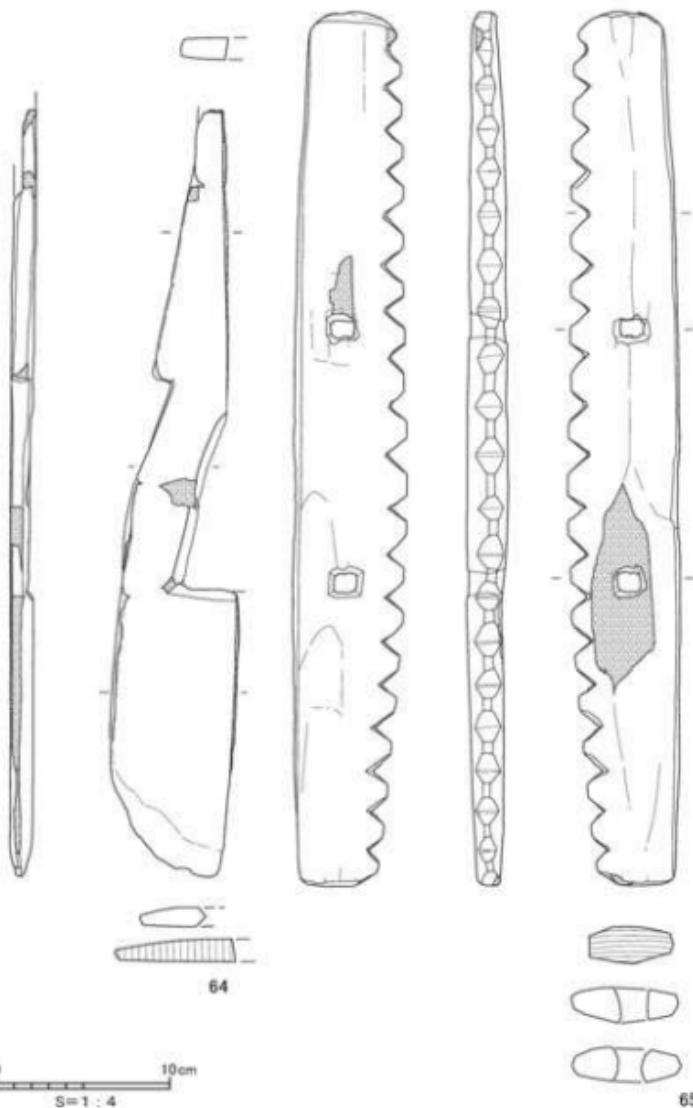


52
[26867]Aa 53
[8001]Aa 54
[8002]Aa 55
[26865]Aa 56
[5460]Aa 57
[26871]Ag 58
[5461]Ag

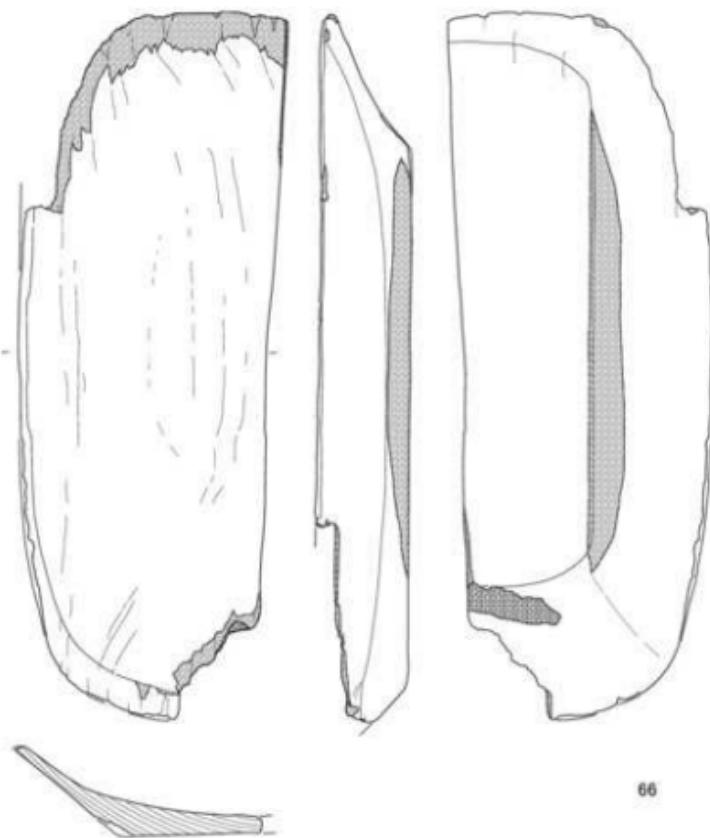


0 2 cm
S=3:2

第13図 石器12 製玉・玉類



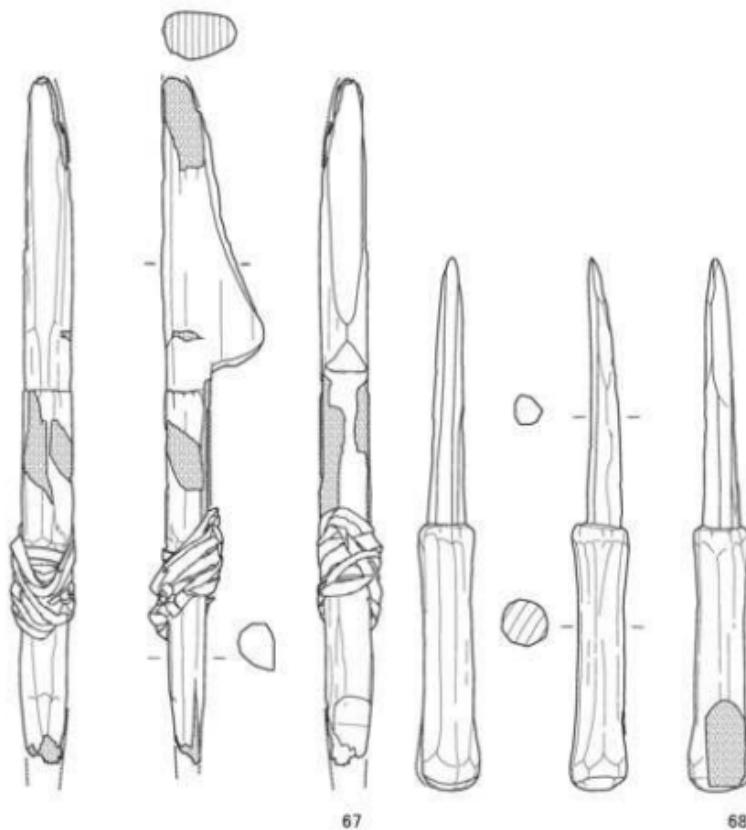
第 14 図 木製品 1



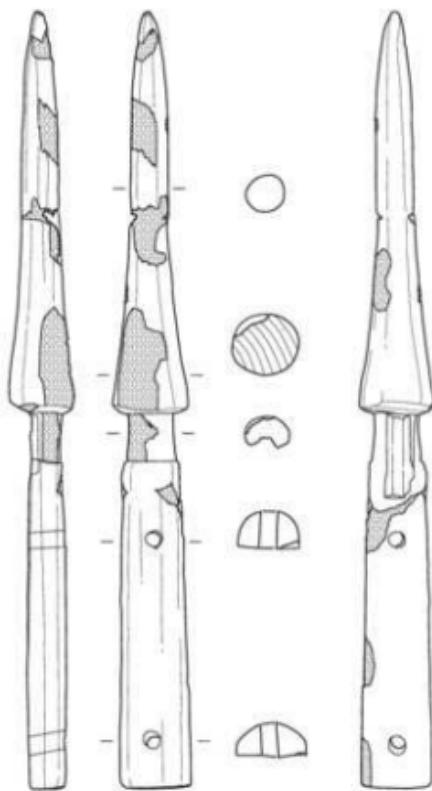
66



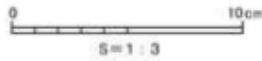
第15図 木製品2



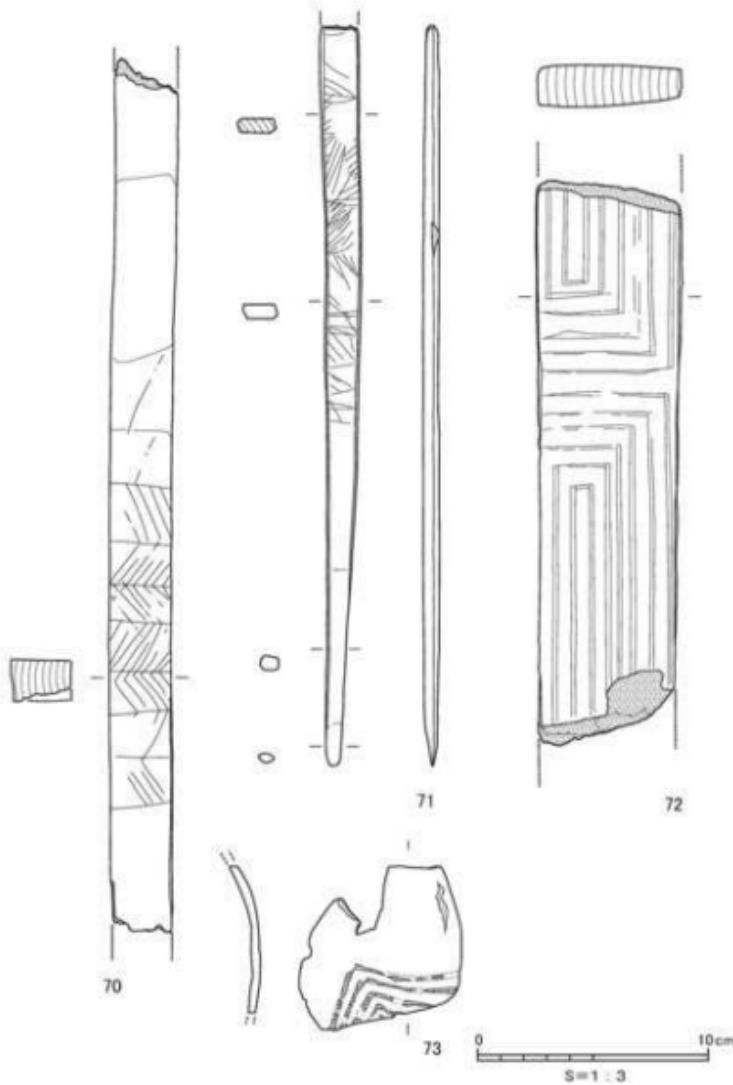
第 16 図 木製品 3



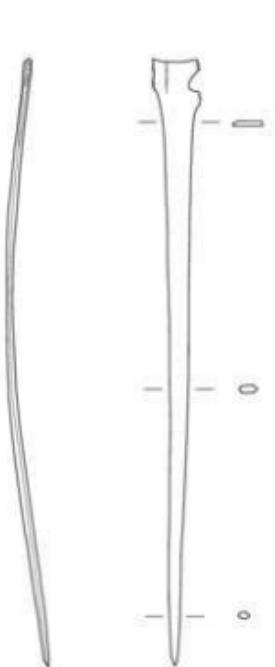
69



第 17 図 木製品 4

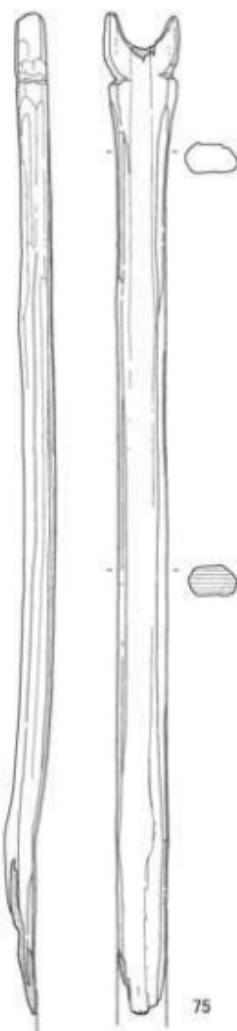


第 18 図 木製品 5



74

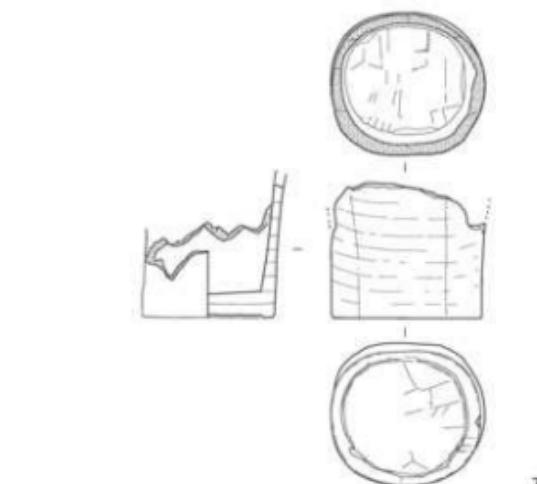
0
5cm
 $S=1:2$



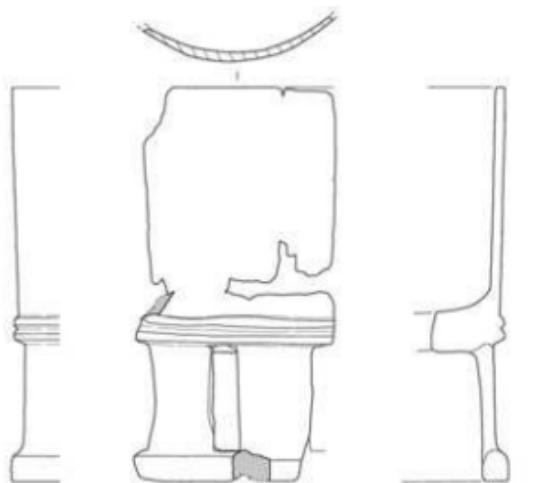
75

0
20cm
 $S=1:5$

第19図 木製品6



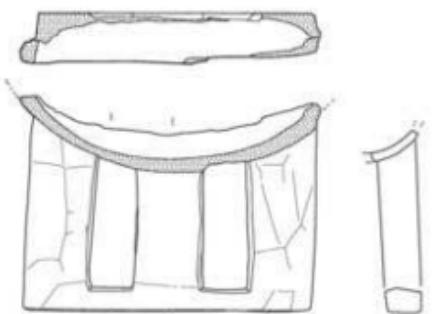
76



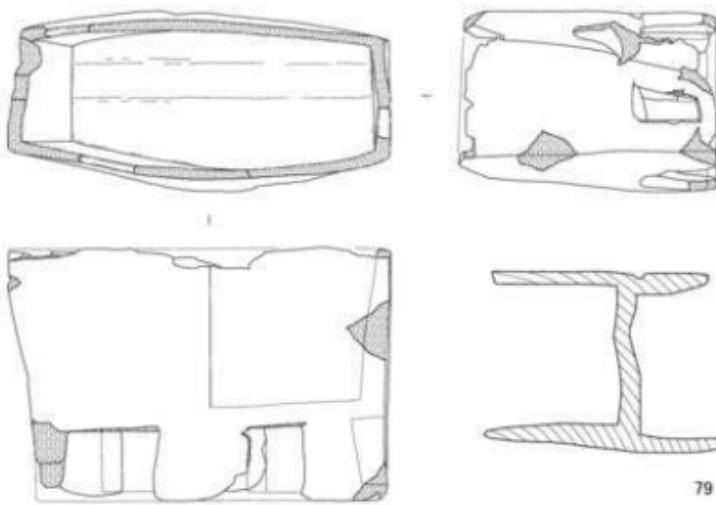
77



第20図 木製品7



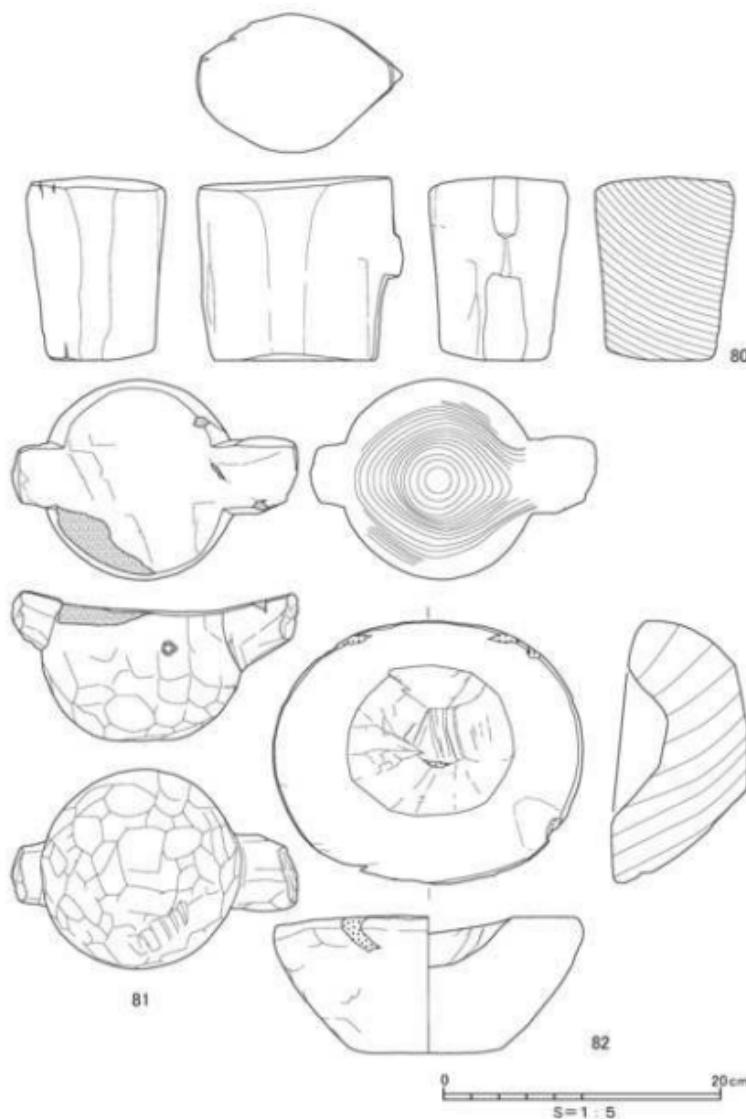
78



79

0 10cm
S=1:4

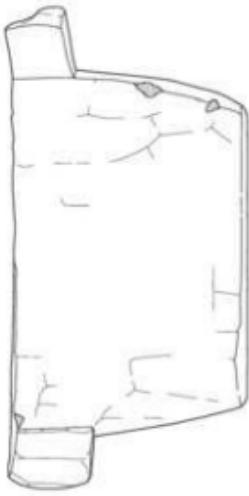
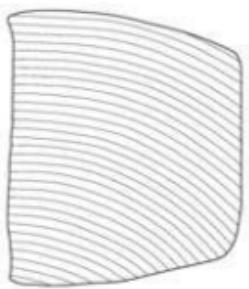
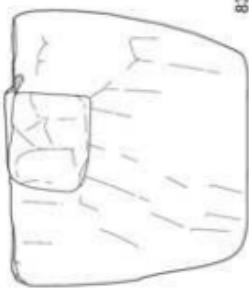
第21図 木製品8



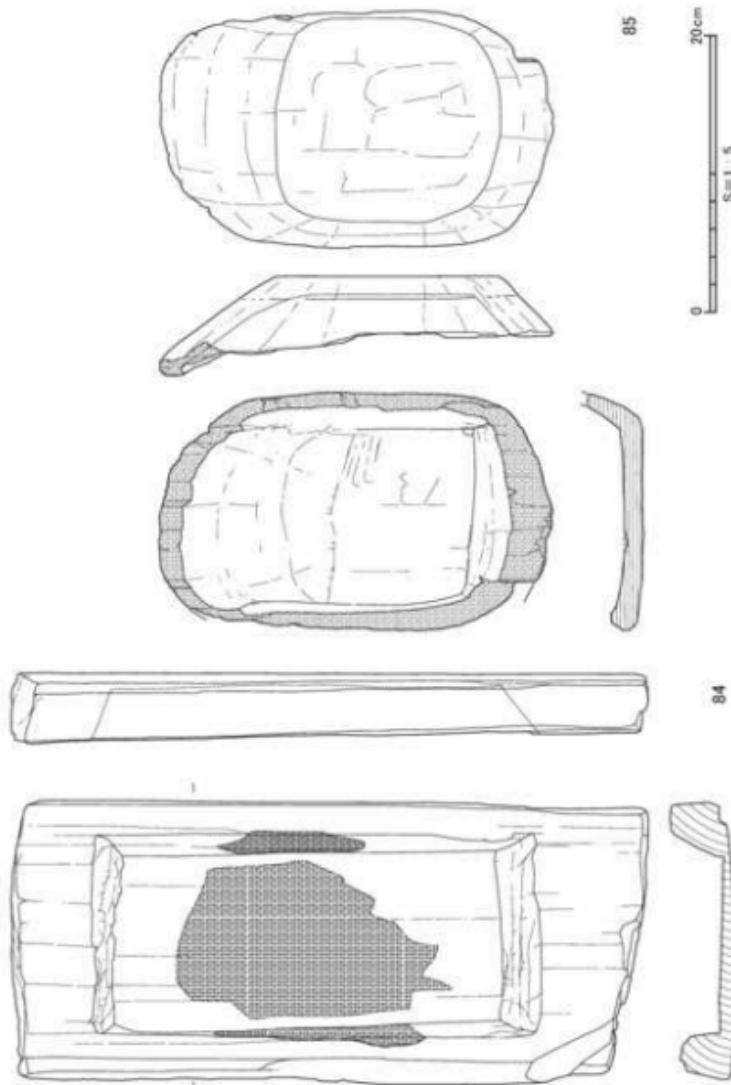
第22図 木製品9



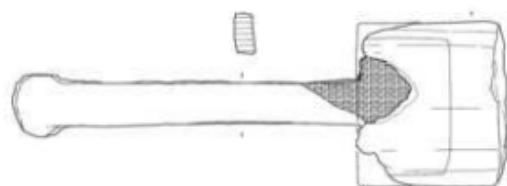
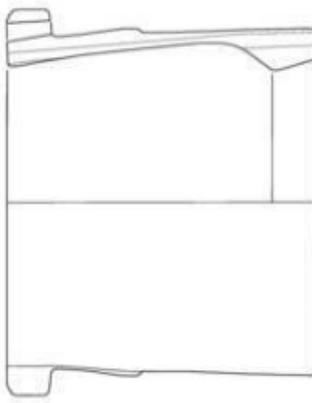
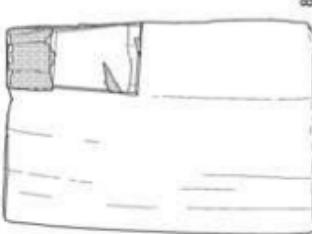
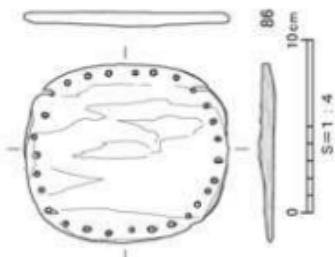
83



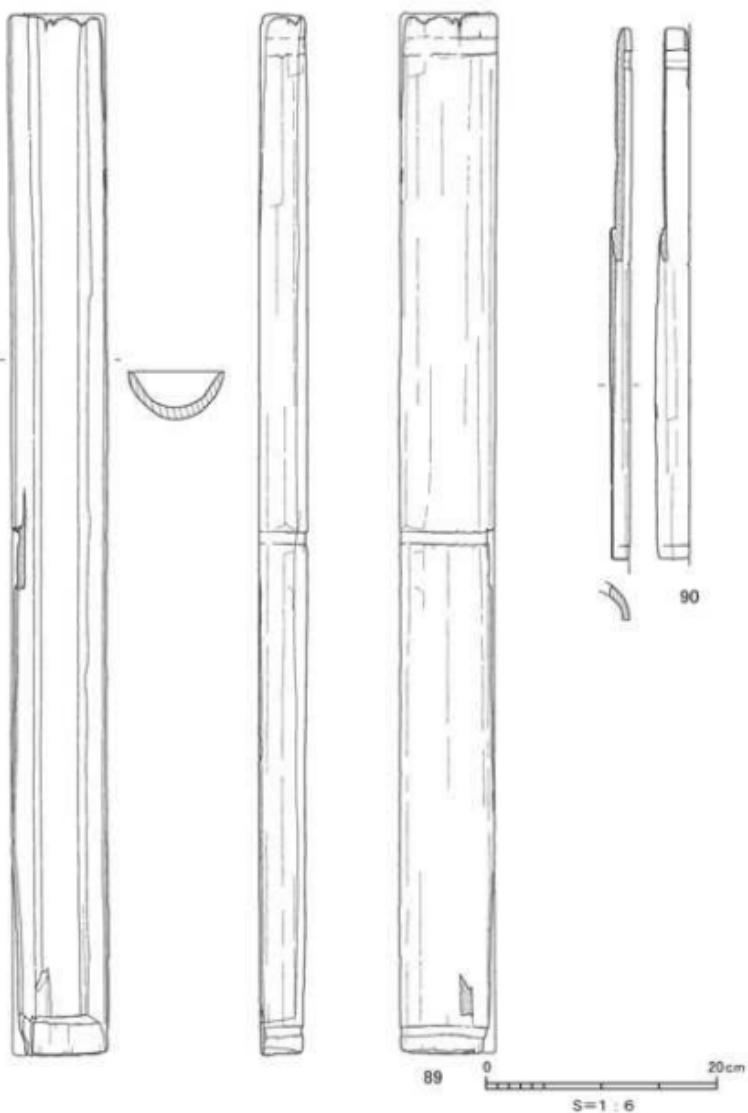
第23図 木製品 10



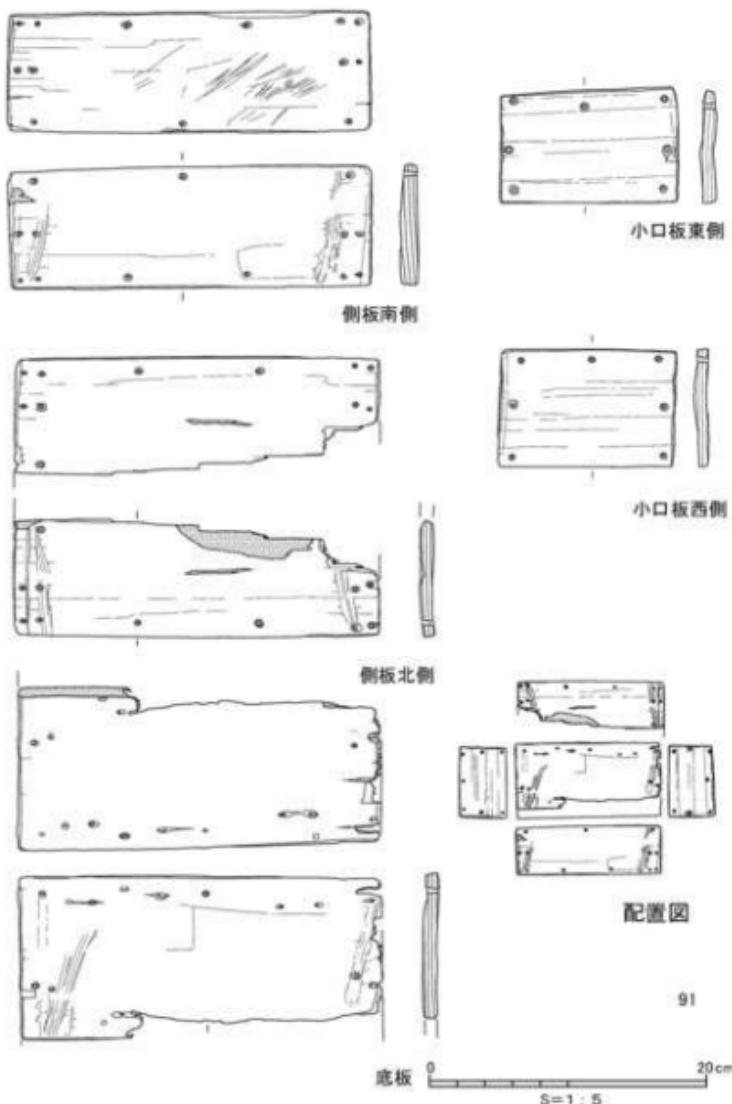
第24図 木製品11



第25図 木製品12

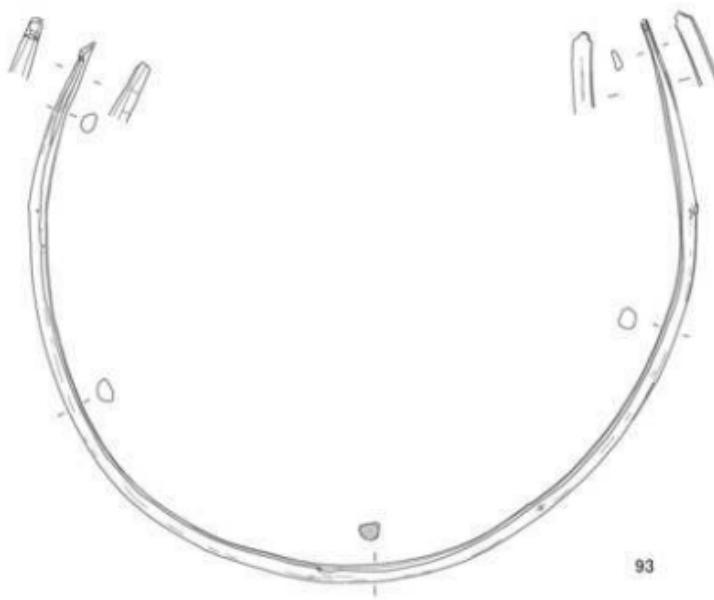


第26図 木製品13

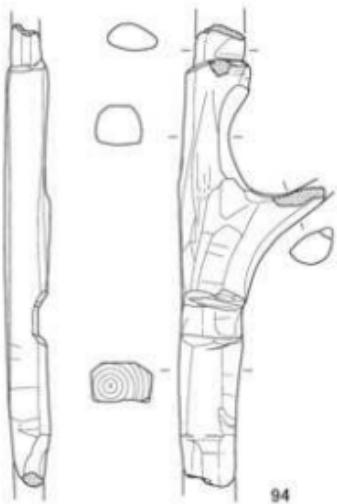


第 27 図 木製品 14

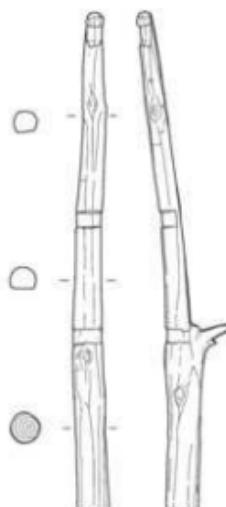
91



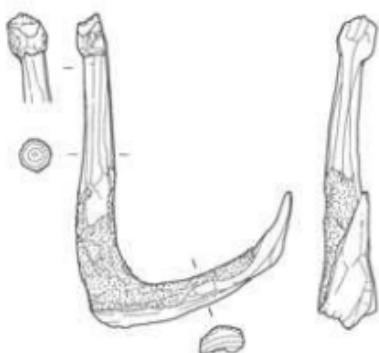
第28図 木製品 15



94



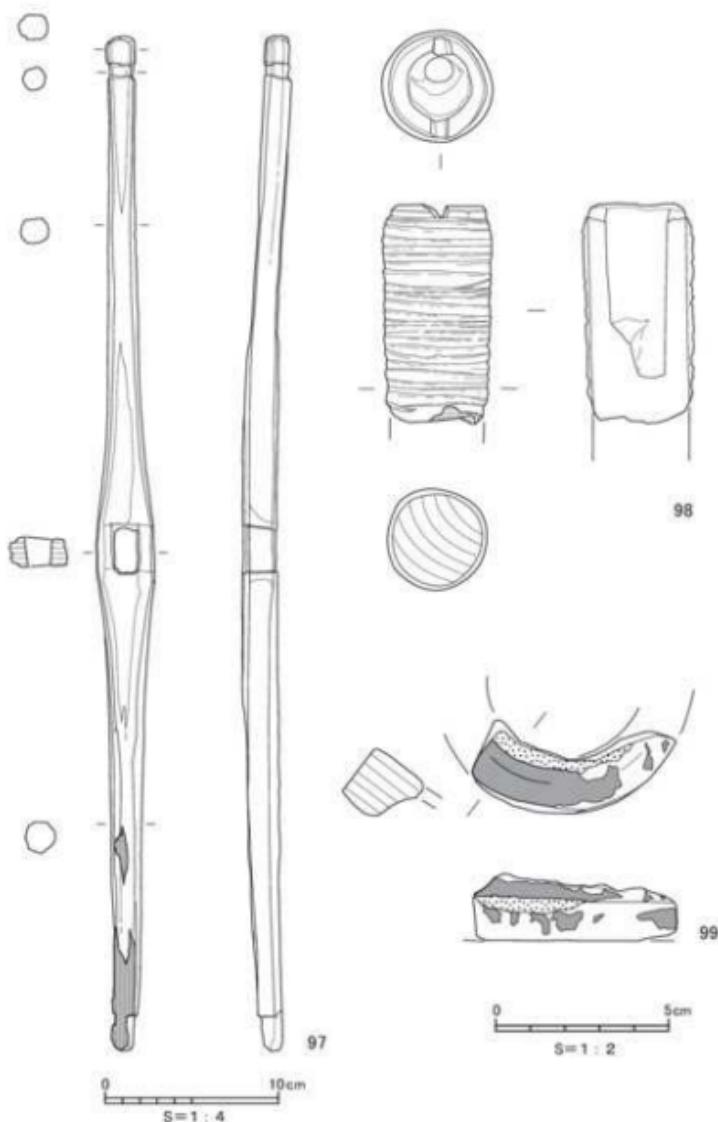
96



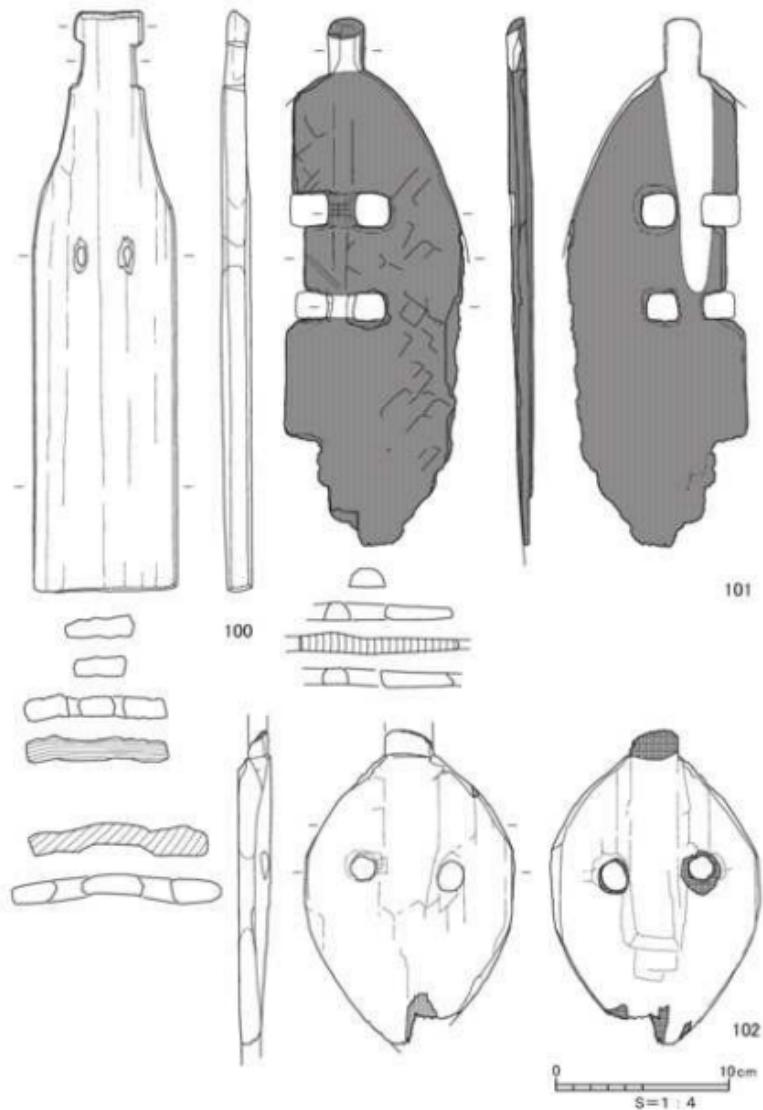
95



第29図 木製品 16

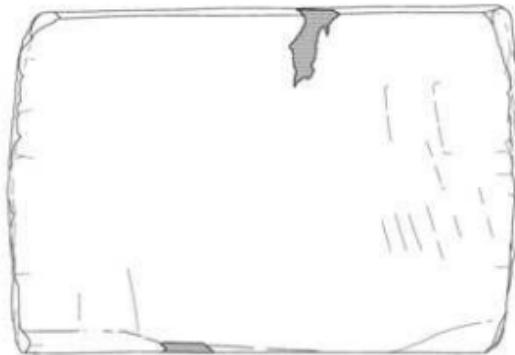
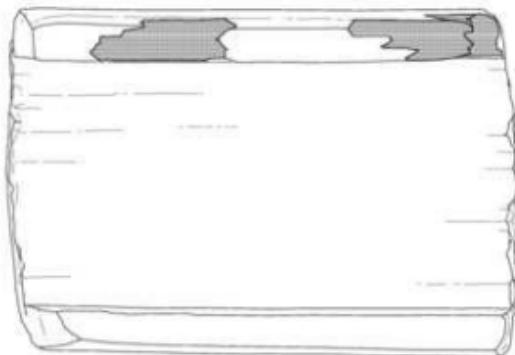


第30図 木製品 17

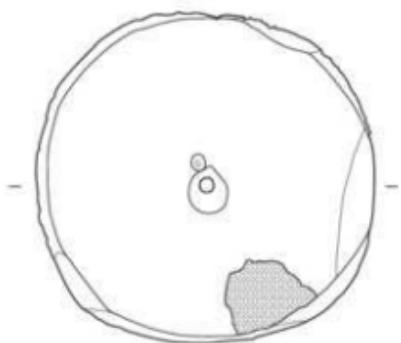


第31図 木製品18

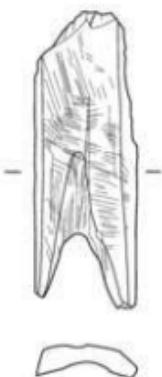
103



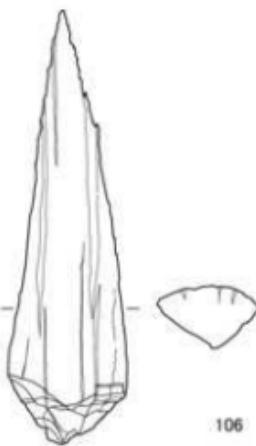
第32図 木製品17



104



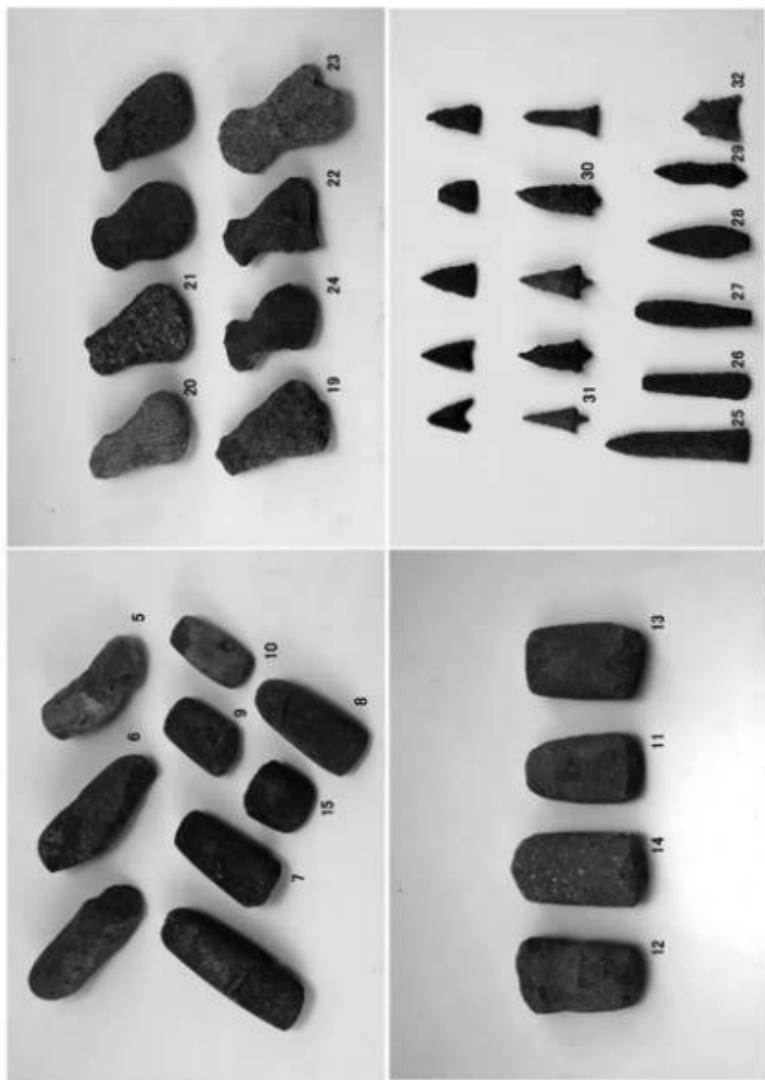
105

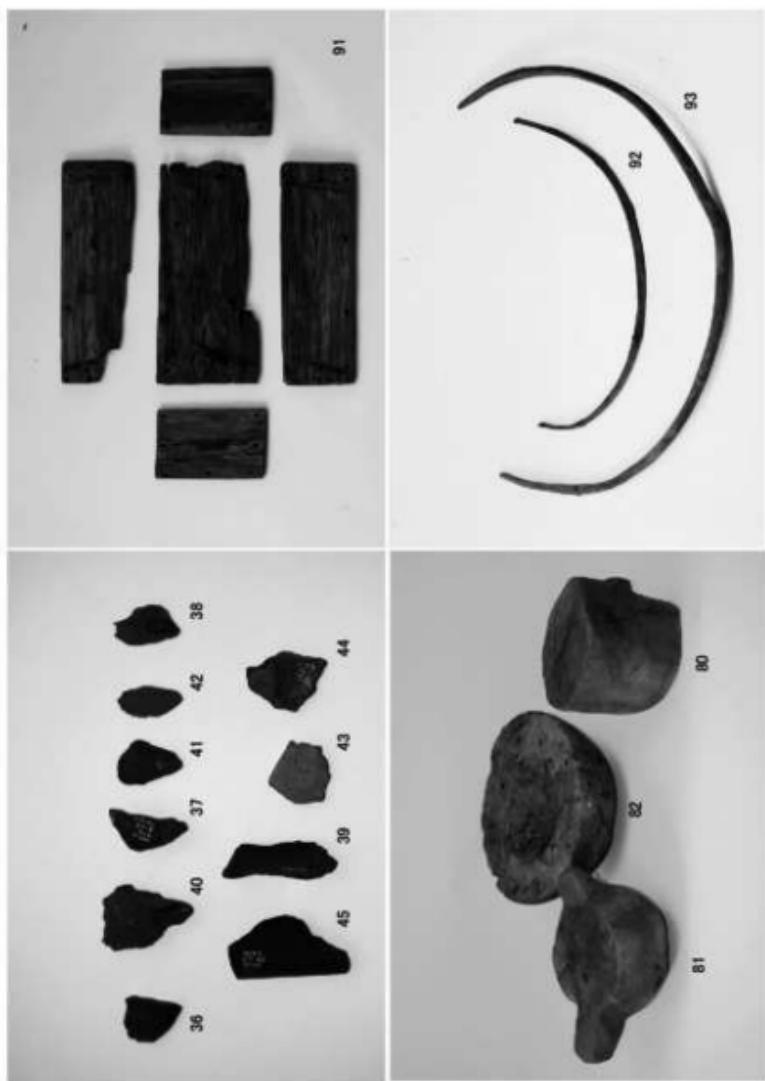


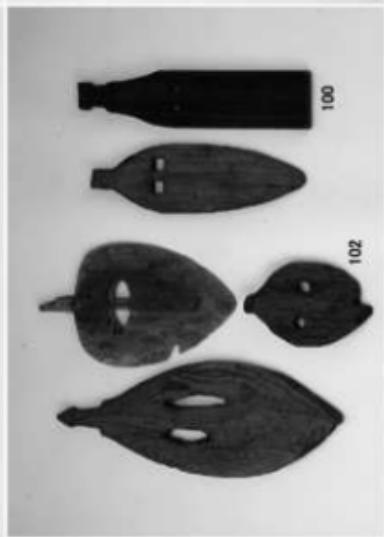
106



第33図 骨製品









1



3



4



16

17

18



34

33



35



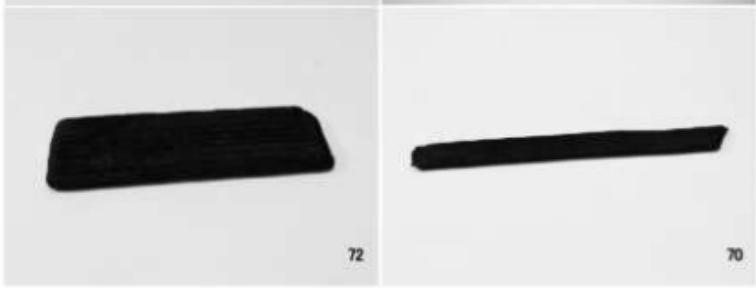
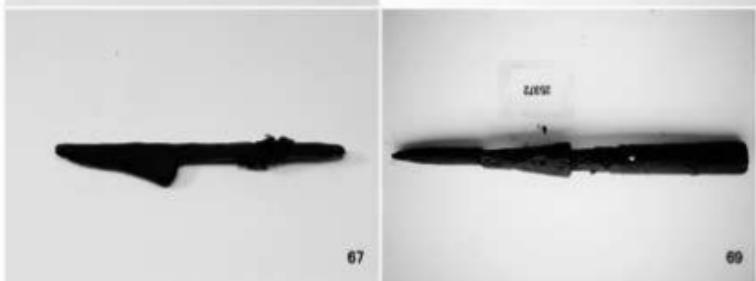
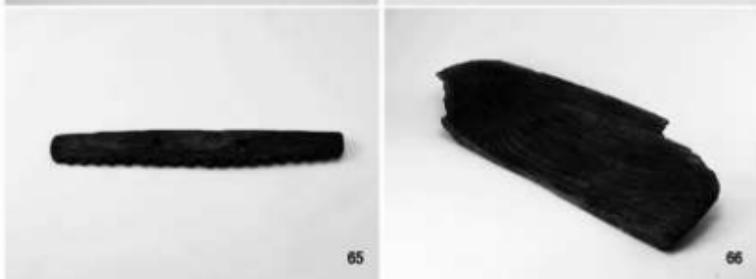
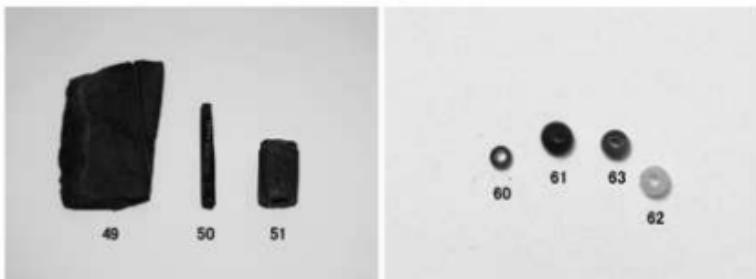
48

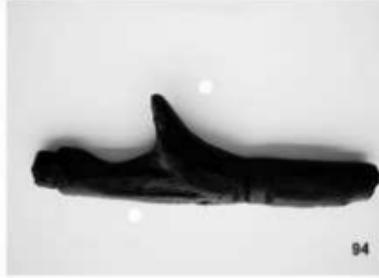


46

47

5





参考文献

- 石川考古学研究会 1995『装身具 I』石川県考古資料調査・集成事業報告書
岡山市教育委員会 2005『南方(済生会)遺跡』
春日井市教育委員会 2001『平成 13 年度企画展「松河戸遺跡展」』図録
河野一隆 1997「奈良の弥生人」『古代文化』49巻4号
小松市教育委員会 2003『八日市地方遺跡 I』
鳥取県埋蔵文化財センター 2005『青谷上寺地遺跡出土品調査報告書 1 木製容器・かご』
兵庫県教育委員会 1996『玉津田中遺跡』第5分冊
山田昌久 2003『考古資料大観』第8巻 弥生・古墳時代 木・織維製品
奈良文化財研究所『木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所 史料第36冊

協力者・協力機関(50音順、敬省略)

(個人)

浅野良治、石黒立人、上原真人、工楽普通、篠宮 正、永井宏幸、中村晋也
橋本澄夫、林 大智、樋上 昇、久田正弘、深澤芳樹、藤田三郎、本田秀生、
安 英樹、山田昌久、若林邦彦

(機関)

越前市教育委員会、上越市総務部公文書図書館、上越市教育委員会、福井県
教育庁埋蔵文化財調査センター、妙高市教育委員会

まいぶん講座フォーラム報告2

弥生時代の北陸を探る

—考證 八日市地方遺跡とは—

2009年3月31日発行

■編集・発行

石川県小松市教育委員会埋蔵文化財調査室

〒923-0801 小松市圓町ホ62番地

電話 0761-24-8132

■印刷・製本 英文堂印刷